ることがよろしい、湯王が網を祝して鳥をにがしてやつた様に網は大きく張つてもらひたい。かくすれば赤雀も翻然としてくるであらう、黄龍も媒をからずにあらはれるであらう。』じぶんは傅巖の野に夢みられた傅説の様な賢人ではなく、隱遁ぶりは屋後の牆に穴をあけてにげた顔闔に似てゐる。むかしから江湖にうろついてゐる客といふものはくらいところに置いてある心中は火の消えた灰の様なものである。じぶんひとりではない。それが常である。』

秋日荆南、送石首薛明府辭滿告別、奉寄薛尚書、頌德敍懷、斐然之作、三十韻

秋日荆南にて、石首の薛明府が滿を辭し告別するを送り、薛尚書に寄せ奉る、德を頌し懷を敍す、斐然の作　三十韻

南征爲客久。西候別君初。
歲滿歸鳧舄。秋來把雁書。
荆門留美化。姜被就離居。
聞道和親入。垂名報國餘。
連枝不日竝。八座幾時除。
往者胡星孛。恭惟漢網疎。
風塵相澒洞。天地一丘墟。
殿瓦鴛鴦坼。宮簾翡翠虛。
鈎陳摧徼道。槍纛失儲胥。
文物陪巡狩。親賢病拮据。
公時呵貌貐。首唱卻鯨魚。
勢愜宗蕭相。材非一范睢。
屍塡太行道。血走浚儀渠。
滏口師仍會。函關憤已攄。
紫微臨大角。皇極正乘輿。
賞從頻峩冕。殊恩再直廬。

【原注】再直廬者。薛舊執金吾。新授羽林軍。前後二將軍也。

南征客と爲る久し、西候君に別るる初。
歲滿ちて鳧舄歸る、秋來りて雁書を把る。
荆門美化を留め、姜被離居に就く。
聞道和親して入ると、名を垂る報國の餘。
連枝日ならずして竝ばむ、八座幾時か除せられむ。』
往者胡星孛す、恭しく惟ふ漢網の疎なりしことを。
風塵相澒洞たり、天地一丘墟なり。
殿瓦鴛鴦坼け、宮簾翡翠虛し。
鈎陳徼道摧け、槍纛儲胥を失す。
文物巡狩に陪す、親賢拮据に病む。』
公時に貌貐を呵す、首唱鯨魚を卻く。
勢は愜ふ蕭相を宗とするに、材は一范睢のみに非ず。
屍は塡む太行の道、血は走る浚儀の渠。
滏口師仍りて會す、函關憤已攄ぶ。
紫微大角に臨む、皇極乘輿正し。
賞從頻りに峩冕、殊恩再び直廬。

豈惟高(四八)衞霍。曾是接(四九)應徐。
降集翻(五〇)翔鳳。追攀絕(五一)衆狙。
侍臣雙(五二)宋玉。戰策兩(五三)穰苴。』
鑒(五四)徹勞(五五)懸鏡。荒蕪(五六)已荷(五七)鋤。
嚮來披(五八)述作。(五九)【原注】石首處。見公新文一通。
重此憶吹(六〇)噓。
白髮甘(六一)凋喪。青雲亦(六二)卷舒。
經綸功不(六三)朽。跋涉體(六四)何如。
應訝(六五)耽(六六)湖橘。常餐占野蔬。
十年嬰藥餌。萬里狎(六七)樵漁。
揚子淹投(六八)閣。鄒生惜曳(六九)裾。
但驚飛(六九)熠(六九)燿。不(七〇)記改(七一)蟾蜍。
煙雨封巫峽。江淮略(七二)孟諸。』

豈に惟だ衞霍より高きのみならむや、曾て是れ應徐に接す。
降集翔鳳翻へる、追攀衆狙を絕つ。
侍臣雙宋玉、戰策兩穰苴。』
鑒徹懸鏡を勞す、荒蕪已に鋤を荷ふ。
嚮來述作を披く、
重ねて此に吹噓を憶ふ。
白髮凋喪に甘んず、青雲亦た卷舒す。
經綸功朽ちず、跋涉體何如。
應に訝かるなるべし湖橘に耽るを、常餐野蔬を占む。
十年藥餌に嬰る、萬里樵漁に狎る。
揚子淹しく閣より投ず、鄒生曳裾を惜む。
但だ驚く熠燿飛ぶに、記せず蟾蜍改まるを。
煙雨巫峽を封ず、江淮より孟諸を略せむ。』

湯池(七三)雖險固。遼海(七四)尙塡(七五)淤。
努力輸肝膽。休(七六)煩(七七)獨起(七八)予。』

湯池險固なりと雖へども、遼海尙ほ塡淤す。
努力して肝膽を輸せ、獨り予を起すに煩はさるるを休め」
「よ。』

【字解】【一】石首薛明府　石首縣の縣令薛某をいふ。本卷の「夏夜李尙書筵送宇文石首赴縣聯句」に於てのべおきし如く、卷十八「赤甲」詩によれば薛某は薛據なるが如し。宇文晁と更代せしなり。【二】辭滿告別　縣令の任期滿ちしによりて之を辭し、知人に別れを告ぐ。【三】薛尙書　仇注に薛明府は尙書の弟なりといへり。又朱注によりて尙書は薛景仙なるべしとせり。【四】頌德敍懷　薛尙書が德を頌し、自己のおもひをのぶ。【五】斐然之作　斐は文ある貌、斐然　成章は「論語」公冶長篇にみゆ。自作を斐然といふこといかがとおもはるれど、これ文章に力を用ひしことをいへるならんか。【六】南征爲客　自己をいふ。【七】西候　候は亭なり、晉の孫楚に「征西官屬送於陟陽候」詩あり、陟陽候とは陟陽亭をいふ。西候は蓋し江邊の西亭。【八】別君　君は薛明府をさす。【九】歲滿　三歲の任期滿つ。【一〇】歸鳧舄　葉縣の令王喬鳧舄の故事、以て薛に比す。【一一】把雁書　雁書は手紙をいふ、卽ち薛尙書に寄すべき此の詩篇をさす。【一二】荆門　荆州の門口の意ならん、石首縣は江陵(荆州)の東南にあり。【一三】留美化　よき治化をのこす。【一四】姜被　後漢の姜肱、兄弟三人皆孝行を以て名を著はす、肱年長す、二弟と被を共にして臥す。被は夜具なり。【一五】就離居　離居の兄に就く。【一六】和親入　大曆二年十一月、和蕃使・檢校戶部尙書薛景仙、吐蕃より使して還る、吐蕃の首領論泣陵、景仙に隨つて入朝す。入とは景仙が入朝せしをいふ。【一七】垂名　景仙が名を垂れるをいふ。【一八】連枝　兄弟をいふ、明府尙書二人。【一九】八座　六部尙書と左右僕射の地位とをいふ。卷十八(五三頁)句解をみよ。【二〇】除　除任さるるをいふ。故官を除き新官に就く、因つて除といふ、と。【二一】胡星孛　胡星は旄頭、昴なり、安祿山をさす、孛は星妖の躔るをいふ。【二二】漢網疎　漢は唐をいふ。網とは刑罰のあみ。【二三】澒洞　もやくやする貌。【二四】丘墟　城郭人家の焚きはらはれしあとをいふ。【二五】鴛鴦坼　鴛鴦は鴛鴦の形をつけた瓦、坼はわれること。【二六】翡翠虛　翡翠の羽で飾つた簾がからになる、內部の妃嬪がにげだせしこと。【二七】鈎陳　星宿の名、天の紫微宮を衞る、今借りて宿衞の地をいふ、卷四(三〇一頁)句解をみよ。【二八】徵道　徵は循ふなり、めぐるなり、徵

道は警備の士の巡回する道路をいふ。鈞陳・徼道は西都賦にみゆ。【二九】槍纛失儲胥　長楊賦に、木擁槍纛、以爲儲胥、とあり。儲胥は蕃(藩)落の類なりといへり。本邦の「竹やらい」の類なり。顔師古は高儲蓄、以待所須也、といひ、儲藏の義とせり。これは其の物の用についていへるなり。木擁とは木もて柵をつくること、槍纛とは木柵の外をさらに竹槍を以てかさぬるなり。【三〇】文物陪巡狩　不備の句。文物とは兵亂匆卒の際の禮儀制度等をいふ。句意はかかる文物のなりに百官が巡狩に陪したりといふなり。巡狩とは肅宗の靈武地方の奔走をさす。【三一】親賢　唐の宗室にて賢しき人をいふ。【三二】病拮据　拮据ははたらく貌、「詩」鴟鴞にみゆ。【三三】公　薛尚書。【三四】呵貘貙　呵は叱呵するなり、貘貙は貙に類し、虎爪あり人を食すと「爾雅」にみゆ。「述異記」には貘貙は獸中最も大なるもの、龍頭馬尾、長さ四百尺、善く走る、人を以て食と爲す、といへり。盧注に云ふ、薛景仙、陳倉の令たり、楊國忠が妻子及び虢國夫人を殺す、是れ呵貘貙なりと。【三五】卻鯨魚　鯨魚は賊徒に比す、盧注に云ふ、景仙、既に扶風を克復するや又賊兵を擊破す、是れ卻鯨魚なりと。【三六】勢愜宗蕭相　愜はかなふ、宗は尊ぶ、蕭相は漢の丞相蕭何なり、盧注に云ふ、時に軍中餉に乏し、景仙、賊衝を控禦し、江淮の米、襄陽より扶風に達するを得、其の功蕭何の關中に轉輸せしと相ひとし、但に范雎が城邑を攻拔せしのみならざるなりと。【三七】材非一范雎　范雎は魏齊の辱より逃れて秦に入り相となり、つひに魏齊の讎を復す。事は「史記」にみゆ。盧注は上にいだせり。【三八】太行道　太行は山の名、史思明の寇の在る所をいふ。【三九】浚儀渠　浚儀は縣の名、河南開封府に屬す。渠はほりわりの水、これは安慶緒の兵の在る所をいふ。【四〇】滏口　滏水の口なり。滏水は磁州滏陽縣西北鼓山より出づ、太行八陘の第四を滏口といふ、仇氏曰く、滏口は卽ち安陽河、時に王師共に此に會す、と。朱注に云ふ、此の詩の「滏口」數語を觀れば、東京を收めし時、景仙嘗て師に滏陽に會し、功を河北に立てしなり、と。【四一】函關憤已尠　函關は函谷關、河南の陝州にあり、祿山の亂に陷れらる。東京回復せらるるときはその憤已にのぶといふべし。【四二】紫微臨大角　紫微は大帝の座なり、大角は天王の座なり、紫微大角に臨むとは帝星、王座に臨むなり、肅宗の長安に還りしをいふ。【四三】皇極正乘輿　不備の句。皇極は大中、「尙書」洪範にみゆ。皇極とは大中の道立ちしをいふ。正乘輿とは乘輿（天子のおのりもの）が正位に返りしをいふ。肅宗の還京をいふなり。【四四】賞從　晉の文公、亡ぐるに從ひし者を賞せしこと。「左傳」僖公二十四年にみゆ。これ肅宗が靈武・鳳翔に扈從せし諸臣を賞せしことをいふ。【四五】義鬼　かんむりを高くす、高位にのぼるをいふ。【四六】殊恩　特別の御恩。【四七】再直廬　ふたたびれとまりの當番にでる。原注にみゆる如く、景仙はもと執金吾となり、新に羽林軍を授けらるといへり。これ再び禁中警衛の任にあたりしなり。【四八】高衞霍　衞霍の如く武功高きをいふ、衞霍は漢の武將衞青・霍去病なり。此の句は景仙が武功をいふ。【四九】接應徐　應徐は魏の太子賓客應瑒と徐幹をいふ。接とは交才其の歩を接するをいふ。此の句は景仙の文才をいふ。廣德二年正月に吐蕃京師を陷る。既にして去る。太子賓客薛景仙を以て南山五谷防禦使となす。景仙、太子賓客となりて文才あるにより應徐を以て比す。【五〇】翔鳳鳳を以て景仙の人品に比す。【五一】棄狙　多くのさる。小人物に比す。【五二】雙宋玉　宋玉は屈原の弟子にして楚の襄王の時の賦家なり、景仙も亦一の宋玉といふべきものなれば雙といへり。【五三】兩穰苴　穰苴は司馬氏、戰國の兵法家なり、景仙も亦一の穰苴といふべきものなれば兩といへり。【五四】鑒徹　鑒識がそこまでとほる。【五五】勞懸鏡　鏡は以て鑒識の明かなるにたとふ。勞とは手かずをかけるをいふ。【五六】荒蕪　田野の地をいふ。【五七】荷鋤　すきをになひ農事に從ふをいふ。【五八】述作　薛尚書の作物をいふ。原注にみゆる「新文」是れなり。【五九】吹噓　いきを吹きかけること。世話をしてくれることをいふ。卷三（二一二三頁）句解をみよ。【六〇】白髮　以下四句は、余は舊解と見る所を異にす。鄙見を用ひて解く。白髮は自己の老態をいふ。【六一】甘凋喪　氣力のうせたるに甘んず。【六二】青雲亦卷舒　蓋し「水宿遺興」詩の浮雲亦有レ梯、の意、青雲今卷くと雖も他日舒ぶる時あるべきをいふ。仇注に白髮二句に對して白頭無意於青雲、所レ謂「荒蕪」也、とあるは余取らず。【六三】經綸功不朽　これは一般論にて自己若し經綸をなし得ば其の功朽ちざるべきをいふ。「水宿遺興」詩の勳庸思樹立の意。仇氏は薛が能く亂に戡ちしを指すとして薛に屬せしめたり。今取らず。【六四】跋涉體何如　舊本に作者の原注なりとして此の句の下に「公頃奉レ使和レ蕃」の六字あり。仇氏之を削れり。然れども仇氏は猶ほ此の句を以て薛が事とし、謂薛曾和蕃、とせり。本篇の原注と稱するものに信ずべからざるもの多し。勢愜宗蕭相の句下の「郭令公」、材非一范雎の句下の「諸名將」、及び此の跋涉の句下の六字皆是れなり。仇氏皆其の注文を去りて獨り本句下に注文の意をとりしは如何。余は此の句は自問の體とみる。跋涉は作者が旅途に山河を跋涉するをいふ。【六五】應訝　訝は薛がいぶかるなり。【六六】耽湖橘　耽は作者がふけるなり。湖橘は洞庭湖のみかん。潭州（長沙）に橘洲あり。【六七】揚子淹投閣　揚雄が故事、卷三（一八八頁）句解をみよ。自ら久しく蜀に居るに比す。【六八】鄒生惜曳裾　鄒生は漢の鄒陽、曳裾は王門にすそをひきすること、出仕するをいふ。鄒陽が書に見ゆ。惜とは惜みて裾を曳かざるなり、卽ち諸侯に干謁せざるをいふ。亦自ら比す。【六九】飛燼燿　燼燿は螢火

なり。燐燿飛ぶとは歳月の換るをいふ。【七〇】不記　記は記憶。【七一】改蟾蜍　蟾蜍は三本足のひき、月の中に居ると考へらるるもの、以て月をいふ。蟾蜍改まるとは月の頻りに移るをいふ。【七二】江淮略孟諸　不備の句、江淮の地方を經てそれより孟諸の地方を巡行し過ぐべきをいふ。洛陽の方へと歸らんとするをいふなり。略とは巡行するなり。孟諸は澤の名、河南歸德府商邱縣東北にあり、卷十六（五五五頁）「大澤」の句解をみよ。【七三】湯池　池は城の壕をいふ、湯を池とするは要害なり。これ長安城をさす。【七四】遼海　遼東の海、これ河北より遼東にわたる地方をさす。大曆三年六月、幽州兵馬使朱希彩、朱泚・朱滔と共に節度使李懷仙を殺し、自ら留後と稱す。朝廷制する能はず。【七五】塡淤　壅泥をいふ、泥でうづめられ水がふさがる。【七六】努力輸肝膽　薛に向つて希望するなり、輸はいたす、君に心をささぐるなり。【七七】休煩　煩は手かずをかけること。【七八】起予　孔子、子夏と詩について問答し、起レ予者、商（子夏の名）也、といへること「論語」八佾篇にみゆ。ここは詩の問答とは關係なく、作者の廢頽してをるのを起してくれる意、即ち自己を個人的にひきたててくれることの意に用ひたり。

【題義】秋の日に荆南で石首縣令薛君が任期が滿ちて別れを告げ旅立つのを送り、かねて薛君の兄である薛尚書に寄せた詩。一方に尚書兄弟の德を頌し、自己の懷を敍し、文章に意を用ひた作である。大曆三年秋、荆南にての作。

【詩意】自分は南征してながらく客となつてをるが、いま江邊の西亭で初めて君とお別れをする。君は縣令の任期が滿ちて王喬の鳧が朝廷へ歸つたごとくかへられるので、自分は秋にあたつてこの雁の手紙をとつて君のお兄うへにやらうとおもふのである。君は荆門の地方にうるはしい政治上の感化をとどめて、これまで離れてゐた兄うへの許に就いて姜肱兄弟の樣に夜具を共にきる親しさを味はれる。きけば兄うへは吐蕃と和親してこのたび入朝されたとのことだ。これは國恩に報いたあげく名を後世に垂れられるに至つたものである。御兄弟は日ならずして枝を連ねた樹の樣にお竝びになるであらう。八座の顯位にもやがて除任せられることになるとおもはれる。』前年には胡星がやどつて安祿山の兵亂がおこつた。あのときはよくかんがへてみると漢朝（唐）の法網があらすぎたのである。あれから風塵がもやくやと起つて、天地は一の廢墟の樣になつてしまつた。宮殿の鴛鴦瓦はさけてしまふ、翡翠の羽でかざつた御簾はなかがからつぽになつてしまふ、鈎陳警衛の位に在る巡邏の道路はうちくだかれる、竹槍をかさねてつくつた矢來はなくなつてしまふ。諸制匆卒のうちに百官は巡狩のおともをし、皇族の賢明なおかたもずゐぶんはたらくために心をやましめられた。』そのとき兄うへは貌貐にも比すべきわるものを叱呵せられ、まつさきに鯨魚の樣な惡黨をしりぞけることを唱へられた。ちやうどその勢は漢の時丞相蕭何を宗とし尊んだのとにてゐるし、その材能は單に他國を攻拔することを主とした范睢たるのみにとどまらなかつた。當時賊の屍は太行山の道をうづめ、血は浚儀の渠に流れ走つた。王師はそのまま滏口に會合し、函關を陷れられた憤りは已にのぶることができた。それから紫微の帝星が大角の王座にのぞみ、大中の道立つて乘輿はふたたび正位におかへりになり（肅宗京に還る）、天子は從者を褒賞せられて兄うへはしきりに高き冕をいただくことになり、特別の御恩によつてふたたび宮中の廬に宿直せられることになつた。兄うへは衞青・霍去病よりも勳功が高いばかりではなく、かつては應場・徐幹のあとをつぐほどの文才をもつてをられた。兄う

へが朝廷にをらるるのはたとへば鳳凰が天上から降りて集りかけてゐる様なもので、他の多くの狙の様なものどもはそれをあとから攀ぢようとしてもだめである。兄うへがをらるることはたとへば侍臣に二人の宋玉があるごとく、また戰略では二人の司馬穰苴がをる様なものである。』その兄うへはすきとほる様な鑒識を以てかつてわたくしのために明鏡を懸けてくださつたが、わたくしは荒れた田地ですでに鋤を荷ふ農夫になつてしまつた。このほどわたくしは兄うへの文章を拜見して、ふたたび兄うへのわたくしに對して御周旋くださるおこころざしをおもひだす。わたくしはいま白髮となつて意氣のうせたことに甘んじてをるが、青雲には卷舒がある、今卷かれてゐてもあるひは舒びるときがあるかもしれぬ。もし青雲がくりひろげられて經綸を施すことができるならば其の功業はながく朽ちぬのであるが、漂泊生活をして山河を跋渉しつつあるこのじぶんのからだはそも現に如何のありさまであるか。あなた（薛尚書）はわたくしが湖邊の橘を愛してをることをいぶかるることであらう、わたくしはつねに食事には野菜を主なものにしてをる、十年このかたは藥や滋養物にのみ身をつなぎ、萬里の遠くで樵夫や漁父になれしたしんでをる。揚子は閣上から飛びおりてから久しくなる、鄒生はやたらに王門に裾をひきずることはようせぬ。ただ驚かれるのはいつとなく螢火がとぶことだ。いつ月影がうつりかはつたかはおぼえきれぬほどだ。いままでは巫峽で煙雨に封じこめられてゐたが、これからは江淮の地方から北をめぐつて孟諸のあたりまでゆかうとおもふ。』京師（長安）の金城湯地は險固ではあるが、遼海の地方はまだどろでうづまつてをる。かやうな亂世であるからあなた（尚書）は努力して自己の肝膽を朝廷のためにいたしささげられよ、ひとりこの老いぼれおやぢをひいきしてくださるごときおてかずはおやめになるがよろしい。』

秋日荆南送石首薛明府辭滿告別奉寄薛尚書頌德敍懷斐然之作三十韻

杜少陵詩集　卷二十二

暮歸

霜黃碧梧白鶴棲。
城上擊柝復烏啼。
客子入門月皎皎。
誰家搗練風淒淒。
南渡桂水闕舟楫。
北歸秦川多鼓鞞。
年過半百不稱意。
明日看雲還杖藜。

【題義】暮に吾が家にかへりしときの感をのぶ。仇氏は大曆三年暮秋、公安（荊州府公安縣）にての

【字解】〔一〕暮歸　ひぐれに吾が家にかへる。〔二〕客子　自己をいふ。〔三〕皎皎　光白き貌。〔四〕搗練　きぬたにてねりぎぬをつく。〔五〕淒淒　つめたきさま。〔六〕桂水　廣西桂林府興安縣海陽山より出で南流す。灕水ともいふ。湘水は同じ山より出でて北流す。作者湘水を泝りて更に桂水にも棹さし南行する意あり。〔七〕秦川　長安杜陵の樊川をさせるならん、卷二（九七頁）句解をみよ。

作とし、浦氏は江陵にての作とせり。浦氏の説可なるに似たり。

【詩意】霜のために葉の黄ばんだ碧梧に白い鶴がやどつた。城のうへには柝をうつおとがしたりまた烏の啼くこゑがする。たびびとたる自分がいまもどつて門にはひらうとすると月の光は皎皎とかがやいてゐる。どこの家だか衣をうつ音がして風がつめたさうに吹いてゐる。自分は南行して桂水を渡らうとすれば舟楫の便がないし、北のかた故郷の秦川へかへらうとすれば兵亂の太鼓やつづみの音がやたらにしてゐる。五十歳以上にもなつて（このとき五十七歳）萬事はおもふやうにならぬ。あすはまた雲を看ながら藜の杖でもついてくらさうかい。

哭李尚書之芳

漳濱與蒿里。逝水竟同年。
欲挂留徐劍。猶迴憶戴船。
相知成白首。此別間黄泉。
風雨嗟何及。江湖涕泫然。
修文將管輅。奉使失張騫。

李尚書之芳を哭す

漳濱と蒿里と、逝水竟に同年。
留徐の劍を挂けむと欲するも、猶ほ迴す憶戴の船。
相知白首と成る、此の別黄泉を間つ。
風雨嗟何ぞ及ばむ、江湖涕泫然たり。
修文管輅を將ゐ、奉使張騫を失す。

史閣行人在。詩家秀句傳。
客亭鞍馬絶。旅櫬網蟲懸。
復魄昭丘遠。歸魂素滻偏。
樵蘇封葬地。喉舌罷朝天。
秋色凋春草。王孫若箇邊。

史閣行人在り、詩家秀句傳ふ。
客亭鞍馬絶ゆ、旅櫬網蟲懸る。
復魄昭丘遠し、歸魂素滻偏なり。
樵蘇葬地封ぜらる、喉舌朝天罷む。
秋色春草凋む、王孫若箇の邊ぞ。

【字解】【一】李尚書　李之芳なり。之芳が事は已に屢〻見えたり。之芳は蔣王李惲の孫なり。安祿山かつて奏して范陽司馬となす、祿山反するや之芳自ら投じて京師にかへる。代宗の廣德二年、御史大夫を兼ね吐蕃に使し留めらるること二歳にして歸ることを得たり。禮部尚書に拜し、太子賓客に改められる。黄生が注に、作者公安にありて李は江陵に沒せしなりといへり。公安にての作なるや否は明かならず。【二】漳濱與蒿里・逝水竟同年　漳濱は魏の劉楨が漳水の濱に疾にかかつた故事、蒿里は死者を送る挽歌、この二事並に李之芳をいひ、之芳病みてやがて死せしをいふ義となす。是れ舊解なり。余は漳濱は作者自己の江邊にやむをいひ、蒿里のみを李之芳についていひしものとみる。劉楨は魏の太子賓客たり、李之芳も太子賓客たり、故に漳濱は之芳をいふとは舊解のとる理由なり。次の「重題」の結尾二句はその理由にて應・劉をもて之芳に擬したり。然れども卷二十一「送高司直」詩に、長卿消渴再、公幹（劉楨が字）沈綿屢、とある公幹の句は作者自ら劉楨に比するなり。余は此の句もそれと同じからんと考ふ。逝水とは歳月の去りてかへらざるをいふ。同年とは同時の意、二句の意は同じ時の流れにあひて、之芳は病死して蒿里の挽歌をうたはれ、自己は江邊に疾むといふなり。【三】留徐劍　延陵の季子が徐國を過ぎ、徐君が己の佩びし劍を欲せしを知り、心に許しつつ與へずして去りしに、のちに徐を經しに徐君已に死したればその墓に劍を掛けて去りしといふ故事。句は李を弔せんと欲するをいふ。【四】猶迴憶戴船　王子猷が戴安道を訪はんとて雪夜に船を出し、途中にて興盡きてかへりし故事。仇氏は李が方に赴かんとして赴かざるをいふ義とす、これは迴を字義どほりに見しなり。

而して楊倫注には李の未死を疑ふ意とみたり。これは憶戴の船をこちらからあちら（李の方）へむけかへるとみるなり。楊注まされるに似たり。【五】鳳雨　「詩」に「風雨」あり、君子を思ふ詩とぜらる。實際の風雨をかれていへり。【六】江湖　公安の地方をいふ。【七】修文　顔回死して修文郎となりし話。卷十四（二三五頁）句解をみよ。【八】將管輅　魏の管輅未來の事を知る、弟に向ひて天は我に才明を與へしも年壽を與へざれば四十七八にならば死なんといひ、その如くに死したり。將とは天につれてゆかれしをいふ。【九】奉使張騫　之芳吐蕃に使せしを以て張騫を以て比す。【一〇】史閣　國家の歷史の編修所をいふ。【一一】行人　使者のこと、「周禮」に、大行人・小行人の職あり。行人在とは使者としての事功存するをいふ。此の句は上の修文の句を承く。【一二】客亭　李の客寓の亭をいふ。【一三】詩家秀句　この句は上りの靈柩。【一六】網蟲　蜘蛛のす。【一七】復魂　死者のたましひをよびかへすこと。【一四】鞍馬絕　主人在ちざれば來訪する鞍馬もなし。【一五】旅櫬　旅やど縣東南にあり。巳にみゆ。荆州江陵にての死なれども附近の名所をあげしなり、遠とは李の故郷よりとほきをいふ。【一九】歸魂　故郷へかへる李のたましひ。【二〇】素滲偏　滲は水の名、長安にあり、素は水の白きをいふ、偏とはかたよる、荆州よりみて僻遠なるをいふ。【二一】樵蘇　まきとり、しばかり。【二二】封　地もりをすること。【二三】喉舌　尙書の職をいふ、「後漢書」李固傳に、斗爲天之喉舌、尙書亦猶陛下之喉舌、とみゆ。【二四】罷朝天　朝廷へ參内することやみたり。【二五】凋春草　草のかれしぼむをいふ、時節をいへり。【二六】王孫　「招隱士」賦に、王孫遊兮不歸、春草生兮萋萋、とみゆ。王孫は「とのご」といふこと、ここは李をさす。【二七】若箇　「いかなる」の意、俗語なり。

【題義】禮部尙書、太子賓客李之芳の死を哭した詩。大曆三年秋の作。黃鶴は江陵にての作なるべしとせり。余も然らんと考ふ。

【詩意】時の流れは逝く水のかへらぬごとくであるが、同じ時にあなたは病沒せられて蒿里の挽歌をうたはるるに至り、自分は漳水の濱ともいふべきここで疾にかかつてをる。自分は延陵の季子のやうにあなたの墓に對して徐國にとどめたといふ劍を掛けようとはおもふが、やはりあなたがいきてゐる樣な氣がして憶戴の船をあなたの方へさしむけようかともおもふ。』おたがひわかいときから知りあうていまは白髮あたまになつた。このたびの別れは黃泉をへだてることになつた。風雨のをりにいくらあなたを思うてもそれはおひつかぬ。江湖の地で泫然と涕をながすばかりである。天は文章をつくらせるため管輅の樣なあなたをもつていつてしまつた。使命を奉じて異國までいつた張騫の樣なあなたは失はれてしまつた。ただ行人職としてのあなたの事功は歷史の編修所にのこつてをり、詩家として秀句が世間につたはつてをる。』いまあなたの客館では鞍馬のおとづるるものもとだえた。旅の靈柩にはくものすがかかつてゐる。たましひをよびかへすにも昭丘はとほいし、ふるさとへかへるにも滲水はあまりに僻遠である。樵蘇のものがではひりするあなたの葬地は地もりされた。喉舌の職にあつたあなたも參朝するといふことは永久にやんでしまつたが、古歌にうたうてある樣にほんに慕はしいとのごともいふべきあなたはどこにどうしてござることやら。』

重題

重ねて題す

涕灑不能收。哭君餘白頭。　涕灑ぎて收むる能はず、君を哭する白頭を餘す。

兒童相識盡。宇宙此生浮。
江雨銘旌濕。湖風井徑秋。
還瞻魏太子。賓客減應劉。

兒童相識盡く、宇宙此の生浮ぶ。
江雨銘旌濕ひ、湖風井徑秋なり。
還た瞻る魏の太子、賓客應劉を減せしことを。

【原注】李公薨於太子賓客。

【字解】〔一〕此生浮　生涯のたよりなきをいふ。〔二〕銘旌　死者の姓名を錄したはた。〔三〕井徑　田地のこみち、田間を過ぐるによりていひしものならん。或は墓の隧道をいふとの說あるも、李の柩はここに埋むるものにあらざればしか見なすことを得ず。〔四〕魏太子　曹操が太子曹丕をいふ。〔五〕應劉　應瑒、劉楨、魏の太子賓客にて文才あり。以て之芳に比す。

【題義】前篇已に李之芳を哭してなほ足らず、重ねてかきつけた詩。

【詩意】自分は涕がそそがれて始末にをへぬ。あなたを哭するものこの白髮あたまの自分だけがのこつてゐるのだ。こどものときからの識りあひはあなたでみんなおしまひになつた、宇宙のひろいあひだにじぶんの生涯はふわふわ浮いてゐる樣なものになつた。江上の雨にあなたの銘旌はうるほされる、湖邊の風に田間のこみちの秋をおぼえる。あふぎみれば魏の太子もその賓客としての屬僚に應劉の如き文才ある人が減つたとおなじである。

哭李常侍嶧二首　　李常侍嶧を哭す　二首

一代風流盡。修文地下深。
斯人不重見。將老失知音。
短日行梅嶺。寒山落桂林。
長安若箇伴。猶想映貂金。

一代風流盡く、修文地下深し。
斯の人重ねて見えず、將に老いむとして知音を失す。
短日に梅嶺を行く、寒山に桂林落つ。
長安若箇の伴か、猶ほ想ふ映貂の金。

【字解】〔一〕李常侍嶧　散騎常侍李嶧、散騎常侍に左右あり、左は門下省に、右は中書省に隸す。過失を規諷し、侍從顧問を掌る。〔二〕修文　前篇「哭李尚書」詩句解をみよ。〔三〕斯人　李常侍をさす。〔四〕行梅嶺　梅嶺は大庾嶺、梅を以て名あり、廣東北境にあり。行とは常侍の旅櫬のゆくをいふ。仇注に李常侍は蓋し廣南に死して長安に歸葬するなりといへり。〔五〕寒山落桂林　寒山は秋より以後の山をいふ、落桂林とは桂樹の葉落つるをいふ、以て常侍の死を比す。謝靈運が詩句に、桂木淺＝寒山＝とあり、今逆に用ひたり。〔六〕若箇伴　若箇は若干箇（いくばく）なり。伴は伴侶。〔七〕映貂金　唐制、侍中の冠には金蟬をつけ貂尾を弭む。映貂金とは貂尾に映ずる金蟬の色、卽ち常侍の冠飾をいふ、其の生時の姿を想ふをいふなり。

【題義】散騎常侍李嶧を哭した詩。第二首に「江漢」の語あれば、大曆三年秋冬間、荆南にての作なるべし。黃鶴は冬江陵作とせり。

【詩意】君は地下に深く文を修め去り、一代の風流もここに盡きた。君の如き人は二度と見ることができぬ、自分は老いかかつて知己を失つてしまつた。君は寒山に桂樹の落つるとき、日景の短きとき

に梅嶺をとほつて長安へかへる。長安ではどれだけの舊友がゐて金蟬に貂尾をはさんだ君が生前の姿を想ひうかぶるであらうか。

〔一一〕

青瑣陪雙入。銅梁阻一辭。
風塵逢我地。江漢哭君時。
次第尋書札。呼兒檢贈詩。
發揮王子表。不媿史臣詞。

〔一一〕

青瑣陪して雙び入る、銅梁一辭に阻たる。
風塵我に逢ふ地、江漢君を哭する時。
次第書札を尋ね、兒を呼びて贈詩を檢せしむ。
發揮す王子表、媿ぢず史臣の詞。

【字解】〔一〕青瑣　宮門をいふ。〔二〕陪雙入　常侍に陪從して二人にて入る。〔三〕銅梁　重慶府（唐時の渝州）に屬する縣の名。事は明かならず、作者必ず嘗て李と銅梁に會して之に別を告げしことあるに似たり。李は當時銅梁に官たりしものか。〔四〕阻一辭　一辭以後阻隔するをいふ、一辭とは一たび辭去するなり。〔五〕風塵逢我　銅梁にての會をいふ。〔六〕江漢哭君　荆州にての哭をいふ。〔七〕次第　順序をおひつぎつぎに。第は弟の音、兒と相對す、詩家之を借對（字音を借りたる對句）と稱す。〔八〕書札　常侍が作者に寄せしてがみ。〔九〕贈詩　常侍が作者に贈りし詩。〔一〇〕發揮　表をして光輝あらしむるをいふ。〔一一〕王子表　史には王子表あり、宗室の人人を表につくりて示す、李常侍は宗室なれば王子表中に記載さるる人なり。〔一二〕不媿史臣詞　史臣は修史官をいふ、史官の記する言に對して媿づる所なきりつぱなる行あるをいふ。

【詩意】自分はみやこにゐたときはあなたに從ひ青瑣の宮門をふたりしてはひつたものだ。それが銅梁でおいとまごひしてからへだたつてゐた。あのとき風塵のなかでおであひしたところ。いまはまたこの江漢の地であなたの逝去を哭するとき。（なんといふ變化であるか）。あまりの慕はしさにつぎつぎとあなたのお手紙をたづね、こどもにいひつけてあなたから贈られた詩をしらべださせる。あなたの如きは史上の王子表の光輝をますものであつて、史臣のほめことばに媿ぢぬ行ひをもつたものである。

舟出江陵南浦奉寄鄭少尹審

舟江陵の南浦を出づるとき、鄭少尹審に寄せ奉る

更欲投何處。飄然去此都。
更に何の處にか投せむと欲する、飄然として此の都を去る。
形骸元土木。舟楫復江湖。
形骸元土木、舟楫復た江湖。
社稷纏妖氣。干戈送老儒。
社稷妖氣纏ふ、干戈老儒を送る。
百年同棄物。萬國盡窮途。』
百年棄物に同じ、萬國盡く窮途。』
雨洗平沙淨。天衝闊岸紆。
雨に洗はれて平沙淨く、天衝みて闊岸紆る。
鳴蜚隨汎梗。別燕起秋菰。
鳴蜚汎梗に隨ひ、別燕秋菰に起る。

棲託難高臥。饑寒迫向隅。
寂寥相呴沫。浩蕩報恩珠。』
溟漲鯨波動。衡陽雁影徂。
南征問懸榻。東逝想乘桴。
濫竊商歌聽。時憂卞泣誅。
經過憶鄭驛。斟酌旅情孤。』

棲託高臥し難し、饑寒向隅に迫る。
寂寥相呴沫す、浩蕩たり報恩の珠。』
溟漲鯨波動く、衡陽雁影徂く。
南征懸榻を問はむ、東逝乘桴を想ふ。
濫竊商歌に聽く、時に憂ふ卞泣の誅せられむことを。
經過鄭驛を憶ふ、斟酌せよ旅情の孤なるを。』

【字解】〔一〕江陵南浦　荆州の南方江浦。〔二〕鄭少尹審　江陵少尹鄭審、已に屢〻見ゆ。〔三〕此都　江陵をさす。〔四〕送老儒　老儒は自己をいふ。送とは干戈のために逐ひやられつつあることをいふ。干戈に送らるといひなせるなり。〔五〕雨洗　以下の四句は南浦の景をいふ。〔六〕鳴蠏　蠏はつくつく法師といふ蟬。〔七〕汎梗　水にうかべる棒切れ。〔八〕茲　まこも。〔九〕迫向隅　向隅の時にあたりて迫り來る。向隅とは衆人の中にて一人隅に向ひて悲しむをいふ。滿堂飲レ酒、有二一人一、向レ隅而泣、則滿堂之人、皆不レ樂矣、と「漢書」刑法志・「說苑」にみゆ。〔一〇〕相呴沫　呴沫とは魚に水あわをいきふきかくるなり。「莊子」にみゆ。鄭が自己に恩惠を施してくれしをいふ。〔一一〕浩蕩　とりとめなき貌。〔一二〕報恩珠　漢の武帝昆明池の魚を助け、魚之に珠を報いし故事。自己の報恩の志をいふ。〔一三〕溟漲　大海をいふ。江湖の水をかくいふ。〔一四〕衡陽　湖南の衡陽府。作者のゆかんとする地。雁は衡陽に至りて回るといふ。〔一五〕懸榻　後漢の陳蕃、高士徐穉が爲めに一榻を懸け、穉來れば供せしこと。穉は江西南昌の人、句は南昌を問はんとするをいふ。〔一六〕乘桴　「論語」にみゆ、いかだに乘りて海に浮ぶなり。〔一七〕濫竊　みだりにぬすむ、謙遜の辭なり、鄭が下の樣なことをしてくれしをいふ。〔一八〕商歌聽　商歌は商調の歌なり。此の句は寧戚の故事を用ひしや曾子の故事を用ひしや不明、戚が事は「呂氏春秋」に、曾子の事は「莊子」に出づ。並に已にみゆ。〔一九〕時憂　自己が憂ふるなり。〔二〇〕卞泣誅　卞和玉璞を得て楚王に獻じ、玉に非ずとして足をきられ、璞を抱きて荆山の下に哭す、と「韓非子」にみゆ。自己の危きをいふ。〔二一〕鄭驛　鄭當時驛を設けて賓客を送迎せしこと。已にみゆ。以て鄭審が自己を歡迎せしことに比す。〔二二〕斟酌　鄭に我が情をくみとつてくれといふなり。

【題義】南方への旅行をはじめようとして自己ののれる舟が江陵の南浦を出たときに江陵少尹鄭審に寄せた詩。作者この時公安に向つて出發せしなり。浦氏・楊氏等は作者は先づ江西に遊ぶ考なりしが中途に變更して湖南にゆくこととなせるなりといへり。ただ作者は山陰にゆきたしともいひ東海に浮びたしともいへば江西にゆきたしといひしとてその意志確立しをれりともいひがたく、余は湖南行が初志にて江西行はきまぐれの希望ならんと考ふ。詩は大曆三年秋、荆州を發せんとせしときの作。

【詩意】このうへまたどこへ身を投じようとするのか、自分はぶらりとこの都からたち去るのである。じぶんのからだは土木の如くみなしてあるがまた舟楫を以て江湖にのりだすのである。天下には妖氣がまとひ、干戈はしきりにこの老いぼれ儒者を逐ひやるのである。吾が百年の生涯は全くうちすてられた物同然であり、萬國いたるところみちがゆきづまつてをる。』（いま舟でみると）平かな沙は雨に洗はれて淨らかに、廣き天に呑まれて闊い江岸がうねつてをる。うかべる棒切れにくつついたまつくつく法師は鳴いてゆく、立ち去らんとする燕は秋のまこもから飛びあがる。じぶんはその身のおちつきばしよには枕を高くしてねてゐることはむづかしく、ひとりで悲しんでゐる際に饑寒がせま

つてきた。これまでさびしい生活のときあなたはこの涸れ水にすむ魚の様な自分に水泡のいきをふきかけてくださつた。それにじぶんは之に對して珠を以てご恩がへしをするみこみもありませぬ。』ゆくてにはひろき水に鯨魚の波が動き、衡陽のあたりには雁のゆく影がみえる。これから南方へでかけて陳蕃が懸榻のあとを問ひ、東にゆきては古人の様に桴にのつて海に泛びたいなどとおもひうかべてみる。あなたはこれまでじぶんが商歌するときみすてずにそれをきいてくださつたが、じぶんは時として卞和が璞を抱いて泣いたうへに誅殺されはせぬかとさへしんぱいするのである。自分はあなたの宅へしばしばいつて、鄭當時が驛を設けてやつた様な歡迎をうけたことをいまにおもひだす。どうぞあなたはいま如何にじぶんがさびしい旅ごころをもつてゐるかをくみとつてください。』

移居公安山館

居を公安の山館に移す

南國晝多霧。北風天正寒。
南國晝霧多し、北風天正に寒し。
路危行木杪。身迴宿雲端。
路危くして木杪に行く、身迴にして雲端に宿す。
山鬼吹燈滅。廚人語夜闌。
山鬼燈を吹きて滅す、廚人夜闌に語る。
雞鳴問前館。世亂敢求安。
雞鳴前館を問ふ、世亂に敢へて安を求めむや。

【字解】【一】移居　江陵より居を移すなり。【二】公安山館　公安は縣の名、荆州江陵府の南百二十里にあり。山館は山上の驛館。【三】行木杪　樹木のこずゑにあたる高處。【四】雲端　高處をいふ。【五】山鬼　山中にすむ怪物。【六】廚人　寮所の人たち。【七】夜闌　よふけ、即ちあけがた近きころ。【八】雞鳴　宿ぜし翌曉のとき。【九】問前館　この前館のみかたによりて本篇の解二樣となる。仇氏は前途の館、即ち公安より別地の館をさすととく。移りたて早早に前途の館を問ふとはせはしすぎる樣なれども、作者當時にありて必ず公安には一宿か二宿にてまた旅立つ考なりしならん、それが何かの都合にて遂にしばらく此にも寓することとなりしものとみるべし。浦氏は即ちこの公安の山館なりととく、浦氏の說は題の移居の二字をあまりに忠實にとりすぎたるものとおもはる。仇氏說是なり。【一〇】求安　安は安居。

【題義】江陵から公安の驛館へ居處をうつせしときの詩。

【詩意】南國には晝でも霧が多くてうすぐらく、北風が吹いてちやうど天が寒い。こんなをりに自分はあぶなげな路をとほつて木のこずゑのあたりをあるき、身ははるかに雲のゐるあたりに宿るのである。夜ふけに臺所の人たちがなにかはなしあうてゐる、山鬼が出てきて燈火を吹きけしたなどといふてゐる。雞の鳴くころ自分はまたゆくての驛館の都合などをひとにたづねてみる。それはこの亂世にどうしてひとつところにじつとおちついてすんでゐることなどを求めようぞ。敏活にうつりあるかねばならぬのである。

醉歌行、贈公安顏十少府、請顧八題壁

醉歌行、公安の顏十少府に贈る、顧八に請ひて壁に題せしむ

神仙中人不レ易レ得。　神仙中の人得易からず、
顏氏之子才孤標。　顏氏の子才孤標なり。
天馬長鳴待駕馭。　天馬長鳴駕馭を待つ、
秋鷹整レ翮當雲霄。』　秋鷹翮を整へて雲霄に當る。』
君不レ見東吳顧文學。　君見ずや東吳の顧文學、
君不レ見西漢杜陵老。　君見ずや西漢の杜陵の老。
詩家筆勢君不レ嫌。　詩家の筆勢君嫌はざるも、
詞翰升レ堂爲レ君掃。』　詞翰堂に升りて君が爲に掃ふ。』
是日霜風凍七澤。　是日霜風七澤に凍る、
烏蠻落照銜赤壁。　烏蠻の落照赤壁を銜む。
酒酣耳熱忘頭白。　酒酣に耳熱して頭白を忘る、

【字解】〔一〕顏十少府　公安の尉官顏某、十は排行、少府は尉官に對する敬稱。〔二〕顧八　八は排行か。朱氏は八の下に分を脫したるものにて顧八分文學（次篇の題には顧八分文學とあり）をさすといへり。〔三〕題壁　縣壁にかきつける。〔四〕神仙中人　漢の梅福、南昌の尉となる、之を神仙の尉といふ、仙尉は縣の尉官の故事となる。顏十は尉官なるによりて之を用ふ。〔五〕顏氏之子　顏十をさす。〔六〕孤標　獨立せるめじるし。〔七〕天馬　馬も次句の鷹もみな顏十の才幹をたとふ。〔八〕東吳顧文學　東吳は吳、江蘇省をいふ、顧の鄉土なり、文學と

感君意氣無所惜。　君が意氣に感じて惜む所無く、
一爲歌行歌主客。』　一に歌行を爲りて主客を歌ふ。』

は太子文學なり、顧、名は戒奢、太子文學・翰林待詔たり、なほ次篇にくはしく見えたり。〔九〕西漢杜陵老　西漢の二字は杜陵へのみかかる、杜陵は漢以來の地名なるによりかくいふ、老は老人、自己をいふ。〔一〇〕詩家筆勢　仇注に詩家とは自ら謂ひ、筆勢とは顧を謂ふとあれど首肯しがたし、余は「詩家の筆勢」（仇注にては「詩家と筆勢と」と訓む）といふことにて作者自己の揮毫のさまをいふとみる。〔一一〕詞翰升堂　仇注に詞は詩家を承け、翰は筆勢を承くとし、ここも「詞と翰と」（自己の詞と顧の筆と）の義とす。亦首肯しがたし、詞翰はもとより對立せる語なれどここは顧一人にかけていひ、特に翰の方に重きをおきていふ、顧は太子文學たれば書も詞も能くせしことを知るべし。詞翰升堂とは詞翰をよくする顧が顏十の堂に升るをいふ。〔一二〕掃　はらふ、かきなぐるをいふ。〔一三〕七澤　楚に七澤あり、其の小小なるものを雲夢といふと子虛賦にみゆ。〔一四〕烏蠻　已にみゆ、南蠻をいふ。〔一五〕赤壁　湖北武昌府蒲圻縣にあり、烏蠻は西に、赤壁は東にあり。〔一六〕酒酣耳熱　漢の楊惲が書に、酒後耳熱、魏の曹丕が書に、酒酣耳熱とみゆ。〔一七〕歌主客　主は主人、顏十をさす、客とは顧と自己とをさす。

【題義】醉歌の吟なり。之を作つて公安の尉官顏十に贈り、顧文學にたのんで縣の壁にかきつけてもらつた。大曆三年公安にての作。

【詩意】縣の尉官は世間にたくさんあるが神仙中の人といはるるほどのものは得易くない、ところがこの顏氏の子たる顏十は衆中に獨立しためじるしとなるほどの才をもつてをる。たとへば彼は天馬がながく鳴いて他の駕馭してくれるのを待つごとく、また秋の鷹が翮を整へて雲霄の高きに當つてをる樣なものである。』君見よ、ここに東吳の顧文學と、西漢の杜陵に住してゐる老人とがここに會し

た。詩家たる杜陵の老人の筆勢を君は嫌ひはせぬけれども、それよりもつと書をよくする東吳の顧文學がいま堂上に升つて君がために筆をふるはうとするのである。』けふは霜を帶びた風が吹いて、楚の七澤も凍らんとし、烏蠻の西から照らす夕ばえが遠く東のかたの赤壁の方までをふくんでゐる。自分は酒酣に耳があつくなつて頭の白くなつたことをうちわすれ、君の意氣に感じて何等惜む所もなく、もつぱらこの歌行を作つて主客のことをうたふのである。』

送顧八分文學適洪・吉州

顧八分文學が洪・吉州に適くを送る

中郎石經後。八分蓋憔悴。中郎が石經の後、八分蓋し憔悴せり。
顧侯運鑪錘。筆力破餘地。顧侯鑪錘を運らし、筆力餘地を破る。
昔在開元中。韓蔡同贔屭。昔在開元の中、韓蔡同じく贔屭す。
玄宗妙其書。是以數子至。玄宗其の書に妙なり、是を以て數子至り、
御札早流傳。揄揚非造次。御札早く流傳す。揄揚したまひしは造次に非ず。
三人竝入直。恩澤各不二。三人竝に入直す、恩澤各〻不二なり。
顧於韓蔡內。辯眼工小字。顧は韓蔡の內に於て、辯眼小字に工なり。
分日侍諸王。鈎深法更祕。日を分ちて諸王に侍す、深を鈎して法更に祕なり。
文學與我遊。蕭疎外聲利。文學我と遊ぶ、蕭疎聲利を外にす。
追隨二十載。浩蕩長安醉。追隨すること二十載、浩蕩長安に醉ふ。
高歌卿相宅。文翰飛省寺。高歌す卿相の宅、文翰省寺に飛ぶ。
視我揚馬間。白首不相棄。我を視る揚馬の間、白首まで相棄てずとす。
驊騮入窮巷。必脫黃金轡。驊騮窮巷に入る、必ず黃金の轡を脫せり。
一論朋友難。遲暮敢失墜。一たび朋友の難きを論ず、遲暮にも敢て失墜せむや。
古來事反覆。相見橫涕泗。古來事反覆す、相見て涕泗橫はる。
嚮者玉珂人。誰是青雲器。嚮者玉珂の人、誰か是れ青雲の器ぞ。
才盡傷形骸。病渴汚官位。才盡きて形骸を傷む、渴を病みて官位を汚す。
故舊獨依然。時危話顚躋〔躓〕。故舊獨り依然たり、時危くして顚躋〔躓〕を話す。
我甘多病老。子負憂世志。我は甘んず多病にして老ゆるを、子は憂世の志を負ふ。
胡爲困衣食。顏色少稱遂。胡爲れぞ衣食に困しみ、顏色稱遂少く、

遠作辛苦行。順從衆多意。
舟楫無根蒂。蛟鼉好爲祟。
況兼水賊繁。特戒風飈駛。
崩騰戎馬際。往往殺長吏。
子干東諸侯。勸勉防縱恣。
邦以民爲本。魚饑費香餌。
請哀瘡痍深。告訴皇華使。
使臣精所擇。進德知歷試。』
惻隱誅求情。固應賢愚異。
烈士惡苟得。俊傑思自致。
贈子猛虎行。出郊載酸鼻。』

遠く辛苦の行を作し、衆多の意に順從せむとするや。
舟楫根蒂無し、蛟鼉好く祟を爲す。
況んや水賊の繁きを兼ぬ、特に風飈の駛きに戒めよ。
崩騰せる戎馬の際、往往長吏を殺す。
子東諸侯に干む、勸勉して縱恣を防がしめよ。
邦は民を以て本と爲す、魚饑うれば香餌を費す。
請ふ瘡痍の深きを哀み、皇華の使に告訴せよ。「なるべし。」
使臣擇ぶ所を精にすべし、進德は歷試によることを知る。』
誅求の情に惻隱するは、固より應に賢愚によりて異なる。
烈士は苟得を惡む、俊傑は自ら致さむことを思ふ。
子に猛虎行を贈る、郊に出づれば載ち酸鼻なり。』

【字解】【一】顧八分文學　顧八分文學は前篇に見ゆ、八分は八分書を能くするによりていふ、八分書のことは卷十八、李潮八分小篆歌をみよ。顧、名は戒奢、玄宗朝の人、宋の歐陽脩の集古錄に、唐の呂諲が表、元結撰、戒奢八分書と記し、姚寬の「西溪叢語」に呂公表、前太子文學・翰林待詔顧戒奢書と記す。【二】洪吉州　洪州及び吉州なり、共に江西にあり、洪州は今の南昌なり。【三】中郎　中郎は五官中郎蔡邕をいふ。後漢の熹平四年、蔡邕八分の書體を以て五經を書し、石に刻し、太學門外に建てしことをいふ。【四】憔悴　衰へたるをいふ。【五】顧侯　侯は敬語、君といふ類。【六】鑪錘　鑪は鍛冶のゐろり、錘ははかりのおもり、金屬を火にかけ鍛錬するをいふ。【七】破餘地　「莊子」に庖丁が牛を解くことをのべて、遊レ刃ヲ恢恢然トシテ有ニ餘地一といへり。破とは蓋し開拓するをいふ。【八】韓蔡　韓擇木、蔡有鄰、李潮八分歌にみえたり。【九】最屬　力を作す貌。【一〇】其書　八分書をいふ。【一一】數子　顧韓蔡をいふ。【一二】御札　玄宗の筆札をいふ。【一三】流傳　世間に流れ傳はる。趙注にいふ、玄宗、韓擇木を師とす。骨て彩牋上に八分の書を以て張說に讚を書して賜ふと。【一四】掄揚　三人等の書をほめあげたまひしこと。【一五】造次　あわただしき貌。輕率より出でしに非ざるをいふ。【一六】三人　顧韓蔡。【一七】入直　禁中に入り宿直する。【一八】不二　同一。【一九】辯眼　明眼の意。【二〇】分日　一月の內甲乙等の日を分つ。【二一】侍諸王　皇族の王たる人人のおそばへでる、書法を敎ふるためなり。【二二】鈎深　書法のおくふかき所を求むる。【二三】文學　顧をさす。【二四】蕭疎　さびしき貌。【二五】外聲利　世俗の名聲利益を度外におく。【二六】二十載　天寶八載より大曆三年までにて二十年となる。【二七】浩蕩　醉態の放肆なるさま。【二八】文翰　書をいふ。【二九】省寺　某省某寺と稱する官衙。【三〇】揚馬間　揚雄、司馬相如のあひだ。【三一】白首　將來老年の時をいふ。【三二】驊騮入窮巷・必脫黃金轡　仇氏は顧が作者を公安にて訪問するに黃金の轡を脫することと說く。余は長安の時の事のつづきをのべしものとおもふ、窮巷は作者のみやこの住地をいふ。黃金の轡を脫すとは、簪釗を脫す・金龜を解くなどの如く之を質におきて酒を買ひてのみしことをいふなるべし。【三三】一論朋友難　これは作者かつて顧と論ぜしをいふ、朋友難とは友情を全くするの難きことなり。【三四】遲暮　今の晚年時をいふ。【三五】事反覆　交情の前後にかはるをいふ。【三六】誰是青雲器　青雲器とは青雲の高位に達すべき人物をいふ。ここは人物そのものをいふに非ずして其の地位にある人をいふ。仇氏は、歎ズ貴者未ダ必ズシモ賢ナラザルヲ、といへるが、反面よりいへば仇氏の如くなるも、正面よりいふときは往時のなかまに高位に達せし人あらざるをいふのみ。【三七】才盡　自己の才なくなりしをいふ。【三八】病渴　消渴の病にかかる。【三九】汚官位　尙書の郎官となりしこと。【四〇】故舊　顧をさす。【四一】話顚躋（躓）　躋の字、諸本躓に作る。之に從ふ。顚はひつくりかへる、躓はつまづく。【四二】稱遂　心にかなひとげること。【四三】辛苦行　つらき旅行。【四四】衆多　衆人をいふ。【四五】無根蒂

不安定の狀にあるをいふ。【四八】 梟　たたり。【四九】 水賊　水上の盜賊。【五〇】 駛　はやきこと。【五一】 崩騰　みだれあがる。【五二】 殺長吏　長官を殺す。大曆三年、商州の兵馬使劉洽、刺史殷仲卿を殺す、幽州の兵馬使朱希彩、節度使李懷仙を殺す、の類。【五三】 子　願をさす。【五四】 干東諸侯　干は干謁、求むる所あらんとして面會を乞ふこと、東諸侯とは東方の刺史、洪州吉州は荆州の東にあたる。大曆二年に魏少游、洪州刺史兼江西觀察使たり。洪州は觀察使の治所なり。【五五】 勸勉　すすめつとめしめる。【五六】 縱恣　わがまま。【五七】 費香餌　香餌とは人民の食物をいふ。【五八】 瘠瘦深　きずのふかきこと。【五九】 告訴　つげる。【六〇】 皇華使　天子の使者、卽ち觀察使をいふ、「詩」に、皇皇者華あり、君、使臣を遣はす詩とせらる。【六一】 使臣　卽ち觀察使。【六二】 所擇　部下の官吏をいふ。【六三】 進德知歷試　不備の句、進德の歷試によることを知るべしの意、進德とは「易」の進レ德脩レ業の進德、こちらが德の方へと前進すること。歷試は書經の歷試ニ諸艱一の歷試、いろいろのなんぎなめにあはせためすこと、歷試といふことありてのち德に進むものなり。使臣はかかる人物を登用すべきなり。【六四】 惻隱　心をいためてあはれにおもふこと。【六五】 誅求情　上からからき稅をとりたてちろる民情。【六六】 賢愚異　吏の賢愚により惻隱のこころの動きかた同じからず、賢者は深く愚者は淺し。【六七】 烈士　この烈士、下の俊傑みな顧についていふ。【六八】 苟得　道にかなはず、かりそめに利を得ること。【六九】 自致　自己の身を青雲の上に致す、要路に立つをいふ。【七〇】 猛虎行　陸機が猛虎行に、渴不レ飲ニ盜泉水一、熱不レ息ニ惡木陰一、惡木曾無レ枝、志士多ニ苦心一、とみゆ。【七一】 田郊　田でて郊に至るをいふ、送別のためなり。【七二】 載　乃ち。【七三】 酸鼻　悲しくて鼻がつまる樣なるをいふ。

【題義】 顧戒奢が江西の洪州・吉州へゆくのを送つた詩。黃鶴は大曆三年秋、公安にての作とす。

【詩意】 蔡中郎が石經を書いた以後は八分の書體はけだしやつれ衰へた。そこへ顧君（戒奢）は自ら鍛錬工夫して、その筆力は蔡邕以外の地を開拓した。むかし玄宗皇帝の開元年中に韓（擇木）・蔡（有鄰）も顧君と同じく八分に力をつくした。玄宗は八分の書體に工妙でおはしたによつて、そのため顧君等の二三人が天子のところへまゐり、天子の御書も天下に早く流傳した。天子が彼等の書をおほめになつたことは決してあわててさやうなことをなさつたわけでなく沈思のあまり事實だからさやうにあそばされたのである。顧君等三人はともに禁中に宿直しおかみから三人同一の恩澤を豪つた。顧君は韓蔡等の中では眼が明かで小字に巧みであつた。月の內でそれぞれ日を分ちて諸王のおそばへも出た、彼は奧ふかいところまで書法をさぐり求めたが、その法はさぐればもつとかくれたところに妙をもつてゐた。『顧文學が自分と遊ぶや、彼はさびしくして世間的の名聲や利益をよそにみてゐた。彼と我は二十年もくつついてゐるが長安での酒醉ひはとりとめもなきものであつた。卿相の宅で高聲で歌をうたひ、省とか寺とかの官衙では文章をつくつては書きなぐつた。彼は自分を揚雄・司馬相如のあひだに視て、たとひ白髮にならうとこの交は棄てまいといふ風であつた。さうしてこの千里の馬はじぶんのせまいこうぢへはひるといつも黃金の飾のついた手綱をぬぎすてて酒の代にしてしまつた。ひとたびかやうに交際の容易でないことをかたりあうたあひだがらでは晩年になつてもその交を失墜させることはできぬ。むかしから朋友の交は前後ひつくりかへつたものだ、それにわれわれはかはらぬのであるからおたがひに顏を見てはなみだをながした。以前長安時代にともに玉珂を鳴らして參朝した人人、そのなかにだれか青雲の高位にのぼつた人物がゐるか、ゐぬではないか。自分は文才盡きて形骸のみとなつたことをいたみ、消渴の病にかかりながら郎官の官位を汚してゐる。そんなものに

對しても我がふるなじみ(顧君)だけは依然としてむかしのままのよしみをもつて、この危い時世に社會の底へころげつまづいてゐるさまをはなしあふ。』自分は多病で老いゆくことに甘んじてゐるが、君は世事を憂ふる志をもつてゐる。なんで衣食の乏しきに困しみ、氣にくはぬことばかりだといふ樣な顏つきをして、遠くなんぎな旅行をして、凡俗多數人の意に從ふ樣にしようといふのか。舟や楫は根蔕をもたぬ不安定なものであり、蛟や鼉はよくたたりをする。そのうへ水上の盜賊がたくさんゐる、特に風やつむじかぜのはやく吹くことに氣をつけなければならぬ。戎馬のみだれたちあがれる際には、ときどき一地方の長官をも殺したりすることがある。君は東方の諸侯へ干謁にゆくのであるが、その人たちに勸め勉めしめてわがままをやめさせる樣にしなければならぬ。邦は民を以て本とする、魚が饑ゑたときは香しい餌をたくさん與へる必要がある。人民は饑ゑた魚だ。どうぞ人民の深いきずをおうてゐることをあはれんで、そのことを天子の使者たる人に訴へられよ、その使者は部下を擇ぶには精密にしなければならぬ、部下といふものはひくい階級の職からへのぼつてだんだんいろいろの艱難を歷てから德に進むものだといふことを使者は知らねばならぬ。』人民がいま上から誅求されて抱いてをる情に對して惻隱の心を起すことは、その人の賢愚に應じて深淺のちがひがあるだらうが、烈士たるものは道理なしにただなにものかを得さへすればよいといふ樣なことは惡むものであり、俊傑たるものは機會あらば自己を要路に置きたいとおもふものである。（君は俊傑・烈士でないか）。自分は君に猛虎行の詩を贈りたいとおもふ。君を送るために郊野までてくると酸鼻の悲しさにたへられぬ。ここのところをかんがへてくれたまへ。』

官亭夕坐、戲簡顏十少府

南國調寒杵。西江浸日車。
客愁連蟋蟀。亭古帶蒹葭。
不返青絲鞚。虛燒夜燭花。
老翁須地主。細細酌流霞。

【題義】公安の官亭で夕方すわつてゐたとき戲れに顏少府に手紙代りにやつた詩。酒をねだつた作なり。大曆三年秋、公安にての作。

【字解】【一】官亭　公安縣の縣尉の官舍の亭。【二】調寒杵　寒杵は冬衣を擣つきぬ、調とはうちおろすひびきのととのへるをいふ。【三】西江　大江をいふ。【四】浸日車　日車は太陽、巳にみゆ。【五】蟋蟀　こほろぎ。【六】蒹葭　あし、よし。【七】青絲鞚　青ききぬ糸のたづな。顏少府馬にのりてそとへ出でゆきしとみゆ。【八】老翁　自己をいふ。【九】地主　土地の主人、顏をさす。【一〇】流霞　酒をいふ、巳にみゆ。

【詩意】南國では寒天搗衣の杵の音も調子よく、大江の水面には日の光を一面にひたしてゐる。こほろぎが鳴くにつれて自分のたびの愁もそれとともにおこる、亭はものさびてまはりによしあしの草がみだれしげつてゐる。青絲のたづなをたぐつて出た人はどこまでいつたかいまに返つてこぬ、いたづらに燭の火花がぼこぼこしてゐるばかりである。このおやぢは主人役のおかげによつてちびりちびりと酒を酌みたいとおもうてゐるのである。

移居公安、敬贈衛大郎鈞

衛侯不易得。余病汝知之。
雅量涵高遠。清襟照等夷。
平生感意氣。少小愛文詞。
江海由來合。風雲若有期。
形容勞宇宙。質樸謝軒墀。
自古幽人泣。流年壯士悲。
水煙通徑草。秋露接園葵。

衛侯得易からず、余が病汝之を知る。
雅量涵すこと高遠なり、清襟等夷を照らす。
平生意氣に感ず、少小より文詞を愛す。
江海由來合す、風雲期有るが若し。
形容宇宙に勞す、質樸軒墀を謝す。
古より幽人泣く、流年壯士悲しむ。
水煙徑草に通ず、秋露園葵に接す。

居を公安に移すとき、敬みて衛大郎鈞に贈る

【字解】【一】衛大郎　作者の注に鈞とあるは此の人の名なり。大郎とあれば衛伯玉の長子なるべきか。【二】余病　病とは缺點をいふ。【三】雅量　みやびな度量。【四】清襟　すつきりとしたむね。【五】等夷　同輩。【六】意氣　衛鈞の意氣。【七】少小　年少、鈞につきいふ。【八】江海由來合　上の意氣を承く、江水と海水とは本來合流す、意氣の投合するをいふ。【九】風雲若有期　風雲と會する期あるに似たり。此の句上の文詞を承く。立身の見込みあるをいふ。【一〇】勞宇宙　宇宙の間に於て疲勞する。【一一】謝軒墀　軒墀はのきば、どえん、宮殿のそれをいふ。【一二】入邑　邑は縣邑。【一三】傷弓　弓の音をききて心をいためる、射らるるを恐るるなり。【一四】供宴語　衛鈞が宴語を作者に供してくれるなり、宴語は宴席にてのものがたり。【一五】烏几　黑皮を張りたる脇息。【一六】棲遲　安居をいふ。【一七】交態遭輕薄　世俗につきいふ。【一八】豁　くつろぎたるをいふ。

【題義】居處を公安に移したころ、衛鈞に贈つた詩。大曆三年秋、公安にての作。

【詩意】自分の缺點のあることは君はよく知つてゐるのだ、それに自分を見棄てぬといふは、君はじつに得易からざる人だ。君の雅量が他物をひたすことは高く且つ遠く、君の清らかな襟懷は同輩にてりかがやいてゐる。君はわかいときから文詞を愛してゐるから、他日必ず風雲に會する期がある樣におもふ、自分は平生君の意氣に感じてゐるが、君と自分とは意氣の投合してゐることは江水が海水と本來合流する樣なものだ。』自分は宇宙のあひだにつかれて、質樸を守つて宮殿などからとほざかつ

入邑豺狼鬬。傷弓鳥雀飢。』邑に入れば豺狼鬬ふ、弓に傷みて鳥雀飢う。』
白頭供宴語。烏几伴棲遲。白頭に宴語を供す、烏几に棲遲に伴ふ。
交態遭輕薄。今朝豁所思。』交態輕薄なるに遭ふ、今朝所思豁なり。』

てをる。むかしからわびずまひをする人物は泣いてをる、年月の流るるを見ては壯士も悲しむのである。いま小みちに生えた草には水煙が通じてよこたはり、園に生えてゐる葵には秋の露がつづいてゐる。縣邑にはひつてみれば豺狼がたたかうてをり、弓づるの音に心をいためては鳥雀が飢ゑつつある。』かやうなときに君はこの白頭の自分に宴語を供してくれ、烏几によつて隱居してゐるもののつれになつてくれる。世間交際のさまの輕薄な時節に君の樣な人にあうたため、けさはいつもの思ひがはればれとくつろいだ樣な氣がする。』

公安送韋二少府匡贊

公安にて韋二少府匡贊を送る

逍遙公後世多賢。
送爾維舟惜此筵。
念我能書數字至。
將詩不必萬人傳。
時危兵革黃塵裏。
日短江湖白髮前。

逍遙公の後世賢多し、
爾を送りて維舟此の筵を惜む。
我を念はば能く數字を書して至らしめよ
詩を將て必ずしも萬人に傳へず。
時は危し兵革黃塵の裏、
日は短し江湖白髮の前。

【字解】【一】逍遙公　北周の韋夏、高を養ひて仕へず、明帝號して逍遙公となす、唐の韋嗣立、中宗之を封じて逍遙公となす、嗣立が後を小逍遙公の房となす。韋匡贊は韋夏の系統に屬する子孫とみゆ。【二】送爾　爾とは匡贊をさす。【三】維舟　繫舟に同じ、作者自らの境をいふ、次篇にも維舟倚前浦とみゆ。【四】此筵　この送別の筵席。【五】書數字至　匡贊に向ひ信書を寄せよといふなり。【六】將詩　詩は作者の詩。

古往今來皆涕淚、
斷腸分手各風煙。

古往今來皆涕淚、
斷腸す手を分てば各〻風煙なるに。

【題義】公安で縣尉韋匡贊が他處へゆくのを送つた詩。大曆三年秋の作。

【詩意】北周の逍遙公（韋夏）の子孫たる人には世世賢人が多い、（君もそのひとりだ。）自分はいまこに舟をつないで君を送るにつけてこの別筵を惜むのである。君は自分のことを念うたときには消息をよこしてくれ。ただ自分が君に見せる詩はやたらに萬人に傳へ示す必要はない、（心ある人にだけならよいが。）兵革おこつて黃塵みなぎりて時世は危險である。江湖ひろく已に白髮を生じてゐる自分の眼前には日景が短くなつてきた。むかしも今もおなじ樣に涙をながすことである、これから手を分てばめいめい風煙をへだててしまふのであるとおもふと腸がちぎるるばかりである。

公安縣懷古

公安縣の懷古

野曠呂蒙營。江深劉備城。
寒天催日短。風浪與雲平。
灑落君臣契。飛騰戰伐名。

野は曠し呂蒙が營、江は深し劉備が城。
寒天日の短きを催す、風浪雲と平かなり。
灑落なり君臣の契、飛騰す戰伐の名。

維舟倚前浦。長嘯一含情。　維舟前浦に倚る、長嘯一に情を含む。

【字解】〔一〕呂蒙營　公安縣北二十五里にあり、呂蒙が兵を屯せし所。蒙は吳の孫權が將なり。〔二〕劉備城　公安の城をいふ、孱陵城ともいふ、孫權、劉備を推して左將軍・荆州牧とし、油口に鎭せしむ。時人備を號して左公となす、故に其の城を公安と名づくといふ。〔三〕灑落君臣契　劉備の君臣をいふ、灑落はさらり、さつぱりの貌、君臣契とは劉備、關羽・張飛を得て兄弟の交りを結び、諸葛亮を得て水魚の交りを結ぶをいふ。〔四〕飛騰戰伐名　呂蒙について言ふ。呂蒙皖城を破りしとき軍士皆騰躍して升る、蒙、廬陵の賊帥を擒にするや、孫權其の百鳥も一鵶に如かざるを稱す、これ戰伐に飛騰の名ある所以なり。

【題義】公安縣でむかしの三國時代の事をおもうた詩。大曆三年秋の作。

【詩意】呂蒙の營があつたところには原野がひろく横はり、劉備が居たといふ城のそばには江が深くよこたはつてゐる。いま寒天に日景はつまりつつあり、風浪は雲とひとしい樣に高く起つてゐる。おもへば劉備等の君臣の契は灑落なものであつたし、呂蒙は飛騰せる戰伐の名をあげたものだ。自分は前浦によりそうて舟をつなぎ、こんなことをかんがへこんで長く嘯いてゐる。

呀鶻行

病鶻孤飛俗眼醜。
毎夜江邊宿衰柳。
清秋落日已側身。
過雁歸鴉錯迴首。
緊腦雄姿迷所向。
疎翮稀毛不可狀。
彊神非復皂雕前。
俊才早在蒼鷹上。
風濤颯颯寒山陰。
熊羆欲蟄龍蛇深。
念爾此時有一擲。
失聲濺血非其心。

呀鶻行

病鶻孤飛俗眼醜とす、
毎夜江邊に衰柳に宿す。
清秋落日已に身を側つ、
過雁歸鴉錯つて首を迴らす。
緊腦の雄姿向ふ所に迷ふ、
疎翮稀毛狀す可からず。
彊神復た皂雕の前に非ず、
俊才早く蒼鷹の上に在り。
風濤颯颯たり寒山の陰、
熊羆蟄せむと欲して龍蛇深し。
念ふ爾が此の時一擲有らむことを、
聲を失し血を濺ぐは其の心に非ざらむ。

【字解】〔一〕呀鶻行　呀は口を張る貌、鶻は「たか」のたぐひ。呀鶻行とは口をあけた鶻鳥のうた。或は呀は鴉の訛字か。詩中に過雁歸鴉の語あり。〔二〕俗眼醜　俗眼にては之を醜とす。〔三〕側身　からだをそばだつ、飛ばんとする姿勢をいふ。〔四〕錯迴首　錯は誤るなり、首をめぐらすは鶻を恐るるなり、誤るとは病鶻ゆゑ恐れずともよきに恐るるを以ていふなり。〔五〕緊腦　ひきしめたくび。〔六〕迷所向　どちらをむきて飛ぶべきかに迷ふ。〔七〕疎翮稀毛　まばらなたちばね、毛、病態をいふ。〔八〕不可狀　さまたなさぬ。〔九〕彊神　つよき精神。〔一〇〕皂雕前　皂雕は黑き鵰、前とはうへといふ類、此の句は現狀をいふ。〔一一〕俊才　すぐれたはたらき。〔一二〕蒼鷹上　蒼鷹よりもうへ、すぐれたること、此の句は過去につきいふ。〔一三〕颯颯　風の吹くさま。〔一四〕龍蛇深　深とは深く潛まんとするをいふ。〔一五〕爾　鶻をさす。〔一六〕一擲　擲とは上方より下方へ身を投げおとしてくだるをいふ、他物を搏擊するときのさま。〔一七〕失聲　つれのなきこゑのでぬこと。〔一八〕濺血　きずつきて血を流すをいふ。〔一九〕非其心　其の本心にあらざらん、其とは鶻をさす。

【題義】口をあきたる鶻鳥のことをよんだ詩。自己をたとへしこと「瘦馬行」と似たり。作時は詳かならず、仇氏曰く、蔡夢弼は大暦三年江陵の詩の内に編したり、江邊・秋日の語あるを以てなり。然れども夔州にありても亦た言ひうべし、と。誠に然り。

【詩意】世間の眼には醜しとされて、病める鶻がひとつで飛んでゐるが、この鶻はまいばん江のほとりで衰へた柳にとまつてゐる。秋の夕日にはやこの鶻が身をそばだてるとおそれなくともよいのにとほりかかつた雁だのねぐらにかへる鴉があやまつて首をふりむけてみる。ありしむかしのひきしまつた首つきの雄姿も今ではどちらむきに飛んでよいかさへわからず、その拔けきつてまばらな翮や毛のざまといふたらなんと形容の仕様もないみすぼらしさだ。これでもずつと早いころはその俊才は蒼鷹以上であつたのだが、いまはとてもふたたび黒だかの前に立てる精神ではない。』今や冬寒の山のかげには風濤颯颯とうごいて、熊や羆は穴ごもり、龍蛇は深くひそまんとしてゐる。このときおまへ（鶻）も獲物に向つて一撃を加へたらよからうにとおもふ、血をながしつつ鳴きごゑもだせぬといふはよもや本心ではあるまい。』

宴王使君宅題二首　王使君が宅に宴して題す　二首

漢主追韓信。蒼生起謝安。

漢主韓信を追ひ、蒼生謝安を起す。

吾徒自漂泊。世事各艱難。

吾が徒自ら漂泊す、世事各〻艱難。

逆旅招要近。他鄉意緒寬。

逆旅招要近く、他鄉意緒寬なり。

不才甘朽質。高臥豈泥蟠。

不才朽質に甘んず、高臥豈に泥蟠ならむや。

【字解】【一】王使君　某州の刺史王某、邵注に王は必ず荆州の人にして邑中に閒居せし者ならんといへり。【二】漢主追韓信　漢主は漢の高祖、韓信を追ひかけしものは蕭何なり。高祖關中に入らんとせしとき諸將道よりにぐるもの多し、蕭何、韓信亡ぐときき自ら之を追ふ。蕭何の意は即ち高祖の意なりとみてかく言を立てたり。【三】蒼生起謝安　晉の謝安東山に高臥す、人民、安石（謝安が字）出でずんば其れ蒼生を如何にせんといひたり。【四】吾徒　自己と王使君とをこめていふ。【五】各艱難　各とは自己と王使君とを別別にみていふ。【六】逆旅　旅舍、荆州の客寓をさす。【七】招要近　要は邀なり、むかへること、招邀とは王使君が作者を宴にまねきむかふるといふ、近とは作者の寓居と王宅と近きといふ。【八】意緒寬　こころがくつろぐ。【九】泥蟠　龍をいふ、「揚子法言」に、龍蟠二於泥一、とみゆ。尾二句は謙遜していふ。

【題義】かつて刺史の職をつとめたことのある王某の宅でさかもりせしときかきつけた詩。大暦三年秋、荆州にての作なるべし。

【詩意】むかし漢の高祖は將才を惜んで韓信がにげたときはそれを追ひかけさせた。また晉の人民たちは謝安が宰相の器であることを知つてそれを起ちあがらせた。古人はさうであるが、われわれはそれとちがつてめいめい世事の艱難にであうて、自ら漂泊してをるのである。幸にあなたとの住居が近いので自分は客寓の身ながらお招きにあづかり、他鄉に於てこころがくつろぐここちがする。自分は

不才のもので朽ちたる質であることに甘んじてゐるものである。隱居して高枕で臥てゐるのも決して龍が泥のなかにわだかまつてゐる樣なものではない、龍ならば風雨を得てたちあがるかも知れぬのだが、自分はほんたうに不才なためくすんでゐるのである。

〔一一〕

汎愛容霜鬢。留歡卜夜閒。
自吟詩送老。相對酒開顏。
戎馬今何地。鄉園獨在山。
江湖墮清月。酩酊任扶還。

〔二一〕

汎愛霜鬢を容れ、留歡夜閒を卜す。
自ら詩を吟じて老を送り、酒に相對して顏を開く。
戎馬今何の地ぞ、鄉園に獨り山に在り。
江湖清月墮つ、酩酊扶還に任す。

【字解】〔一〕汎愛　ひろく愛する。〔二〕霜鬢　自己の老態をいふ。〔三〕留歡　ひきとめてよろこばせる。〔四〕夜閒　夜のひまなとき。〔五〕鄉園獨在山　此の句は仇氏・浦氏竝に王使君につきいふとす、然らば「荆州の鄉園に於て王君のみは山中に在り」の意か。暫く之に依る。

【詩意】あなたはひろく衆人を愛してそのなかに自分の樣な鬢に霜をおいたものをも容れてくださつて、夜のひまなをりをトしてひきとめてよろこばせてくださる。自分はひとりで詩を吟じて老いさきを送り、酒とうちむかうてにこにこする。今は戎馬がどの地に起つてゐるか、どの地ともいへぬほどすべて戎馬の地であらうが、そのをりにあなただけは故鄉の園で山中に高臥してをられる。へうらやましい。）自分は江湖にすんだ月が落ちるとも、十分に醉うて人に扶けられて還らうともかまはぬ、のみあかしませう。

送覃二判官

先帝弓劍遠。小臣餘此生。
蹉跎病江漢。不復謁承明。
餞爾白頭日。永懷丹鳳城。
遲遲戀屈宋。渺渺臥荆衡。
魂斷航舸失。天寒沙水清。
肺肝若稍愈。亦上赤霄行。

覃二判官を送る

先帝弓劍遠し、小臣此の生を餘す。
蹉跎江漢に病み、復た承明に謁せず。
爾を餞す白頭の日、永く懷ふ丹鳳城。
遲遲として屈宋を戀ひ、渺渺荆衡に臥す。
魂は斷ゆ航舸の失はるるに、天寒くして沙水清し。
肺肝若し稍く愈えば、亦た赤霄に上りて行かむ。

【字解】〔一〕覃二判官　其の人詳かならず。〔二〕先帝　肅宗。〔三〕弓劍遠　帝の崩御をいふ、黃帝の故事。黃帝龍に騎り天にのぼる、小臣龍の髯を持す、髯ぬけて墮つ、黃帝の弓を墮すと。また黃帝橋山に葬られしに山崩れ、棺空しく尸無くして唯だ劍と舄とありしと。〔四〕承明　漢時の宮中宿直の廬の名、石渠閣外に在りしといふ。〔五〕爾　覃をさす。〔六〕丹鳳城　長安の宮城、正南の門を丹鳳門といふ。〔七〕遲遲　路ゆくことはかばかしからぬさま。〔八〕屈宋　屈原、宋玉。〔九〕渺渺　はるばる、故鄉の地よりいふ。〔一〇〕荆衡　荆門衡山、衡山にはまだゆかざれどひろく南土をいふ。〔一一〕航舸失　舸は小舟、覃ののれる舟、失とは見失

ふたいふ。【三】肺肝　肺肝の病をいふ。【三】愈　いゆ、なほる。【四】赤霄　あかきそら、崑崙山のうへに赤霄あり、今借りて宮城の天をいふ、之を殿名ととくは當らず。

【題義】判官覃某が長安へかへるのを送つた詩。大曆三年秋、荆州にての作ならん。

【詩意】先帝（肅宗）が崩御あそばされて弓劍と遠くへだたり、小臣はなほいきのこつてゐる。さうして志を遂げずして江漢の地方に病んで、また承明の直廬へでむいておめみえをすることをせずにをる。いま白頭の老境に於ておまへを送るにつけては丹鳳城がいつまでもしたはしくおもはれる。『自分は屈宋の文才を慕ふかの如くここにぐづぐづしながら、はるけくも荆衡の南土に臥てゐるのであんの魂は斷ちきられる樣だ。肺肝の病氣がもしだんだんなほつたならば、自分もまたおまへの樣に宮城の赤い霄をさしてのぼつてゆかうとおもふのである。』

公安送李二十九弟晉肅入蜀、余下沔鄂

公安にて李二十九弟晉肅が蜀に入るを送る、余は沔鄂に下らむとす

正解柴桑纜。仍看蜀道行。
檣烏相背發。塞雁一行鳴。

正に解く柴桑の纜、仍りて看る蜀道に行くを。
檣烏相背きて發す、塞雁一行鳴く。

南紀連銅柱。西江接錦城。
憑將百錢卜。漂泊問君平。

南紀銅柱に連る、西江錦城に接す。
憑りて百錢の卜を將て、漂泊君平に問はむ。

【字解】【一】李二十九弟晉肅　李晉肅は李賀（字は長吉）の父、韓愈之がために諫辯を著はせしを以て知らる。晉肅作者より年少者なるにより弟といふ。【二】沔鄂　沔は湖北漢陽府、鄂は武昌府。【三】柴桑纜　柴桑は縣の名、今の江西九江府城南にあり、陶淵明の鄉里なり、柴桑纜とは柴桑へ向はんとするともづなをいふ。朱注に、「作者この冬公安を發して岳陽に至れり、然るに題に沔鄂に下らんとすといひ、詩に、正解柴桑纜といふは蓋し作者このとき沔鄂より東に下らんと欲せしに、後ち果さずして乃ち岳陽にゆきしのみ、」といへり。實に江西にゆかんとせしや一時の興をのべしやの不明なること余前に已にいへり。【四】仍看　仍とは吾が行とともにそのままといふの意。【五】蜀道行　蜀の道へとゆく、題の入蜀をいふ。【六】檣烏　鳳見のからす。【七】塞雁　長城よりわたる雁、雁は兼れて兄弟の情をいふ、晉肅を弟といふによりてなり。【八】一行　ひとつら。【九】南紀　江漢の水をいふ。【一〇】銅柱　交趾にあり、卷十六「諸將」をみよ。【一一】西江　大江。【一二】錦城　成都の城。【一三】憑　君によりての意。【一四】百錢卜　漢の嚴遵、字は君平、成都に賣卜し、一日に百錢を得ればすなはち閉ぢ簾を下したりといふ。【一五】漂泊　何時漂泊の運命より免るるを得べきやについて。【一六】問君平　君平が事、かみにみゆ。

【題義】公安で李晉肅が蜀にはひらうとするのを送つた詩。そのとき自分は沔鄂の方へくだるつもりであつた。大曆三年冬の作。

【詩意】自分はちやうど柴桑に向ふためのともづなを解かうとするとき、また君が蜀道の方へ行かうとするのをみる。おたがひの舟の檣烏は背あはせになつて出發するが、をりもをりとて長城からわたる雁がひとつら悲しげに鳴きたてる。江漢の水は自分のゆく方向では銅柱のあたりまで連つてゐる

が、江水は同時に君のゆく方向では錦城にまで接してゐるのだ。自分は成都にゆく君にたのんで百錢のトをしてもらつてじぶんの漂泊生活がいつやむかについて嚴君平にたづねてもらひたいとおもふ。

留別公安太易沙門

公安の太易沙門に留別す

隱居欲就廬山遠。　隱居就かむと欲す廬山の遠、
麗藻初逢休上人。　麗藻初めて逢ふ休上人。
數問舟航留製作。　數〻舟航を問ひて製作を留む、
長開篋笥擬心神。　長に篋笥を開きて心神を擬す。
沙邨白雪仍含凍。　沙邨の白雪仍ほ凍を含む、
江縣紅梅已放春。　江縣の紅梅已に春を放つ。
先踏鑪峰置蘭若。　先づ鑪峰を踏みて蘭若を置き、
徐飛錫杖出風塵。　徐ろに錫杖を飛ばして風塵を出でよ。

【字解】〔一〕留別　詩をとどめて別るること。〔二〕太易沙門　太易は僧の名、沙門は梵語、僧のこと。漢言にては息レ心の義。剃レ髮出レ家、絕レ情洗レ慾、而歸二於無爲一をいふなり、と。〔三〕廬山遠　廬山の慧遠法師がこと、已にみゆ。〔四〕麗藻　文詞のあやあるをいふ。〔五〕休上人　宋の湯惠休をいふ、詩を能くするにより宋の世祖之を還俗せしむ。〔六〕舟航　自己のふね。〔七〕製作　太易の詩。〔八〕篋笥　はこ、〔九〕擬心神　先方のこころに模倣せんとする、原作を和せんとするなり。〔一〇〕先踏鑪峰　鑪峰は廬山の香爐峰、この句と次句とは太易についていふか、作者自己についていふかに就いて異說あり。余は太易に就いていふとみる。〔一一〕蘭若　草稿をいれるもの。〔一二〕飛錫杖　陳延敎が說に、この飛錫は廬山の神仙の事を用ひたるなりと。晉の太元十一年に廬山の陽に柴刈りせし男が法衣をつけた一沙門の巖中より錫を揮うて空へのぼりきえうせしを見たる話、淇方生が廬山神仙詩序にみゆといへり。しかし普通にいふ寶誌上人が飛錫の故事にても義は通ずべし。

【題義】公安縣の僧太易に別れんとてのこした詩。大曆三年冬、公安にての作。

【詩意】自分はここで初めて文詞のあやうるはしいこと惠休上人の樣な人にであうたが、じぶんは隱居して廬山の慧遠法師の樣な人に就かうとおもうてゐるのだ。あなたはたびたびわたくしの舟をおとづれておつくりになつた詩をとどめおかれた。それに和作でもしようかとじぶんはいつも文庫のふたをあけてあなたの心にはせようとした。いま沙邊の村の白雪はまだこほり氣を含んではをるが、江ぞひの縣の紅梅ははや春色を放ちだした。あなたは先づわたくしよりさきに廬山の香爐峰を踏んでお寺を置き、それからしづしづと錫杖を飛ばしてこの下界の風塵からぬけでる樣になされたい。（さうしたらわたくしもあとからあなたにつき從ひませう。）

久客

羇旅知交態。淹留見俗情。
衰顏聊自哂。小吏最相輕。

羇旅交態を知る、淹留俗情を見る。
衰顏聊か自ら哂ふ、小吏最も相輕んず。

去國哀王粲。傷時哭賈生。
狐狸何足道。豺虎正縱横。

【字解】〔一〕王粲　長安の亂にあひ去つて荆州の劉表に依る、以て自ら比す。〔二〕賈生　漢の賈誼、誼、文帝に上書して、時事痛哭すべきもの一、流涕すべきもの二、長大息すべきもの六といへり、以て自ら比す。〔三〕狐狸・豺虎　後漢の張綱曰く、豺狼當レ道ニ、安問二狐狸一、と。狐狸は小吏に比し、豺狼は亂賊に比す。

【題義】久しく他郷に客たることをのぶ。此の詩の作時作地共に詳かならず、黄鶴は廣德二年閬州の詩内に編し、蔡夢弼は大曆三年、江陵の詩内に編したり。暫く疑を存す。

【詩意】旅の身のうへでゐると人の交際のさまがわかるし、ながく逗留してをると世俗の人情が見えてくる。じぶんは老衰した顔つきになつたについてじぶんながら笑ひいでられるが、小役人などいふものはいちばんひとの老衰したものを輕蔑するものである。故國を立ち去つて王粲はかなしみ、時事を傷んで賈誼は痛哭する。(じぶんのこころもちがそれだ。)狐狸の如き小吏などはいふに足らぬ、そのうへの豺虎の樣な大盜賊が縱横にみだれてゐることが最も氣になるのである。

冬深

花葉惟天意。江溪共石根。
冬深し
花葉惟だ天意、江溪共に石根。
早霞隨レ類影。寒水各依レ痕。
早霞類に隨ひて影あり、寒水各〻痕に依る。
易レ下楊朱淚。難レ招楚客魂。
下し易し楊朱の淚、招き難し楚客の魂。
風濤暮不レ穩。捨レ棹宿誰門。
風濤暮に穩かならず、棹を捨きて誰が門にか宿せむ。

【字解】〔一〕花葉　霞狀をいふ。〔二〕江溪　江は大江、溪は他の細流をいふならん。仇氏の如く本篇が公安出發以後の作ならば湘水などをさすならん。〔三〕早霞隨類影　此の句は花葉の句を承く、早霞は晨霞、隨類影は趙注には「類影に隨ふ」と訓ず、余は類に隨つて影ありと訓ず。類とは花ならば花、葉ならば葉、その類する所のものをいふ、その類のまにまに影を生ずるをいふ。〔四〕寒水各依痕　此の句は江溪の句を承く。痕は石根にのこれる水のあとなり。〔五〕楊朱淚　戰國の頃楊朱は歧路に泣く、その南すべく北すべきを以てなり。作者も南北いづれにゆくべきかに迷ふ。〔六〕難招楚客魂　「楚辭」に招魂あり、屈原の生魂を招く、以て自己の魂に比す。〔七〕捨棹　捨はおく、棹はさをなれどここは舟楫の意、ひろくいへるものにて船上生活をさす。

【題義】冬の深きころの詩。此の篇も作時作地詳かならず。黄鶴は雲安の詩内に編し、蔡夢弼は夔州の詩内に編せり。仇氏は公安を發せし以後の作なるべしとせり。

【詩意】花にしようと葉にしようとそは唯だ天の意のままで、朝霞はおのおのその類に隨つて花なり葉なりの樣に姿をあらはしてをる。江水から溪水と水はかはつてもその岸壁の石根はどちらも石根であつてその石根に寒天の水はそれぞれ增減の痕迹をのこしてゐる。かく光景のうつりかはりを見るにつけても、自分は歧路に泣いたといはるる楊朱の樣な淚をくだしやすく、また楚客の生靈は招かうと

してもまねくことはむづかしい、（だからその魂は散亂してしまはうとする）。夕ぐれには風濤がおだやかでなくなつてきた。棹一本をおいてはだれの門に宿らうぞ、やどるべきところはないのである。

曉發公安

曉公安を發す　【原注】數月此の縣に憩息す。

北城擊柝復欲罷、
北城の擊柝復た罷まむと欲す、
東方明星亦不遲。
東方の明星も亦た遲からず。
隣雞野哭如昨日、
隣雞野哭昨日の如し、
物色生態能幾時。
物色生態能く幾時ぞ。
舟楫眇然自此去、
舟楫眇然此れより去らむ、
江湖遠適無前期。
江湖遠適前期無し。
出門轉眄已陳跡、
門を出で轉眄すれば已に陳跡なり、
藥餌扶吾隨所之。
藥餌吾を扶けて之く所に隨はむ。

【字解】【一】發公安　作者は大曆三年正月に峽を出で、三月江陵に至り、秋晩に公安に遷りたり。原注に見ゆるごとく公安に憩ふこと數月にして暮冬となりて湖南に向ふべくここを出發せしなり。「留別太易沙門」詩の沙邨白雪仍含凍、江縣紅梅已放春、といふもの、其の氣候のさまを窺ふに足れり。【二】明星　夜明けのみやうじやう。【三】不遲　其の光の消えうせることのおそからざるをいふ。【四】隣雞　となりの家の雞の鳴きごゑ。【五】野哭　人民の原野に慟哭するこゑ、戰死者などをかなしみてなり。【六】物色　事物の景色、山川草木鳥獸皆是れなり。【七】生態　人民の生活の狀態。【八】能幾時　幾何の時期存續し得るぞの意。【九】遠適　とほくゆく。【一〇】無前期　どこにおちつくといふ前途の期會なし。【一一】轉眄　ちよつとみかはすあひだ。【一二】陳跡　ふるびたあと。

【題義】あかつきに公安を出發せしときの詩。

【詩意】北城の拍子木をうつおとがやみかけてゐる。東にかがやいてゐる明星の消えるのもおそくはあるまい。雞の鳴きごゑ、野らの慟哭は依然として昨日にかはらぬ、物象のすがた、人の生きつづけるさまは、どれだけもちつづけられるものか。（さほどながくはあるまい。）じぶんはこれから舟楫によつてはるかにここからたち去るのであるが、江湖の地方へとほくでかけたとてどこにおちつくといふめあてもないのである。一歩門外へふみだしてふりかへつてみれば昨日のあとははやふるびたものになつてゐる。これからじぶんは藥餌の力に扶けられつつゆけるところまでゆけるままにゆかう。

發劉郎浦

劉郎浦を發す

掛帆早發劉郎浦。
帆を掛けて早に發す劉郎浦、
疾風颯颯昏亭午。
疾風颯颯亭午昏し。
舟中無日不沙塵。
舟中日として沙塵ならざるは無し、

【字解】【一】劉郎浦　浦の名、石首縣に在り、石首は公安の東南にあたる。劉備が孫權の妹を娶りし處なりといふ。【二】風未迴　迴とは

岸上空邨盡豺虎。　岸上の空邨盡く豺虎。
十日北風風未迴。　十日北風風未だ迴らず、
客行歲晚晚〔尤〕相催。　客行歲晚に晚〔尤も〕相催す。
白頭厭伴漁人宿。　白頭漁人に伴ひて宿することを厭ふ、
黃帽青鞋歸去來。　黃帽青鞋歸り去らむ來。

かへりなんといふなり。

【題義】劉郎浦を出發して南行するときの詩。大曆三年冬、岳陽に向ふをりの作。

【詩意】朝はやく帆をかかげて劉郎浦を出發した。疾風が颯颯と吹いて沙ほこりのためまひるどきもくらい。舟中では沙ほこりのたたぬ日とてはなく、岸上の人なき村にはどこも豺虎の樣な盜賊ばかりである。』北風の吹きつづけること十日になるが風はむきかはらぬ、それで歲晚になりかけてをるをりではあり旅程をことさらいそがせられるのである。白頭の身になつては漁人といつしよに宿つたりすることはいやになつた、黃帽をかむり青鞋をはいて早く故郷へかへりたいものだ。』

鳳のむきかはるをいふ、北風が南風となれば迴なり、作者は南行するものゆゑ北風は便なり、故に次句にある如く舟人は航行をいそぐ。【三】晚〔尤〕相催　晚の字は無意義なり、尤に從ふべし。催とは行をせかすをいふ。【四】黃帽青鞋　野人の服。【五】歸去來　歸り去らん來、故郷に

別董廸

董廸に別る

窮冬急風水。逆浪開帆難。
士子甘旨闕。不知道里寒。
有求彼樂土。南適小長安。
別我舟檝去。覺君衣裳單。
素聞趙公節。兼盡賓主歡。
已結門閭望。無令霜雪殘。
老夫纜亦解。脫粟朝未餐。
飄蕩兵甲際。幾時懷抱寬。
漢陽頗寧靜。峴首試考槃。
當念著皂帽。采薇青雲端。

窮冬風水急なり、逆浪帆を開くこと難し。
士子甘旨闕く、知らず道里の寒きを。
彼の樂土を求むる有り、南小長安に適く。
我が舟檝の去るに別る、君が衣裳の單なるを覺ゆ。
素より聞く趙公の節、兼ねて賓主の歡を盡くさむ。
已に門閭の望を結ぶ、霜雪をして殘はしむること無かれ。
老夫纜亦た解く、脫粟朝に未だ餐せず。
飄蕩兵甲の際、幾時か懷抱寬ならむ。
漢陽頗る寧靜なり、峴首試みに考槃せよ。
當に念ふべし皂帽を著けて、薇を青雲の端に采ることを。

【字解】【一】董廸　其人未だ詳かならず、母を養はんため祿仕せんとするものとみゆ。【二】逆浪　むかへなみ。【三】士子　讀書人。【四】甘旨闕　その母親に供すべきうまいものがない、「禮記」內則篇に、昧爽而朝、慈以甘旨、（鄭玄の注に慈とは愛敬

進レ之なりといへり）とみゆ。【五】樂土　安樂の國土、語は「詩」にみゆ。【六】南適　鄧州は地里上よりは送別の地の北にあたれるも、兩京よりの方位によりかくいへるならん。【七】小長安　聚（村落）の名、河南鄧州南陽縣南にありと。【八】舟檝去　舟檝によりてゆくの意。【九】趙公節　趙公は鄧州の長官。【一〇】賓主歡　賓は董をさし、主は趙をさす。【一一】結門閭望　母親に待ちこがれらるるをいふ。「戰國策」に、齊の王孫賈の母、賈に謂ひて曰く、汝朝に出でて暮に歸れば、吾、門に倚りて望む、汝、暮に出でて還らざれば、吾、閭（村里のはづれの門）に倚りて望む、とみゆ。門閭望とは門閭に倚りてかへりを望むなり、結望とはさほどの望みをつながるるをいふ。【一二】霜雪殘　母老いたれば霜雪にあへば殘害せられやすし。【一四】脫粟　玄米。【一五】懷抱寬　むねのうちがくつろぐ。【一六】漢陽　湖北の漢陽府、漢水の口にあり、鄧州へゆくには漢水を泝り、襄陽をも經。【一七】寧靜　兵亂なきをいふ。【一八】峴首　峴山の頭、峴山は湖北襄陽府にあり、晉の羊祜の墮淚碑あり、名所なり。【一九】試考槃　考槃とは盤桓（ぶらぶらすること）を成す義、語は「詩」にみゆ。漢陽・峴首の二句を董廷に屬せしむるか、作者に屬せしむるかにつき異說あり。黃鶴は董廷に屬せしめ、朱氏・仇氏は作者に屬せしむ。余は黃說に從ふ。【二〇】當念　念とは董がおもふこと。【二一】著皂帽　著は作者がつくること、皂帽はくろき紗の帽、管寧が故事、已にみゆ。【二二】采薇　わらびをとる、蔬食するをいふ。【二三】青雲端　いづれとも知れぬ雲山のはてをいふ。

【題義】董廷といふものが鄧州へゆくのに別れた詩。大曆三年冬、南航時の作。

【詩意】冬のおしつまりに風を受ける水の勢が急で、むかへ浪がたち出帆するになんぎである。このとき讀書人たる君は親御にうまいものを供へられぬところから旅程の寒さをも忘れてでかけられる。』　さうして安樂な土地を求めて、南のかた小長安（鄧州）へゆかれる。君は自分の舟行に別れを告げるが、自分は君の衣裳が薄げに感じてきのどくにおもふ。じぶんはふだんから鄧州の長官趙公が節義の高いことを耳にしてゐる、君がゆかれたならきつと長官と部下といふ關係ではなく兼ねて主人とお客としての歡を盡されることとおもふ。君は家では母上があけくれ門閭に倚つて君をながめてをられるといふきづなにつながれてゐるのであるから、おとしよりが寒氣のためからだをいためになる樣なことのない樣に氣をつけなければいけない。』　君とともに老夫もともづなを解かうとする、いまはまだ玄米の朝餐もたべぬのである。兵亂の際にただよはされてゐる身のうへではいつになつたらこのむねのうちがくつろぐ樣になることだらう。君が途中經過する漢陽はよほど平和のところである、襄陽へいつたならば峴山のかしらなどにもぶらついてみるがよろしい。さうしてこのおやぢが黑い紗の帽子をつけてどこかの雲のゐるはてで薇を采つてたべてゐることを念ふべきである。（朱注によれば、「自分も漢陽をへて峴山にぶらぶらしてをるからそこで薇を采つてゐることを念へ」の意ととく）。』

夜聞籥築

夜聞籥築滄江上、
衰年側耳情所嚮。
隣舟一聽多感傷。

夜籥築を聞く

夜籥築を聞く滄江の上、
衰年耳を側つるは情の嚮ふ所なればなり。
隣舟一聽感傷多し、

【字解】【一】籥築　樂器「しちりき」なり。もと龜茲國の樂、竹を以て管とし、蘆を以て首とす、其の聲笳に類す、と。【二】滄江　ひろき

(四)塞曲三更歎悲壯。』
積雪飛霜此夜寒。
孤燈急管復風湍。
(五)君知天地干戈滿。
不見江湖行路難。』

塞曲三更歎ち悲壯。』
積雪飛霜此の夜寒し、
孤燈急管復た風湍。
君知る天地干戈の滿つるを、
見ずや江湖行路の難きを。』

【題義】夜、江上で「しちりき」の音をききしことをよんだ詩。大曆三年冬、南航時の作。

【詩意】ひろい江のほとりで夜「しちりき」の音をきいた。老衰の年になつてそれを耳をそばだててきくといふのは平生じぶんのこころが音樂にむいてゐるからだ。「しちりき」が夜半に忽ち悲壯な調子で塞外關係の曲を奏する。それをとなりの舟にゐてひとたびきくと感傷の念が多くおこる。』この夜は積雪あり飛霜あり、ひどく寒いのに、孤燈の前に急管を吹きならされ、さらにまた風をうけた湍水の音さへつけ加はるのである。(いかにそのものがなしいことよ)。君は塞曲を吹くところから推していま天地に干戈が滿ちてゐることは知つてゐるだらう。しかし干戈の苦ばかりではない、江湖をわたる者の行路のいかになんぎなものであるかを見ぬのであるか。(之にも同情してもらひたい。)』

江。【三】情所嚮　音樂すきなるをいふ。【四】塞曲　長城に關したる曲の名、入塞曲・出塞曲等あり。【五】君　しちりきを吹く人をさす。

(六)衡州送李大夫七丈勉赴廣州

(四)斧鉞下(五)青冥。樓船過洞庭。
(六)北風隨爽氣。(七)南斗避文星。
(九)日月籠中鳥。乾坤水上萍。
(一〇)王孫丈人行。垂老見(一一)飄零。

衡州にて李大夫七丈勉が廣州に赴くを送る

斧鉞青冥より下る、樓船洞庭を過ぐ。
北風爽氣隨ふ、南斗文星を避く。
日月籠中の鳥、乾坤水上の萍。
王孫は丈人行なり、垂老飄零を見む。

【字解】【一】衡州　湖南省衡州府なり。此に衡州の詩あるは編次の誤なり。衡州の詩内にくりさげて入るべきものなり。【二】李大夫七丈　李勉をさす、勉は御史大夫なり、七は排行、丈は丈人、尊者を稱す、李勉は江西觀察使より入りて京兆尹・兼御史大夫となり、大曆三年十月、廣州刺史に拜し、廣南節度使に充てらる。時に嶺南の番帥馮崇道といふ者、桂州の朱濟時とともに叛く、朝廷故に勉を遣はして之を討たしめしなり。作者は衡州にて勉の赴任とであひしとみゆ。【三】廣州　廣東にあり。【四】斧鉞　たの、まさかり、征伐の權を委任するしるしのもの、「禮記」に、諸侯賜ニ斧鉞一、然後專ニ征伐一、とみゆ。【五】青冥　あをぞら、天、みやこをさす。【六】北風隨爽氣　爽氣が北風に隨ひて至るをいふ。北風とは北より來れる風にて必ずしも冬風をいふにあらず。爽氣はさわやかな氣、ほとんど肅殺の氣といふの類なり。【七】南斗　星宿の名。【八】避文星　文星は文昌星をいふ、北斗宮に在り、以て李勉の文學あるにたとふ。【九】日月籠中鳥・乾坤水上萍　日月・乾坤は副詞として用ふ、日月の照らす下に於て・乾坤のひろがれる間に於ての義。籠中鳥・水上萍は自己に比す。束縛・漂泊をいふ。【一〇】王孫　李勉をさす。【一一】丈人行　丈人たる位置の人、已にみゆ。【一二】見　李が見るをいふ。一句は見ニ垂老一而飄零一の意。

【題義】衡州で李勉どのが廣州に赴任せられるのを送つた詩。仇注は大曆三年冬の作とせるは信ずべ

からず、冬未だ衡州に至らざるを以てなり。朱注のごとく大暦四年春の作とすべし。黄鶴は四年秋冬の際潭州にての作とし、衡は潭の誤なりとせり。今朱注に依る。

【詩意】征伐權を委ねられた斧鉞が天上からおりてきて、樓船が洞庭湖をすぎた。北から來た風ともに爽かな氣がつきしたがうてきたし、文星がきたのを見て南斗の星はそれを避けようとしてゐる。自分はこの日月の照りかがやく下で籠のなかの鳥の樣に束縛されてをり、天地のひろい間に水上の萍の樣に漂泊してゐる。王孫は自分にとつては丈人の位置にあたるおかたである。わたくしがかく老いかかつておちぶれてゐることをよく御覽くださつてゐることでござりませう。

歳晏行[一]

歳云暮矣多北風。[二]
瀟湘洞庭白雪中。
漁父天寒網罟凍。[三]
莫徭射雁鳴桑弓。[四]
去年米貴闕軍食。

歳晏行

歳云に暮れぬ北風多し、
瀟湘洞庭白雪の中。
漁父天寒く網罟凍る、
莫徭雁を射て桑弓を鳴らす。
去年米貴く軍食を闕く、

【字解】[一] 歳晏　としのくれ。[二] 瀟湘　二水の名、湖南にあり。[三] 網罟　罟は「たもあみ」。[四] 莫徭　長沙地方に住める蠻族の名。[五] 達官　榮達してゐる官吏。[六] 此輩　農民等をさす。[七] 杼柚　「詩大東篇に、杼柚其空、とあり。清の馬瑞辰が曰く、杼は梭(セ)なり、柚は軸にして「說文」の縢なり、機の「經」を持するもの」なり、と。[八] 茅茨空　茅にてふきたる家屋の中一物もなし。[九] 楚人　湖南地方の民をいふ。[一〇] 重魚・重鳥　漁夫・莫徭を承けていふ、魚鳥は魚鳥の肉をいふ。[一一] 汝　浦注に達官を指すといへり。案ずるに表面上は射獵者をさすものとみるべきなり。[一二] 割慈忍愛　親子の情をしのぶ、語は別賦にみゆ。[一三] 還租庸　還とは負債となりをるをかへすなり、粟稻ををさめる稅が租、絹を一日あて三尺をさめる稅が庸なり。[一四] 捉私鑄　私に錢を鑄造せしものをとらへ罰する。[一五] 刻泥爲之　泥に雕刻を施して錢の鑄型をつくる。[一六] 好惡　善しあし。[一七] 蒙　欺く。[一八]

今年米賤太傷農。
高馬達官厭酒肉。[五]
此輩杼柚茅茨空。[六][七]
楚人重魚不重鳥。[九][一〇]
汝休枉殺南飛鴻。[一一]
況聞處處鬻男女。
割慈忍愛還租庸。[一二][一三]
往日用錢捉私鑄。[一四]
今許鉛鐵和青銅。
刻泥爲之最易得。[一五]
好惡不合長相蒙。[一六][一七]
萬國城頭吹畫角。
此曲哀怨何時終。[一八]

今年米賤く太だ農を傷ましむ。
高馬の達官は酒肉に厭く、
此の輩杼柚茅茨空し。
楚人は魚を重んじて鳥を重んせず、
汝枉げて南飛の鴻を殺すことを休めよ。
況んや聞く處處男女を鬻ぎ、
慈を割き愛を忍びて租庸を還すと。
往日錢を用ふるに私鑄を捉ふ、
今許す鉛鐵青銅に和するを。
泥を刻して之を爲す最も得易し、
好惡合に長く相蒙くべからず。
萬國城頭畫角を吹く、
此の曲哀怨何の時か終らむ。

●●此曲　この詩篇の曲をさす。諸家多く畫角の曲とす、其の說は稅賦の重きは軍の興るにより、最後に憂亂の意をいふとなす。余は「夜聞觱篥」詩の末に、吹曲者干戈の滿つるを知るも江湖の行路難を知らずといひしと同じ言ひ方ならんと考ふ。

【題義】歲晚のことをよんだうた。大曆三年冬、南航時の作。

【詩意】歲がここにくれて北風が多く吹く、瀟湘の水も洞庭の湖も白雪につつまれてゐる。天が寒くて漁父はその網罟が凍つて魚はとれぬ。莫徭の蠻族は桑弓を鳴らして雁を射てゐる。』去年は米がたかくて軍隊の食糧が不十分であつた、ことしは米がやすくて農民がこまる、せのたかい馬にまたがつた貴い役人は酒や肉にたべあきてゐるが、これらの人民は機など織つても家のなかは無一物である。』南方の人は魚肉は重んずるが鳥肉は重んじない、だから獵夫よ、南に飛ぶ鴻などをむだに射殺すなよ、(鳥だとていたはつてやれよ)、ましてや諸方では人民がむすめこどもまでうり慈愛の情を割き忍んで稅金ををさめてゐると聞いてゐる。』まへには錢をつかふとき私鑄のものがあればそれをとらへて罰したものだ、しかるに今は鉛だの鐵だのを青銅とませることを許してゐる。そんな錢は泥の鑄型を刻してつくればすぐに得られるのである。しかしいつまでも善い錢と惡い錢とませ用ひてごまかしておいてはならぬはずである。』いまは天下萬國の城といふ城ではそのうへで畫角を吹きならして兵亂ばかりである。畫角の哀れさはいふまでもないが、吾がこの人民のみじめさをうたうた此の曲の哀怨なることはいつになつたらやむことであらうか。』

泊岳陽城下

江國踰千里。山城近百層。
岸風翻夕浪。舟雪灑寒燈。
留滯才難盡。艱危氣益增。
圖南未可料。變化有鵾鯤。

岳陽城下に泊す

江國踰ゆること千里、山城百層に近し。
岸風夕浪を翻す、舟雪寒燈に灑ぐ。
留滯才盡き難く、艱危氣益ゝ增す。
圖南未だ料る可からず、變化鵾鯤有り。

【字解】〔一〕●●岳陽　湖南岳州府巴陵縣。〔二〕●●才難盡　才盡は江淹が故事、已に見ゆ。〔三〕●●圖南　「莊子」に鯤化して鵬となり、南にゆくことを圖ることみゆ。鯤鵬は以て自ら比す。〔四〕●●鵾鵬　鵾は鯤に作るべし、字の誤なり。

【題義】岳陽城の城下で舟でとまつたことをよんだ詩。大曆三年冬の暮の作。

【詩意】自分は江國を千里もこえてやつてきた、みると前面の山城は高さ百層にもちかい。岸からふく風は夕の浪をひるがへし、舟にふる雪は寒燈の光のまへにそそぎつつある。自分は南方に留滯はしてゐるが、江淹の樣に文才が盡きることはむづかしきのみならず、艱危なめにであうて意氣益ゝ增加し來るものがある。これから南征を圖るに前途どの樣になるかは推しはかることができぬ、なぜかといふと莊子が言ふごとく鯤鵬の樣な不思議な變化をするものがあるからである。

纜船苦風戲題四韻、奉簡鄭十三判官

船を纜ぎ風に苦しみ、戯れに題す四韻、鄭十三判官に簡し奉る

楚岸朔風疾。天寒鶴鴿呼。　楚岸朔風疾し、天寒くして鶴鴿呼ぶ。
漲沙霾草樹。舞雪渡江湖。　漲沙草樹に霾り、舞雪江湖を渡る。
吹帽時時落。維舟日日孤。　帽を吹きて時時落ちしむ、舟を維ぐに日日孤なり。
因聲置驛外。爲覓酒家壚。　因りて聲す置驛の外、爲に覓めよ酒家の壚。

【字解】【一】鄭十三判官　其の人詳かならず、岳陽の官員とみゆ。【二】楚岸　楚地の湖岸。【三】鶴鴿　あをさぎの類。【四】因聲　聲とはこゑをかけること、寄ゝ語をいふ。【五】置驛　鄭莊（當時）置驛の故事。當時驛馬を長安の諸郊に置きて賓客を送迎す、馬にて遞すを驛といふ。同姓の故事を用ひたり。【六】爲覓　爲めにとは「我がために」の意。【七】酒家壚　壚は酒店のみせさきのへつついなり。ほどあひの厚さにて高さ三四尺位に築きたる土牆。そのうへには飲酒に必要なる器具をおく。司馬相如の妻文君が壚に當るといふも、この店先きの番をなせしことをいふ。

【題義】湖岸に船をともづなにつなぎ風に苦しんだとき、戯れにかきつけた四韻八句の詩。これを鄭判官へ手紙がはりにやつた。大暦三年冬暮、岳陽にての作。

【詩意】楚地の湖岸に北かぜがとく吹きつけ、天は寒くして鶴鴿が鳴きさけんでゐる。沙は張りだしてゐて岸べの草樹にはすなほこりがふり、舞ひくるふ雪は江湖をわたつてこちらへくる。帽子は風に吹かれて時時頭から落ちる、つないでゐる舟は日日ひとつでさびしい。それであなたに申すが、あなたは驛遞などでお客を送迎するほかに、どうぞひとつわたしのために酒屋の店さきを周旋してはくださらぬか。

登岳陽樓

昔聞洞庭水。今上岳陽樓。　昔聞く洞庭の水、今上る岳陽樓。
吳楚東南坼。乾坤日夜浮。　吳楚東南に坼け、乾坤に日夜浮ぶ。
親朋無一字。老病有孤舟。　親朋一字無く、老病孤舟有り。
戎馬關山北。憑軒涕泗流。　戎馬關山の北、軒に憑りて涕泗流る。

【字解】【一】岳陽樓　岳陽城の西の門の樓なり。【二】吳楚東南坼　岳州は楚の地にして吳に非ず、故に此の詩に吳を言ふことを疑ふものあり。然れどもそは拘泥の說なり、吳は楚の鄰にして岳州の東北境武昌は卽ち吳の地なり、吳楚をつられ言ふとも不可なることなし。東南坼とは東南部の土壤がきりひらかれて湖面となりなるをいふ。【三】乾坤日夜浮　乾坤二字は副詞として用ふ。杜詩の用例を見るに、乾坤繞漢宮の乾坤は繞字の主語なり。然れども、乾坤水上萍、乾坤萬里眼、乾坤一草亭、等は皆乾坤を副詞とす、萍眼亭は名詞にして浮字は動詞なるの差異はあれど本詩句の乾坤は同じく副詞とみるべし。浮は浮動の意、浮字の主語は省略されたる「湖水」なり。【四】親朋　親戚朋友。【五】無一字　信書の一字だもなし。【六】有孤舟　棲託の地唯だ一舟あるのみ。【七】戎馬　盧注にいふ、是の年郭子儀兵五萬に將とし奉天に屯して吐蕃に備へ、白元光・李抱玉各〻兵を出して之を擊つをいふと。この句は卽ち旅寓

の原因をのぶ。【八】憑軒　樓ののきばによる。【九】涕泗　涕は鼻水、泗はなみだ。

【題義】岳陽樓にのぼりしことをよんだ詩。大曆三年冬暮の作。

【詩意】洞庭の水のことは昔からおとにきいてゐたが、今はじめて湖邊の岳陽樓にのぼつてみる。この湖水をみると、吳楚の地はその東南部が坼開してをり、天地の大なるひろがりのうちに漫漫たる大水が日となく夜となく浮動してゐる。我が身はいま親戚朋友から一字のたよりもこず、老い且つ病んで身を寄せる處はひとつの舟があるばかりである。關山の北には兵馬がはびこつてそのため故郷にかへれず旅路にさすらうてゐるのだ、これをおもふとのきばによりかかりながら涙がながれてくるのである。

陪裴使君登岳陽樓

裴使君に陪して岳陽樓に登る

湖闊兼雲霧。樓孤屬晚晴。
湖闊くして雲霧を兼ぬ、樓孤にして晚晴に屬す。

禮加徐孺子。詩接謝宣城。
禮は加はる徐孺子、詩は接す謝宣城。

雪岸叢梅發。春泥百草生。
雪岸に叢梅發き、春泥に百草生ず。

敢違漁父問。從此更南征。
敢へて違はむや漁父の問に、此れより更に南征せむ。

【字解】【一】裴使君　岳州の刺史裴某。【二】徐孺子　後漢の徐穉がこと、陳蕃一榻を懸けて孺子を禮遇せしこと已に屢〻みゆ。徐を以て自ら比し、陳蕃を以て裴に比す。【三】詩接　接は步を接するをいふ。【四】謝宣城　齊の謝朓、詩句清麗なり、宣城太守となる。【五】叢梅　梅樹叢生するをいふ。【六】敢違　この二字一句のみにかくるものと次句までへかけるものとの二說あり。余は一句のみにかくる說による。「敢て違はんや」なり。【七】漁父問　屈原に漁父辭あり、漁父との問答を記す、漁父は屈原に問ひかけしのち、原に能く世と推移せよといへり。

【題義】刺史裴君に陪して岳陽樓にのぼつたことをよんだ詩。大曆四年春初の作。以下は當分四年の作なり。

【詩意】湖面がひろくてそのうへに雲や霧がかかつてをり、樓が孤立してゐるのにちやうど夕晴れの時刻にであつた。あなたは陳蕃が徐孺子に加へるごとく禮をわたくしに加へてくださる。あなたの詩は謝宣城にあとをつづけるほどうまい。いま雪のふつた岸に梅のむれが花さき、春の泥にさまざまの草が生えだしてきた。むかし漁父が屈原に問をおこしたとき彼は原に世と推し移れと敎へた、自分はその敎に違ふことはようせぬ、だからこれからまたもつと南方へでかけてゆかうとおもふのである。

南征

春岸桃花水。雲帆楓樹林。
春岸桃花の水、雲帆楓樹の林。

偸生長避地。適遠更霑襟。
老病南征日。君恩北望心。
百年歌自苦。未見有知音。

生を偸みて長に地を避く、遠きに適かむとして更に襟を霑す。
老病南征の日、君恩北望の心。
百年歌自ら苦しむ、未だ見ず知音有るを。

【字解】【一】桃花水　二月桃の花のさく頃の出水。【二】雲帆　雲を帶びたる帆を馳せるをいふ。【三】楓樹林　南方には楓樹多し。【四】南征　潭州（長沙）に向ふをいふ。

【題義】南方にでかけしことをのべた詩。大暦四年春、岳州より潭州へ向ふ途上の作か。

【詩意】春の岸べには桃花の節の出水がながれてゐる、そのとき自分は楓樹の林にそうて雲帆を飛ばしてゆく。自分は生きることをぬすまんがためにいつも危險な地を避けてゐる。これからまた遠方へゆかうといふのであるからいまさらに涙がえりもとをうるほす。老病の身を以て南征するとき、君恩をおもうて北に望むこころ、そのむねのうちやいかに。じぶんの生涯はじつにみづから苦しんで歌ひつつあるのだ、けれどもまだだれも知音の人があるのをみうけぬのである。

歸夢

道路時通塞。江山日寂寥。

歸夢

道路時に通塞す、江山日に寂寥たり。

偸生唯一老。伐叛已三朝。
雨急青楓暮。雲深黑水遙。
夢魂歸未〔亦〕得。不用楚辭招。

生を偸むは唯だ一老、叛を伐つ已に三朝なり。
雨急にして青楓暮る、雲深くして黑水遙なり。
夢魂歸るも未〔亦た〕得、用ひず楚辭の招。

【字解】【一】一老　自己をいふ。【二】伐叛已三朝　叛を伐つとは安祿山・史思明・僕固懷恩・吐蕃等を伐つをいふ、三朝とは玄宗・肅宗・代宗の朝をいふ。【三】黑水　「尙書」禹貢に、黑水西河惟雍州、とみゆ。黑水は雍州の西北よりして梁州の西南に出づ、雍州は秦（關中）の地にして作者故郷の在る所。【四】歸未〔亦〕得　未の字一に亦に作る、從ふべし。得とはそれにてよろしきをいふ。【五】楚辭招　「楚辭」に招魂篇あり、宋玉、屈原の生靈をまねき故郷にかへらしめんとせり。

【題義】故郷にかへる夢に關してのべた詩。作時詳かならず。仇氏は大暦三四年間の作なるべしといへり。青楓とあれば湖南の詩ならん。

【詩意】道路は通じたりまた塞つたりする、江山は日日さびしくなる。生を亂世にぬすんでゐるものは過去の同志のうちでじぶん一人であるが、叛亂を征伐することは已に三朝の久しきにまたがつてゐる。今雨が急にふりしきつて青楓林が暮れかかり、雲深くとざして故郷の黑水の方がはるかである。夢中の魂で歸るさへも故郷に歸つてをればそれで滿足である。ことさら楚辭の「招魂」などで魂を招いてもらはなくともよろしい。

過南嶽入洞庭湖

洪波忽爭道。岸轉異江湖。
鄂渚分雲樹。衡山引舳艫。
翠牙穿裛蔣。碧節吐寒蒲。
病渴身何去。春生力更無。』
壤童犁雨雪。漁屋架泥塗。
敧側風帆滿。微冥水驛孤。
悠悠回赤壁。浩浩蒼梧。
帝子留遺恨。曹公屈壯圖。』
聖朝光御極。殘孽駐艱虞。
才淑隨斯養。名賢隱鍛鑪。
邵平元入漢。張翰後歸吳。
莫怪啼痕數。危檣逐夜烏。』

南嶽に過ぎらむとして洞庭湖に入る

洪波忽ち道を爭ふ、岸轉じて江湖異なり。
鄂渚雲樹分る、衡山舳艫を引く。
翠牙裛蔣を穿つ、碧節寒蒲に吐かる。
病渴身何くにか去る、春生ずるも力更に無し。』
壤童雨雪に犁く、漁屋泥塗に架す。
敧側風帆滿つ、微冥水驛孤なり。
悠悠赤壁回る、浩浩蒼梧を略せむ。
帝子遺恨を留む、曹公壯圖を屈す。』
聖朝御極光る、殘孽艱虞を駐む。
才淑斯養に隨ふ、名賢鍛鑪に隱る。
邵平元漢に入る、張翰後れて吳に歸る。
怪しむ莫かれ啼痕の數なるを、危檣夜烏を逐ふ。』

【字解】〔一〕過南嶽　過は將レ過スント る意、南嶽は衡山をいふ、長沙の嶽麓山は衡山の麓なりとて、之を以て此にあてんとするは當らず。〔二〕洪波　大波。〔三〕爭道　江の波は湖に進まんとし、湖の波は江に進まんとす、これ爭道なり。〔四〕異江湖　江と湖と相異なり、いままで江を經しものが湖とかはりしをいふ。江は大江、湖は洞庭湖。〔五〕鄂渚　武昌をいふ。〔六〕分雲樹　分は分離、あちらに分けられてのこるをいふ、雲樹は雲及び樹なり。〔七〕衡山　衡州府衡山縣の西三十里にあり、五嶽の一にして南嶽なり。實際肉眼にてはまだ見えざれども詩興のうへよりいへり。〔八〕引舳艫　引はみちびくをいふ、舳は舟尾、「とも」なり、艫は舟前、「へさき」なり。〔九〕翠牙穿裛蔣　翠牙はまこもの芽のとがりたるをいふ、穿とは貫くごとくぬけでたるをいふならん、裛蔣の裛は露につつまれたるをいふ、仇注に、裛蔣蔣之瘦而未レ壯者、といへるは據る所を見ず、蔣は「まこも」。〔一〇〕碧節　みどりのふし。〔一一〕寒蒲　はるざむのがま。〔一二〕病渴　渴は消渴のやまひ、已にみゆ。〔一三〕壤童　つちをすきかへすしもべ、當時の俗語ならんといへり。〔一四〕犁　すきをもつてすく。〔一五〕漁屋　漁父の番小屋。〔一六〕架泥塗　どろのうへにわたしてある。〔一七〕敧側　かたむく。〔一八〕風帆滿　帆が風を十分に孕む。〔一九〕微冥　かすかにくらし。〔二〇〕水驛　水のほとりのしゆくば。〔二一〕悠悠　はるか。〔二二〕回赤壁　この回は回轉するをいふならん、赤壁は地名、武昌府蒲圻縣にあり、吳蜀の聯合軍が魏の曹操の舟師を燒きうちせしところ。地名にはあれど其の地形が赤土の岸壁のつづける處なり、故に舟行の際には回轉すといへるなり。〔二三〕浩浩　大なる貌、廣遠なるをいふ。〔二四〕略蒼梧　略とは巡行するをいふ、蒼梧は山の名、卽ち九疑山、湖南永州府寧遠縣南六十里にあり、舜の葬られし地と稱せらる。〔二五〕帝子　堯の二女にして舜の妻たる娥皇・女英をいふ。舜、三苗を征し南して蒼梧に死すときき悲しみて湘水に身を投じて死す。（王逸曰く、舜の南征に從ひ道にて死す、と。）死して湘水の神湘君の妃となり、湘夫人と稱し祀らる。又娥皇・女英の淚は竹に染まり、遂に湘水のほとりには斑竹を生ずるに至りしと。みな古傳說なり。〔二六〕留遺恨　遺恨とは舜と生前に逢ふことを得ざりしうらみ。此の句は上の蒼梧の句を承く。〔二七〕曹公　曹操。〔二八〕屈壯圖　さかんなるはかりごとが屈したわめられたり。〔二九〕聖朝　代宗の朝をいふ。〔三〇〕光御極　光はひかりかがやく、御極は紫極（天の中央）を支配せらるるをいふ、天下を治めらるることをさす。〔三一〕殘孽　のこれるわざはひ、仇氏は蔡夢弼により吐蕃のこととす、楊注は河北の諸降將をさすとせり。〔三二〕駐艱虞　駐はひきとめてのこしておくこと、艱虞はなんぎ、しんぱい。〔三三〕才淑　才あり善良なる人。〔三四〕斯養　斯はたきぎ刈

り、癸は炊事の掛り、共に兵卒についていふ、武官を輕蔑していひし語なり。【三五】名賢　名あるかしこき人。【三六】隱鍛鑪　かぢやのいろりのそばに隱遁する、魏の末に竹林七賢の一人嵇康は鍛冶（かぢや）にかくれたり。【三七】邵平　秦の東陵侯たりし邵平、漢になりて長安の青門の外に瓜つくりとなりてすみたる故事。【三八】張翰　晉の張翰、齊王冏が權を用ひ、後には失敗すべきをはかりて、秋風の起るを見て故郷の鱸魚がたべたしといひて吳に歸り去れり。邵平・張翰を以て自ら比す。【三九】啼痕　なきはらした涙のあと。【四〇】危檣　高くあやふきほばしら。【四一】逐夜烏　この烏は卽ち檣烏にて風見としてほばしらのうへに高くつけてあるからすなり。逐ふとは俗用にて追ひゆくなり、他船の檣のあとにつきゆくこと。

【題義】南嶽たる衡山へよぎる目的を以て大江から洞庭湖へいりこんで來たときのことをのべた詩。地里の順よりすれば岳陽樓に關せし詩篇より前にあるべきものなり。大曆四年春の作。

【詩意】大きな波が忽ち進路を爭ふ、それは岸がうつつて大江と洞庭湖とがいれかはりになるからである。北は鄂渚の方に雲や樹が分離されてのこり、南の方では衡山が自分ののる舟の舳艫をみちびきよせる。露につつまれた蔣からは翠の牙がつきぬけ、春寒の蒲からは碧の節が吐きだされてゐる。消渴のやまひをわづらひながらこのからだはどこへゆくのであるか、春は生じたがさらに體力が無くなつてゐる。』土壤をすくしもべは雨雪のなかに犁をつかつてをる。漁父の番小屋は泥塗のうへに架してある。かたむきながら帆は風を十分に孕んでゐる、水邊のしゆくばはひとつさびしげに微にくらくみえる。赤壁の岸ははるかに回轉してゆく、これから遠く蒼梧のあたりまでゆかうとするのである。堯帝の姫宮はいまに舜帝にあへなかつた恨みをのこしてゐる。曹操ほどの人でも赤壁のまけいくさには壯圖を屈してしまつた。』いま聖人（代宗）の朝では御代の御政治がかがやいてゐるが、わざはひのたねがのこつて艱難憂虞がとれきらず、才智ある善人がかへつて柴刈り飯焚きの兵卒のあとにつきしたがひ、名ある賢人が鍛冶の爐ばたに隱遁してゐるといふありさまである。むかし邵平は秦の東陵侯でありながら瓜つくりになつて漢の代にはひつてすごしたが、自分はさうはゆかぬ。まことの張翰は故郷の吳に歸つたが、今の張翰たる自分は故郷へ歸ることがおくれてしまつた。自分のなきはらした涙の痕がなんでかくしばしばつくかは怪しむにおよばぬ、夜まで他船の風見の檣烏を追ひかけてあるいてゐるのであるから。』

宿青草湖

洞庭猶在目。青草續爲名。
宿槳依農事。郵籤報水程。
寒冰爭倚薄。雲月遞微明。
湖雁雙雙起。人來故北征。

青草湖に宿す

洞庭猶ほ目に在り、青草續ぎて名を爲す。
宿槳農事に依る、郵籤水程に報ず。
寒冰爭ひて倚薄す、雲月遞に微明なり。
湖雁雙雙として起る、人來るに故らに北征す。

【字解】【一】青草湖　洞庭湖の東南部にある湖の名、北は洞庭に連り、南は瀟湘に接し、東は汨羅の水を納る。夏秋ごとに水泛びて

洞庭と一となる。水涸るるときは此の湖先づ乾き青草生ず、故に名づくといふ。【二】續爲名　洞庭につづいてまた湖名をなすをいふ。【三】宿槳　かぢをやどらす、といふは船を泊するをいふ。楚の人は湖中に田を種う。そこに依りて宿するなり。【四】依農事　農事をする場所によりそふをいふ。【五】郵籤　驛の漏刻の更籌(時刻をしらす針)。【六】報水程　水路に報知する。【七】倚薄　よりせまる、近づくをいふ。【八】遞微明　遞とは交互になるをいふ、微とは月光を隱微ならしむること、明とは月光の明朗をいふ、微は雲に、明は月にかかる。

【題義】青草湖で舟を泊したことをよんだ詩。大曆四年春、潭州へ南航するときの作。

【詩意】洞庭湖がまだ目のなかに在るのに之に續いて青草湖といふのが湖名を爲してゐる。じぶんは舟かぢをとめるには湖田にちかいところに依る、水邊の驛館は漏刻の時間を水路のところまで報知してくれる。つめたい氷が爭うて船のそばへよつてくる、雲と月はゆきかうてたがひにうすぐらくなつたり、明るくなつたりしてゐる。をりしも湖上の雁は一對一對にたちあがり、人が北からやつてくるのに、彼等はわざとらしく故郷の方位にあたる北の方へととんでゆく。

宿白沙驛(一)　【原注】初過湖南五里。

白沙驛に宿す　【原注】初めて湖を過ぎてより南五里。

水宿仍餘照。人煙復此亭。　水宿仍ほ餘照、人煙復た此の亭。

驛邊沙舊白。湖外草新青。　驛邊沙舊白し、湖外草新に青し。

萬象皆春氣。孤槎自客星。　萬象皆春氣、孤槎自ら客星。

隨波無限月。的的近南溟。　波に隨ふ無限の月、的的南溟に近づく。

【字解】【一】白沙驛　原注によれば青草湖をすぎて南すること五里にある驛なり。清一統志に云ふ、湘陰縣北五十七里、湘江のほとりにあり、と。【二】驛邊二句　白沙驛と青草湖とを分析して用ひたり。【三】孤槎自客星　「博物志」に、人あり槎に乘じて天上に至り織女と牽牛の丈夫とを見、何處ぞと問ふ、其の人曰く、蜀に至り嚴君平に問へと、還りて君平に問へば、曰く、某年某月日、客星、牛女を犯す、正に此の人、天河に到りし時なり、と。乘槎を泛舟に、客星を自己に比す。【四】無限月　無限は清光のひろく照らすをいふ。【五】的的　かがやくさま。【六】近南溟　近とは槎が近づくをいふ、南溟は極南の大海、語は「莊子」にみゆ。

【題義】白沙驛に舟を泊せしことをよんだ詩。大曆四年春、南航時の作。

【詩意】水上にやどりをしたがやはりまだ夕ばえがのこつてゐる。またこの人煙のたちのぼる驛亭のそばにとまるのか。驛のそばの沙はもとからまつしろである、湖外には草が新に青く生えだしてゐる。よろづの物象はみな春の氣をおびてをるが、じぶんはひとつのいかだをうかべてあるいてゐるのでしぜん自分は昔物語りにある客星みた樣なものである。清光かぎりない月が波のまにまに照りわたつてゐるが、そのあかあかとしたなかをだんだん南溟に近づいてゆく樣なここちがする。

湘夫人祠

肅肅湘妃廟。空牆碧水春。
蟲書玉佩蘚。燕舞翠帷塵。
晚泊登汀樹。微馨借渚蘋。
蒼梧恨不盡。染淚在叢筠。

【字解】〔一〕湘夫人祠　湘夫人は娥皇・女英をいふ、事は「過南嶽入洞庭湖」詩の蒼梧・帝子の句解をみよ。祠は卽ち湘夫人の靈を祀る所、黃陵廟なり、湘陰縣北九十里にあり、祠の方、白沙驛より先に經過すべき地位にあり。〔二〕肅肅　嚴靜のさま。〔三〕湘妃　湘夫人。〔四〕蟲書　蟲がそのよだれにて文字の形を書す、なめくじ、かたつむりの類のはひしあとをいふ。〔五〕玉佩蘚　妃の神像の玉佩に生えたこけ。〔六〕翠帷　みどりのとばり。〔七〕登汀樹　樹のうへによぢのぼるには非ず、樹木の生えたみぎはのあたりに上陸するをいふ。〔八〕微馨　かすかなかをり。〔九〕借渚蘋　なぎさに生えたよもぎのかをりを借りて神前に供薦する。〔一〇〕蒼梧　舜の死せし地、已にみゆ。〔一一〕恨　湘夫人の恨み。〔一二〕染淚在叢筠　叢筠は竹むらをいふ、此の句斑竹のことをいふ、「過南嶽入洞庭湖」詩をみよ。

【題義】湘夫人の祠堂をすぎて拜せしことをよんだ詩。大曆四年春、南航時の作。

【詩意】湘夫人の廟はまことに靜にいかめしく立つてゐる。だれも居らぬ牆のそばには碧の水が春の色をたたへてゐる。神像の玉佩の蘚には蟲が涎で字を書いてゐるし、翠の帷の塵のたまつたところには燕が舞うてゐる。自分は夕がたここにとまつてみぎはの樹木の生じたところに上陸して、渚の蘋から微な馨を借りて神にささげた。湘夫人が蒼梧の舜帝に逢へなかつた恨はいまに至るも盡きないので、そのしるしには叢生する竹に涙の染めたあとがのこつてゐる。

祠南夕望

百丈牽江色。孤舟泛日斜。
興來猶杖屨。目斷更雲沙。
山鬼迷春竹。湘娥倚暮花。
湖南清絕地。萬古一長嗟。

【字解】〔一〕祠南　湘夫人祠の南。〔二〕百丈　舟を牽く竹索。〔三〕牽江色　夕ばえの色ある江上にひく。〔四〕山鬼　山の怪、屈原の九歌にみゆ。〔五〕湘娥　湘妃・湘夫人におなじ、山鬼・湘娥の二句空想なり。〔六〕清絕　非常に清らか。〔七〕一長嗟　ひとへにながくなげく、多く遷客羈人の歷る所となるに過ぎざるを以てなり。

【題義】湘夫人祠の南で夕がた眺望したことをよんだ詩。前篇と同時の作。

【詩意】湘江の夕ばえのきらめくところに百丈の竹索をひき、太陽の傾くをりにひとつの舟を泛べて

ゐる。興がわいてくると杖をつき屐をはいて陸にあがつてみる、ずつとみわたしてながめが盡きたとおもふそのさきにまだ雲沙が横はつてゐる。山鬼は春の竹に迷うてゐるが如く、湘娥は日ぐれの花に倚りそうてゐるかの樣におもはれる。湖南は非常に清らかにいいところだが、をしいことに賢人が流しものにされたりする場所なので、萬古ひとへに長歎を發するわけである。

上水遣懷

上水の遣懷

我衰太平時。身病戎馬後。
蹭蹬多拙爲。安得不皓首。
驅馳四海內。童稚日餬口。
但遇新少年。少逢舊親友。』
低頭下色地。故人知善誘。
後生血氣豪。舉動見老醜。
窮迫挫曩懷。常如中風走。
一紀出西蜀。於今向南斗。』

我は衰ふ太平の時、身は病む戎馬の後。
蹭蹬拙爲多し、安んぞ皓首ならざるを得む。
驅馳す四海の內、童稚に日に口に餬ましむ。
但だ遇ふ新少年、舊親友に逢ふこと少し。』
低頭色を下す地。故人は善誘を知る。
後生は血氣豪なり、舉動老醜とせらる。
窮迫曩懷挫けたり、常に風に中てられて走るが如し。
一紀西蜀を出づ、今に於て南斗に向ふ。』

孤舟亂春華。暮齒依蒲柳。
冥冥九疑葬。聖者骨已朽。
蹉跎陶唐人〔民〕。鞭撻日月久。
中間屈賈輩。讒毀竟自取。
鬱悒二悲魂。蕭條猶在否。』
嵩崒清湘石。逆行雜林藪。
篙工密逞巧。氣若酣杯酒。
訶謳互激越。回斡明受授。
善知應觸類。各藉穎脫手。
古來經濟才。何事獨罕有。』
蒼蒼衆色晚。熊掛玄蛇吼。
黃羆在樹顚。正爲羣虎守。
羸骸將何適。履險顏益厚。

孤舟春華亂る、暮齒蒲柳に依る。
冥冥たり九疑の葬、聖者骨已に朽ちたり。
蹉跎たり陶唐の人〔民〕、鞭撻せられて日月久し。
中間屈賈が輩、讒毀竟に自ら取れり。
鬱悒なり二悲魂、蕭條猶ほ在りや否や。』
嵩崒たり清湘の石、逆行すれば林藪雜はる。
篙工密に巧を逞しくす、氣杯酒に酣なるが若し。
訶謳互に激越、回斡受授を明かにす。
善知は應に類に觸るべし、各〻穎脫の手を藉る。
古來經濟の才、何事ぞ獨り有ること罕れなるや。』
蒼蒼として衆色晚る、熊掛りて玄蛇吼ゆ。
黃羆樹顚に在り、正に羣虎の爲に守る。
羸骸將に何くに適かむとする、險を履む顏益〻厚し。

庶與達者論。呑聲混瑕垢。『庶はくは達者と論ぜむ、聲を呑みて瑕垢に混ず。』

【字解】〔一〕上水　湘水をさかのぼる、岳州より潭州(長沙)衡州に向ふは上水なり。〔二〕蹭蹬　困頓の貌、又勢を失ふ貌。〔三〕揣爲　まづいしかた。〔四〕童稚日餬口　日日童稚の口に餬はましめる、妻子をつれて衣食に奔走するをいふ。〔五〕下色　謙遜なるかほつきをする。〔六〕後生　わかもの、後輩。〔七〕擧動　後生の擧動。〔八〕見老醜　こちらを老醜としてとりあつかふ。〔九〕囊懷　むかしのかんがへ。〔一〇〕中風走　氣がくるうて走る。〔一一〕一紀　十二箇年、作者乾元元年に蜀に入り、大曆三年に峽を出でたり、凡そ十一年なり、約一紀といふべし。〔一二〕南斗　星宿の名。〔一三〕春華　春のはなやかさ。〔一四〕暮齒　晩年。〔一五〕蒲柳　かはやなぎ。〔一六〕九疑葬　舜の九疑山に葬られしこと。〔一七〕聖者　舜をさす。〔一八〕蹉跎陶唐人・鞭撻日月久　仇氏朱注によりて陶唐人を羲和とし、羲和日御となるの傳說と結びつけて、鞭撻ニ日月ニは、驅送ニ歲月ニなりといへり。單に時間の多く過ぎしことを言ふものならんには、かく二句を費して冗漫にのぶる必要いづこにありや。仇說服する能はず。愚案次の如し、蹉跎はつまづく、失志の貌、陶唐人とは陶唐民なり、今の民は卽ち堯舜の民の意、鞭撻日月久とは人民が爲政者より虐待を被る日月の久しきをいふ。〔一九〕屈賈　屈原、賈誼、已に屢〻見ゆ。〔二〇〕自取　屈賈等が自らそれを招き取る。〔二一〕鬱悒　むれのふさがること。〔二二〕二悲魂　悲しめる二人の魂、屈賈をいふ。〔二三〕嵩崒　山峻しき貌。〔二四〕湍湘石　すんだ湘水の石。〔二五〕逆行　すなはち流れにさかのぼるをいふ。〔二六〕雜林藪　さまざまのやぶにであふ。〔二七〕篙工　舟のさをかた。〔二八〕逞巧　うまく舟をあやつるをいふ。〔二九〕酣杯酒　一杯きげん。〔三〇〕謌謳　竝に「うたふ」なり。〔三一〕激越　調子のはげしきこと。〔三二〕回斡　回旋し斡轉する、舟をめぐらすをいふ。〔三三〕受授　舟人が舟のへさきとともとにてかけごゑして水脈を求むるを受授といふと、あひづのうけわたしなり。〔三四〕善知　智識のすぐれた人。〔三五〕觸類　類似の事例にふれてかんがへる。〔三六〕藉　かる、よる。〔三七〕穎脫手　妙手をいふ、穎脫は錐のさきが囊の中からつきでるをいふ、毛遂が故事。〔三八〕經濟才　經國濟民の才、天下を治める才。〔三九〕衆色　諸の景物の色。〔四〇〕樹顚　顚は巔。〔四一〕守　虎をうち殺さんと番をするなり。〔四二〕羸骸　つかれたむくろ。〔四三〕履險　危險な土地をふむ。〔四四〕達者　悟った人。〔四五〕呑聲　しのび音になく。〔四六〕混瑕垢　老子の和ル光同ル塵の意、さすがあかあるさたなきもののなかに混じてゐる。「左傳」に、蘧瑗匿ル瑕、國君含ル垢、とあり。

【題義】岳州の方から湘水をさかのぼるときおもひを遣つた詩。大曆四年春の作。

【詩意】自分は太平の時節に老衰し、からだは兵馬騷亂の後に病氣となつた。つかれた足どりで拙い仕方ばかり多かつた、どうして白髮にならずにゐられよう。それで四海の內を驅けめぐつて日日こどもらの口すぎをさせてゐる。であふ所は新少年ばかりで、舊親友に逢ふことは少い。』あたまをさげ顏色を卑うするばあひでも、ふるなじみの人ならば善くじぶんをみちびいてくれることをこころえてをるが、後輩ときては血氣粗豪で、その一擧一動にもこちらを老醜あつかひにする。じぶんは窮迫のあまりむかしかんがへてゐた志はくじけてしまひ、いつも氣がくるうて走つてゐる樣なさまをしてゐる、十二年ちかくでやつと西蜀から出て、今になつてまだ南斗の方向にむかつてたびをしてをる。』孤舟のあたりには春の華やかさがみだれてゐるが、じぶんは晩年のすがたを以て蒲柳に依りそうてゐる。舜の葬られたといふ九疑山はくらくてはつきりわからぬ、聖帝の骨はもはや朽ちてしまつた。堯以來性質にかはりのない同じ堯の民も志を失ひ、暴吏から鞭撻されてながい月日を經た。そのなかごろに於て屈原だの賈誼だのは自分の忠直をまげなかつたため他人から讒言をされわるくちをいはれた、それは自分が招いたというてよろしい、之をおもふとおもひふさがる、彼の二人の悲しめる魂はさびしくもいまなほ存在してゐるかどうか。』すんだ湘水のなかの石はけはしい、この川の流れをさ

かのぼるとさまざまの林藪にであふ。そこを舟がゆくときに篙工は人知れずうまく腕をふるうて、一杯きげんのときの様な元氣で、高い調子でうたをうたひ、ともへさきの受けわたしの掛けごゑもはつきりと舟を回轉させてあやつる。智能のすぐれたものならばこの類例から推してかんがへられるであらう、なにごとも事をなすにはそれぞれ非凡な嚢中から穎脱する様な手をからねばならぬものである。ところがむかしから天下を治める才だけは何故に無いのであるか。』　いま蒼蒼として多くの物象が晩れかかつてきた、熊は樹にぶらさがり、玄蛇は吼えてゐる、黄い羆は樹のいただきにゐて虎たちがとほつたらうちつけてやらうと番をして見守つてゐる。このつかれたからだをもつてじぶんはどこへゆかうとするのか、危險なところを履むなどはあつかましいことおびただしい。じぶんの心事は悟つた物のわかつた人とかたりたいとおもふ、いまはただまつてしのびねにないて垢だらけのきたないものでもそれとまざつてごまかしてゐるよりほかはない。』

遣遇

遇に遣る

磬折辭主人。開帆駕洪濤。
春水滿南國。朱崖雲日高。
舟子廢寢食。飄風爭所操。

磬折主人を辭し、帆を開きて洪濤に駕す。
春水南國に滿つ、朱崖雲日高し。
舟子寢食を廢す、飄風に操る所を爭ふ。

我行匪利涉。謝爾從者勞。
石間采蕨女。鬻市輸官曹。
丈夫死百役。暮返空邨號。
聞見事略同。刻剝及錐刀。
貴人豈不仁。視汝如莠蒿。
索錢多門戸。喪亂紛嗷嗷。
奈何黠吏徒。漁奪成逋逃。』
自喜遂生理。花時甘緼袍。』

我が行利涉に匪ず、謝す爾從者の勞するを。』
石間采蕨の女、市に鬻ぎて官曹に輸す。
丈夫は百役に死す、暮に返りて空邨に號ぶ。
聞見事略ぼ同じ、刻剝錐刀に及ぶ。
貴人豈に不仁ならむや、汝を視ること莠蒿の如し。
錢を索むるは門戸多し、喪亂に紛として嗷嗷たり。
奈何ぞ黠吏の徒、漁奪して逋逃と成るや。』
自ら喜ぶ生理を遂ぐるを、花時緼袍に甘んず。』

【字解】【一】遣遇　略しずぎたかき方なり、所ノ遇に遣ノ懷の意なるべし。自己のぶつつかつた境遇で懷を遣るをいふ。【二】磬折　磬石の如く腰をくの字に折る、ここは先方に敬禮するさまをいふ。「禮記」曲禮に、立則磬折垂ノ佩、とみゆ。又「莊子」に、夫子曲ノ腰磬折、とあり。【三】主人　土地の主人、地もとにて自己を迎へてくれたる人をさす。【四】朱崖　赤色の岸崖、「湘中記」に、湘川清照五六丈、下見ノ底、石如ニ樗蒲一、五色鮮明、白沙如ニ霜雪一、赤崖如ニ朝霞一、とみゆ。【五】雲日　雲をおびたる太陽。【六】利涉　「易」に、利ノ涉ニ大川一、とみゆ、利涉は涉りて利あるをいふ。【七】謝爾　謝は感謝、爾は下の從者をさす。【八】從者　仇氏曰く舟を操るものをさすと。【九】官曹　役人たち。【一〇】丈夫　をつと。【一一】百役　さまざまの官の勞役。【一二】空邨　人なき村。【一三】事略同　どこでも大概同じこと。【一四】刻剝　きざみ、はぐ、税金をひどくしぼりとるをいふ。【一五】錐刀　きりかたなのさ

きは尖小なるものなり。微細の利益をいふ。【六】豈不仁　よもやなさけ知らずではあるまい、辭を婉曲にせるなり。趙注は豈の字を次句までかけてみたり。【七】莠蒿　わるいくさ、よもぎ。【八】索錢　税金をはたる。【九】多門戸　甲も取りにくる、乙もくることをいふ。【一〇】漁奪　税金利益をあさりとる。【一一】成逋逃　趙注にいふ、人民の逃亡を成すなりと。余案するに、逋逃の主となるの意なるべし。「尚書」武成篇に、殷の紂王の暴虐をのべて、爲二天下逋逃主一といへり。逋も亦逃なり、紂は天下の罪人の逃亡者の主魁となりしといふなり。詩句は黠吏は罪人の逃亡者のはきだめなりとの意ならん。【一二】遂生理　生活を營み得るをいふ。【一三】花時　花のさく春暖のとき。【一四】甘緼袍　緼袍はわたいれのどてら。それに甘んずるとは貧にしてきがへの衣をもたぬなり。

【題義】をりにあひて懷ひを遣りし詩。大暦三年春、南航時の作。

【詩意】自分は腰をかがめて主人にいとまごひをなし、舟の帆を開いて大きな波にのつてでかける。南國には春の水がたつぷりしてゐるし、岸べの朱崖には雲をおびた太陽が高くてつてゐる。船頭らは寢食を廢めて、つむじ風に舟をあやつることにきをもんでゐる。じぶんの旅行は船わたりの都合がよくないのでおまへたちに骨を折らせることは申しわけのないことだ。』石間に蕨を采つてゐる女がゐる、彼の女はそれを市にひさいで役人のところへその價金をさしだすのだ。彼の女の夫はさまざまの勞役のために死んでしまつた、彼の女は日ぐれに家にかへつては無人の村に號哭するのである。自分の見聞することはどこでもほぼ同じ樣なものである、人民からしぼり取ることは錐刀の細利にまで及んでゐるのである。高貴の官員はよもやなさけ知らずでもあるまいに、汝等を視ることは莠蒿の惡草をみるが如くである。上たるものがさまざまの方面から税金をはたる、それで喪亂のをりから人民ががやがやとさけびたててゐる。なんでわるがしこい小役人どもは罪人のはきだめをなして人民から利をあさるのであるか。』いま自分のであうた人民に比べると、自分は生きてゆかれることを喜ぶ、花の咲くあたたかい時節にわた入れのどてらをきてゐても滿足である。』

解憂を解く

減米散同舟。路難思共濟。
向來雲濤盤。衆力亦不細。
呀坑瞥眼過。飛櫓本無蒂。
得失瞬息間。致遠宜恐泥。
百慮視安危。分明曩賢計。
茲理庶可廣。拳拳期勿替。

米を減じて同舟に散ず、路難共濟を思ふ、
向來雲濤盤まる、衆力亦た細ならず。
呀坑瞥眼に過ぎたり、飛櫓本蒂無し。
得失瞬息の間、致遠宜なり恐泥すること。
百慮安危を視るは、分明なる曩賢の計なり。
茲の理庶はくは廣む可けむ、拳拳として替つる勿からむ。

「ことを期す。」

【字解】【一】解憂　結ぼれてゐた憂の心のほどけたこと。憂とは詩中にある盤渦の難場をこえしことをいふならん。【二】同舟　同舟の人人。【三】雲濤盤　雲のゐる濤がうづまくこと。【四】衆力　衆人の力、盤渦から舟をだすために盡力せしこと。【五】細　小をいふ。【六】呀坑　口をあいてゐるあな、難場所をいふ。【七】瞥眼　ちらとみるまに。【八】飛櫓　速くかいをつかふ。【九】

無帯　なりぶしなし、他に附着するものなし。【一〇】得失　得は無難のこと、失は舟の顚覆などのこと。【一一】致遠宜恐泥　致遠恐泥は「論語」にみゆ。已にみゆ。仇注に、涉レ遠尙恐ニ沮滯一、とあり、恐らくは是に非ず。本句の作者の意は、宜乎「致レ遠恐レルトイフコトナヅマンコトヲ泥」、といふに在るべし。【一二】百慮　いろいろ心をくばること。【一三】曩賢　むかしの賢人。【一四】廣　ひろめてあてはめる。【一五】拳拳　捧持の貌。【一六】替　すつる。

【題義】しんぱいのとけて無くなりしことをよんだ詩。大暦四年春、南航時の作。

【詩意】自分は自分のたべるべき米をへらして同舟の人たちにわけてやつた。それは道路のなんぎを共にすくひたいとおもうたからだ。さきほどから雲のゐる濤が渦をまいてゐた、そこからのがれでるため多くの人たちがだしてくれた力は決して細小ではなかつた。それで飛ぶが如くあやつられる「かい」も本來他に附着せず輕くつかはれて、口をあけて待つてゐた危險な坑からまたたくまにでることができた。一得一失はつかのまにきまつた。むかしの聖人が「遠みちするには途中にへばりつく恐れがある」と言はれたことはもつともなことだ。（衆力をあはせたからへばりつかずに事がはやくきまつたのだ）。』事の安危をみるにはさまざまのしんぱいを以てするといふ、これがむかしの賢人のはつきりとした計である。この道理は舟のばあひばかりでなく他にもおしひろめることができる、自分はこのことをむねにつけてすてまいと期してゐる。』

宿鑿石浦

早宿賓從勞。仲春江山麗。
飄風過無時。舟楫不敢繫。
迴塘澹暮色。日沒衆星曁。
闕月殊未生。青燈死分翳。
窮途多俊異。亂世少恩惠。
鄙夫亦放蕩。草草頻年歲。
斯文憂患餘。聖哲垂彖繫。

【字解】【一】鑿石浦　邵寶が注にいふ、浦は長沙府湘潭縣西にあり、と。淸一統志同じ。作者未だ潭州（長沙）に到着せざるに湘潭の詩ある理なし、此の篇以下の編次は頗る錯亂せり。今岳陽樓よりこのかた作者が湘江にさかのぼれる地を詩に見ゆる地名の地里上の位置によりて順にたどるときは、岳陽樓・青草湖・湘夫人祠・白沙驛・喬口・銅官渚・岳麓山道林二寺・發潭州・鑿石浦・過津口・空靈岸・花石戍・晚洲・白馬潭（臨湘縣に在りとせば岳陽樓以前にあるべし、但詩の季節合はざるにより臨湘縣に在るものには非ざるべし）・望嶽の如くなるべし。此の順位にたがへるものは編次の誤なり。【二】賓從　賓は船客、從は操舟者。【三】無時　定れる時なし。【四】不敢（敢不）繫　仇氏は敢不を不敢に改めたるも、敢不をよしとす。【五】迴塘　川の本流より横にまがりこみたるたまり水の池。【六】曁　光の微かなる貌。【七】闕月　仇注に二日の月ならんといへり。【八】殊　「說文」に殊は死なりとあり、月の死魄をいふ。【九】死滅

するといふ。【一〇】分翳　翳は夜色のくらがり、くらがりを分てばいよいよくらくなるわけなるも、作者の意は夜色のうすあかるさを分つを意味せるならん。【一一】俊異　すぐれた人物。【一二】鄙夫　いやしきをとこ、自己をいふ。【一三】放蕩　とりとめなき貌。【一四】草草　あわただしき貌。【一五】斯文　文學の士をいふ。【一六】憂患餘　「易」の繫辭に、作レ易者、其有二憂患一乎、とみゆ。【一七】聖哲　かしこき人、周の文王・孔子をさす。【一八】彖繫　「易」の彖傳と繫辭傳とをいふ、彖は卦にくだした説明、文王作るといはる、繫辭は一般的の説明、孔子作るといはる。

【題義】鑿石浦にとまりしことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州へ上航せしときの作。編次誤る。

【詩意】仲春江山の麗はしいをりに、船客も操舟者もくたびれたために早どまりをする。暴風はいつときまりなしに吹き過ぎるから、舟楫をつながぬわけにはゆかぬ。それでよこみちの池にはひるとそこには夕ぐれの色があはく、太陽は沒して多くの星の光がかすかにさしてゐる。かけた月は死んでゐるのでまだ出でこぬし、燈火も滅して夜明がすこしさすくらゐのことである。』途のゆきつまつたところにはすぐれた人物が多くゐるものだ。世のみだれたときにはそんな人物に對しても恩惠を施す人はすくない。自分といふをとこはまたとりとめのない人物であわただしくしてゐるうちにしきりに年月がたつてしまふ。ただ文學に志あるものはしんぱいごとのあげくには文字をのこすもので、文王・孔子の樣な聖哲も憂患のあまり「易」の彖傳・繫辭傳を後世に垂れのこした。（自分が詩をつくるのも同じ趣旨からである）。』

早行

歌哭俱在曉。行邁有期程。
孤舟似昨日。聞見同一聲。』
飛鳥數〔散〕求食。潛魚何獨驚。
前王作網罟。設法害生成。
碧藻非不茂。高帆終日征。
干戈未揖讓。崩迫關其情。』

【字解】【一】歌哭　仇氏曰く、歌も亦た悲歌なりと。【二】行邁　邁も「ゆく」なり。【三】期程　きまつたみちのり。【四】孤舟　孤舟に於ける境遇をいふ。【五】同一聲　歌哭の聲のかはらざるをいふ。【六】飛鳥數〔散〕求食　數の字一に散に作る、散に從ふ。散は自由にちるをいふ。【七】潛魚　淵にひそむうを。【八】何獨驚　怪訝の辭、鳥と魚とは作者の胸中には比するものあるべし。【九】前王作二網罟一　「易」繫辭にみゆ、網は「あみ」、鳥魚並に用ふべきも魚を主としていふ。罟は「たもあみ」、魚に用ふ。【一〇】生成　魚の成育をいふ。【一一】碧藻　藻は「も」の草。【一二】干戈未揖讓　干戈を動かし武力を以て權力を爭奪するのみにて禮讓を以て賢者を擧げざるをいふ。「莊子」に、湯武之干戈、堯舜之揖讓、とみゆ、揖讓は會釋してゆづるなり。【一三】崩迫　崩裂、迫切なり、情せまりて內裂けくづるる如くなるをいふ。【一四】關其情　關の字一に開に作る、關の字まされり。其とは自己をさす。

【題義】朝早く出發せしときのことをのべた詩。前に述べし如くこのあたりの詩篇の編次みだれたれ

ばどこより出發せしやは明かならず、單に南航時の作なるを知るのみ。大曆四年の作。

【詩意】人人が歌ふも哭するもみな曉に於てである、旅をするにはきまつたみちのりがあるから早くでかける。孤舟での境遇はけふもまたきのふに似て、見るもの聞くものあひもかはらぬ歌哭の聲をきくのである。』飛ぶ鳥は自由に散らばつて食を求めてゐるが、淵にひそんでゐる魚だけはなんで網罟に驚かされるのであるか。古代の王者が網罟を作つたのは法を設けて物の生長育成をさまたげた樣なものだ。碧の藻の草は茂らぬでもないが、魚はそこにおちついてはをられぬ。それでその魚の樣にじぶんらは帆を高くかかげて日いつぱい征行をつづけるのである。世のなかには干戈があるばかりで揖讓といふことがない、之をおもふとそのことが情にかかつてむねがせまり裂け崩れる樣である。』

過津口

南岳自茲近。湘流東逝深。
和風引桂楫。春日漲雲岑。
回道過津口。而多楓樹林。
白魚困密網。黃鳥喧嘉音。
物微限通塞。惻隱仁者心。
瓮餘不盡酒。膝有無聲琴。
聖賢兩寂寞。眇眇獨開襟。

津口に過ぎる

南岳茲より近し、湘流東逝深し。
和風桂楫を引く、春日雲岑に漲る。
回道津口に過ぎる、而ち楓樹林多し。
白魚密網に困しむ、黃鳥嘉音喧し。
物微なるも通塞に限らる、惻隱なり仁者の心。
瓮には不盡の酒を餘す、膝には無聲の琴有り。
聖賢兩に寂寞たり、眇眇獨り襟を開く。

【字解】〔一〕津口　本篇の起句によれば津口は衡山の附近にあり、因つて長沙より衡州に向つて南航中の作なるを知るべし。〔二〕南岳　衡山なり、衡州衡山縣にあり。〔三〕湘流　湘水の流れ。〔四〕和風　春のなごやかな風。〔五〕桂楫　「かつら」の木で作つたかぢ、詩經・離騷などにみゆ。自己の舟のかぢをいふ。〔六〕春日　春の日光。〔七〕漲雲岑　漲るとは浮動しをるをいふ、雲岑は雲のゐるみね。〔八〕回道　まはりみちする、之によれば津口は本流にての當然の通路より横にある處とみゆ。〔九〕而多　而は則の如し。〔一〇〕白魚・黃鳥　「早行」詩の飛鳥・潛魚の類。〔一一〕密網　目をこまかにあんだ網。〔一二〕黃鳥　うぐひすの類。〔一三〕嘉音　よき鳴きれ。〔一四〕物微　魚と鳥をいふ。〔一五〕限通塞　通塞は運命の通ずるとふさがると、通は黃鳥をいひ、塞は白魚をいふ。〔一六〕惻隱　あはれみいたむ。〔一七〕瓮餘不盡酒・膝有無聲琴　瓮はもたひ、かめ。陸機が詩に、瓮餘二殘酒一、膝有二横琴一、とあり、無聲琴は暗に陶淵明の無絃琴のことを用ふ。〔一八〕眇眇　はるかなる貌。〔一九〕獨開襟　獨は自己一人をいふ、開襟は胸中を豁大にする、心をくつろげること、琴酒によりて之をなす。

【題義】津口といふところによりみちしたことをのぶ。大曆四年春、長沙より衡州へ南航する時の作。

【詩意】南岳（衡山）もここからは近い、湘江の水は深くて東に流れてゐる。なごやかな風は桂の楫を引きつけてくれる、春の日光が雲のゐるみねにわきたつ樣に動いてゐる。』自分はまはりみちをしてこの津口をとほるのだが、きてみると楓樹の林が多い。白魚は目のこんだ網にくるしんでゐるが、

黄鳥はいいねいろをしてやかましく鳴いてゐる。こんな微物でさへその運命には窮通がある、仁者は之を見ては惻隱の心にたへられぬ。』　じぶんはいま瓮には盡きぬ酒がのこつてゐるし、膝には聲をださぬ琴がおいてある。聖人も賢人もともに死滅してさびしくなつてゐる、がじぶんひとりは思ひを遠くに馳せてこの琴酒のおかげで胸をくつろげてゐる。』

次空靈岸

空靈岸に次る

沄沄逆素浪。落落展清眺。
幸有舟楫遲。得盡所歷妙。』

沄沄素浪に逆り、落落清眺を展ぶ。
幸に舟楫の遲き有り、歷る所の妙を盡くすことを得。』

空靈霞石峻。楓栝隱奔峭。
青春猶無私。白日已〔亦〕偏〔徧〕照。

空靈は霞石峻し、楓栝奔峭を隱す。
青春猶ほ私無し、白日已〔亦た〕偏〔徧く〕照らす。

可使營吾居。終焉託長嘯。
毒瘴未足憂。兵戈滿邊徼。』

吾が居を營ましむ可くんば、終焉託して長嘯せむ。
毒瘴未だ憂ふるに足らず、兵戈邊徼に滿つ。』

嚮者留遺恨。恥爲達人誚。
迴帆覬賞延。佳處領其要。』

嚮者遺恨を留む、恥づらくは達人に誚らるるを爲す。
帆を迴らして覬はくは賞を延べ、佳處其の要を領せむ。』

【字解】【一】次　やどる。【二】空靈岸　蔡夢弼、靈を船の誤とす。清一統志にいふ、空靈灘は湘潭縣北六十里にあり、一名は空冷峽、一名は空靈岸、水經注に、湘水又北逕建寧縣、縣北有空冷峽、驚浪奔雷、濬同三峽、とあり、其地は三門灘・晩洲の下、鑿石浦の上にあり、と。【三】沄沄　波紋の狀。【四】逆素浪　白浪にさかのぼる。【五】落落　曠遠の意。【六】展清眺　清らかながめをのべる。【七】所歷　經過するばしよ。【八】霞石峻　霞の如くうつくしき石けはし、湘中記の赤崖若朝霞の意。【九】楓栝　栝はひのきの類、松身柏葉の樹なり。【一〇】奔峭　形勢奔るに似たるけはしき崖壁。【一一】青春猶無私・白日已〔亦〕偏〔徧〕照　已の字一に亦に作る、亦に從ふ。偏の字諸家そのままにとく、偏照は一方をかたよりて照らすなり、恐らくは通ぜず。黄生が注に、峭壁隱天、故有「白日偏照」之語、といへる蓋し附會說なり。徧照といはざれば義をなさず、徧照はあまねく照らすなり。【一二】營吾居　この風景のよきところに居宅をいとなむ。【一三】終焉　つひに。【一四】託長嘯　身をそこに託して長くうそぶく。【一五】毒瘴　南方の害毒ある惡氣。【一六】兵戈滿邊徼　邊徼は邊境の地、浦氏は幽薊河隍の如き西北地をさすとし、仇氏は湖南の地をさすとす、此の句は陪客に用ひし句にして南北をみな指して可なり。又此の句は兵戈の滿つるも亦た憂ふるに足らずといふ意をふくめしなり。【一七】留遺恨　仇氏は遺恨とは遊踪未だ到らざるをいふとし、楊氏は未だ山水の勝を盡さざるを恨むとせり。余案するに次句の達人に誚らるる如き態度なりしことをさして遺恨といひしなるべし。達人に誚らるるとはあまりに憂國慨世の一點張りにてありし態度をいふ。【一八】爲達人誚　爲達人所誚の意、達人は悟つた人、誚は「そしる」。【一九】迴帆　帆をひきめぐらす、あともどりする。【二〇】覬　覬は冀、こひねがふ、賞延は延賞を倒用す、風景を賞することを時間的にひきのばす、潘尼が詩に、迴帆轉高岸、歷日得延賞、とみゆ。【二一】佳處　風景のよきところ。【二二】領其要　領は領會、わがものにし會得する、其とは佳處をさす、要はかなめのところ。

【題義】空靈岸にやどつたときのことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州に向ふ南航時の作。

【詩意】自分は沄沄と波紋をたてた白浪をさかのぼつて、あちらこちらと氣樂に清らかながめをのべてゆく。幸に舟楫の進行がおそいために、經過するばしよの景色の妙を十分にみきはめることがで

きる。』　空靈岸は霞紋の巖石がけはしく、楓や栝が生ひしげつて奔るが如き峭壁をかくしてゐる。非情の青春でさへ萬物に對しては私心を挾まぬし、まかがやく太陽も亦たどこをもあまねく照らすものである。もし今見るやうな場所にじぶんの居宅を營ませてくれることができれば、じぶんはつひにはここに身を託して長嘯したいとおもふ。南方には毒氣があるといふともしんぱいするに足らぬし、兵戈は邊境に滿ちてゐるが、これもしんぱいすることはない。』　まへかた自分が遺恨をのこしてをることは、自分が慷慨すぎて恥かしながら達觀した人からわるくいはれる樣なことをしてゐたことだ。いまはどうか帆をひきめぐらしてあともどりしてなるたけながくこの風景を賞で、景色の佳良な場處の要なところを我がものとしのみこみたいものである。』

宿花石戍

午辭空靈岑。夕得花石戍。
岸疏開闢水。木雜古今樹。
地蒸南風盛。春熱西日暮。
四序本平分。氣候何迴互。

花石戍に宿す

午空靈の岑を辭し、夕に花石戍を得たり。
岸には疏す開闢の水、木は雜ふ古今の樹。
地蒸して南風盛なり、春熱して西日暮る。
四序本平分す、氣候何ぞ迴互するや。

茫茫天造間。理亂豈恒數。
繫舟盤藤輪。杖策古樵路。
罷人不在邨。野圃泉自注。
柴扉雖蕪沒。農器尙牢固。
山東殘逆氣。吳楚守王度。
誰能叩君門。下令減征賦。

茫茫たる天造の間、理亂豈に恒數あらむや。
舟を繫ぐ盤藤の輪、策を杖く古樵路。
罷人邨に在らず、野圃泉自ら注ぐ。
柴扉蕪沒すと雖も、農器尙ほ牢固なり。
山東逆氣殘る、吳楚王度を守る。
誰か能く君門を叩きて、令を下して征賦を減ぜしめむ。

【字解】【一】花石戍　詩の本文によれば、この戍は空靈岸より半日航程にあり、淸一統志に湘潭縣西にありといへり。【二】岸疏　疏は通なり。【三】四序　四季の順序。【四】平分　氣候四時等分にあり。【五】迴互　ちぐはぐになる。【六】天造　天地の物を造ること、「易」屯卦にみゆ。造化自然をいふ。【七】理亂　治亂。【八】恒數　常理常道。【九】盤藤輪　仇氏曰く、舟纜盤レ岸、圓若レ藤輪一なりと、これ盤レ藤輪一と訓ますなり。浦氏曰く、輪は水を轉ずる農器なり、久しく廢せられて藤其の上に盤る、と。これはとあるは鄙意と合す。【一〇】罷人　疲民。【一一】野圃　野らのはたけ。【一二】牢固　かたし、ぢやうぶ。【一三】山東　河北諸地方をいふ。【一四】逆氣　叛逆の氣。【一五】吳楚　楚地をいふ。【一六】守王度　王者の法度を守る、納稅を怠らざるをいふ。

【題義】花石戍にとまつたことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州へ南航時の作。

【詩意】ひる空靈岸を辭し去つて、夕がた花石戍を得た。岸には開闢以來の水が通じてながれてゐる、

木は古今の樹がまざつてゐる。地が蒸して南風がさかんであり、春があつくて西日がくれかかつた。四季はそれぞれのもちまへの氣候を四等分してもつてゐるはずなのだが、なんでいまは氣候がちぐはぐになるか。氣候さへそんなでは茫茫たる大自然のあひだに於て治亂にどうしてきまりがあらうか。』じぶんは舟を車輪狀の藤の樹につないで、ふるいきこり路につゐをついてあるく、すると疲れた人民はみな逃げて村にはゐない、はたけには泉がひとりでに注いでゐる。柴の扉は草むらに沒してはゐるが農具はしつかりしたものがある。山東地方には叛逆の氣がのこつてゐるが、この吳楚の地方はおかみの法度を守つてゐる。たれか天子の宮門を叩いて命令をくだして勞役や稅金をへらす樣にしてくれる人はゐないものであらうか。氣のどくな人人である。』

早發

有求常百慮。斯文亦吾病。
以茲朋故多。窮老驅馳併。
早行篙師怠。席掛風不正。
昔人戒垂堂。今則奚奔命。

早發

求むる有りて常に百慮す、斯文亦た吾が病なり。
茲の朋故の多きを以てして、窮老驅馳と併はす。
早行すれば篙師怠る、席掛かるも風正しからず。
昔人は垂堂を戒む、今は則ち奚ぞ奔命するや。』

濤翻黑蛟躍。日出黃霧映。
煩促瘴豈侵。頹倚睡未醒。
僕夫問盥櫛。暮顏覘青鏡。
隨意簪葛巾。仰慙林花盛。
側聞夜來寇。幸喜囊中淨。
艱危作遠客。干請傷直性。
薇蕨餓首陽。粟馬資歷聘。
賤子欲適從。疑悞此二柄。』

濤翻へりて黑蛟躍る、日出でて黃霧映ず。
煩促瘴豈に侵さざらむや、頹倚睡りて未だ醒めず。
僕夫盥櫛を問ふ、暮顏青鏡に覘たり。
隨意葛巾に簪す、仰ぎて慙づ林花の盛なるに。』
側に聞く夜來寇ありと、幸に喜ぶ囊中の淨なるを。
艱危遠客と作る、干請直性を傷ふ。
薇蕨首陽に餓ゑ、粟馬歷聘に資す。
賤子適從せむと欲す、疑悞す此の二柄。』

【字解】【一】早發　朝早く出發す。これも「早行」とおなじく編次紊亂のためにどこからどこへ出發せしものか確定する能はず。【二】有求　求は衣食の計を求むるをいふ。【三】斯文亦吾病　不備の句。作者の斯文崔魏徒、斯文憂患餘、斯文亦吾病、並に異例の句法なり。此の句は文學の士たる吾の病とする所、などの意ならん。亦の字は斯文にかからず、上句にかかる。病は缺點。【四】朋故　朋友故舊。【五】窮老驅馳併　窮老と驅馳とを合併するをいふ。【六】篙師　さをかた。【七】席掛　席の帆をほばしらにかける。【八】風不正　風には正不正なし、席帆のかけかたがゆがみて正當に風をうける樣になり居らざるゆゑ、風が帆に對して正しく吹かざるなり。即ち篙師の怠る結果。【九】垂堂　古語に千金の子は坐するに堂に垂せずといふ。垂とは堂のはしにすわるをいふ、はしにすわれば墜つるおそれあり。【一〇】奚奔命　奚は何、奔命は人の命令に奔走するなり、「左傳」にみ

ゆ。ここは單に奔走をいふ。【一】 煩促瘴豈侵　不備の句。煩促は心のうるさきこと。瘴豈侵は趙注に「豈に侵さんとするか」の意とし、蔡注に「豈に侵さざらんや」の意とす、豈を豈不とする作者此の種の無理なる句法を時時用ふれば原意を得しかとおもふ、蔡注に從ふ。【二】 頹倚　からだをぐたりとさせなにかによりかかる。【三】 僕夫　しもべ。【四】 問盥櫛　たらひ・くしに就いて問ふ。顏を洗はぬかとたづねるをいふ。【五】 暮顏　晩年のかほ。【六】 覷青鏡　覷は慙づる貌、青鏡は青銅鏡。【七】 寇　竊盜をいふ。【八】 淨　きよし、無一物なること。【九】 干請　土地の有力者に面會し何かを求めまたはたのむ。【一〇】 直性　剛直の性質。【一一】 首陽　山の名、伯夷・叔齊がこと。【一二】 粟馬資歷聘　蘇秦張儀、六國を歷聘す、諸侯皆粟馬を以て之を迎ふ。粟馬は米と馬、資はもとでとさせること、歷聘は國國を聘せられてわたること、聘とは進物をもつて迎へること。【一三】 賤子　いやしきもの、自己をさす。【一四】 適從　一方を主として之に從ふ。【一五】 疑悞　疑とはどちらがよいかとうたがふ。悞は誤なり、判斷をあやまられんとすること。【一六】 二柄　二個の根本事、采薇と歷聘との二つをいふ。

【題義】 あさ早く出發せしことをのぶ。大曆四年春、長沙より南航時の作。

【詩意】 何物かを求むることがあつていつもさまざまのしんぱいをするといふことは、これも我我文學の士に於ての缺點である。自分は朋友故舊をたくさんもつてゐながら、困窮老衰のうへにまた諸處をかけめぐつてゐる。あさ早くでかけると船の篙師はなまけて、席の帆を掛けても掛け方がよいかげんで風がまともに吹きあたらぬ。昔の人は堂のはしにすわるさへ戒めたのに、いま自分はどうしてかくあちらこちらと奔走してあるくのであらうか。』 濤はひるがへつて黑い蛟が躍り、太陽が出て黃色の霧がうつろうてゐる。心はくさくさして臥してゐては瘴氣が侵さぬこともあるまいが、ぐたりともたれかかつて睡つて目をさまさぬ。僕夫は顏を洗つたかとたづねるから顏を洗ふものの、老顏を青銅鏡に照らしてみるのはあつかましいことだ。きままに葛の頭巾に簪をさすが、林花がさかんに咲いてゐるのを仰ぎみてはづかしくおもふ。』 ほのかにきくに昨夜からかけて泥棒がきたとのことだが、幸とじぶんは囊中さつぱりと無一物だ。艱危の時節に遠方の客となつてゐるが他人にたのみごとをするのは剛直の本性をそこなふものである。伯夷・叔齊は首陽山にわらびぜんまいを采つて餓死した。蘇秦・張儀は粟馬をもとでとして六國を歷聘してあるいた。じぶんはこの二つの根本事件について疑ひまどはされてゐるのである、その二つのどちらに主として從うたものであらうか。』

次晩洲

晩洲に次る

參錯雲石稠。坡陀風濤壯。
晩洲適知名。秀色固異狀。
棹經垂猿把。身在度鳥上。
擺浪散帙妨。危沙折花當。
羇離暫愉悅。羸老反惆悵。
中原未解兵。吾得終疎放。

【字解】〔一〕晩洲　清一統志にいふ、晩洲は湘潭縣南一百十里、石洲の北にあり、と。亦た本篇の長沙より衡州へゆく時の作なるを知るべし。〔二〕參錯　いりまじる。〔三〕雲石稠　雲石とは雲の色と、霞紋狀の石とをいふ、石は「空靈岸」詩の霞石峻の霞石とおなじ。稠は多きなり。〔四〕坡陀　たかき貌。〔五〕異狀　其の狀一ならざるをいふ。〔六〕棹經垂猿把　水まして船位の高きをいふ、垂猿は樹枝より垂れさがる猿、把は臂をとること、手つなぎをいふ。〔七〕度鳥　空をわたるとり。〔八〕擺浪　擺は排列、擺浪はならんでくる浪。〔九〕散帙妨　散帙は書帙を散亂してあさりよむなり、浪あれば船動搖して讀書をさまたぐ。〔一〇〕危沙折花當　當を「そこ」とし、花當は花根なりといふは師民瞻の說なり。當を便當の義とし花を折るに便なりとするは「杜臆」の說なり。「批解」に、陳舜俞が說を引きて、危沙記レ險、無二他標識一、故插レ花以當レ之、といへり。いづれも首肯しがたし。余は當は當値の義、危沙折花當とは、折レ花危沙ニ當タル（危沙と相値るゝ）の意かと考ふ。〔一一〕羈離　たび。〔一二〕愉悅　旅中の閒事をよろこぶ。〔一三〕吾得　得は豈得の意。〔一四〕疎放　やりばなし。閒散きままにする。

【題義】晩洲にやどつたときのことをのぶ。大曆四年春、長沙より衡州へ南航する時の作。

【詩意】雲やうつくしい石が多くてそのいろがいりまじり、をかつづきの樣に高く壯な風濤がおこつてゐる。晩洲といふ名をちやうどいま知つたが、なるほどその秀色はさまざまである。船路が高まつてをるので棹は猿がつなぎ手をして垂れさがつてゐるあたりをとほり、自分のからだは空をわたる鳥よりもうへにある。おしならんだ浪がやつてくるので書帙をひろげちらすことは妨げられる。岸傍の花を折らうとするとちやうどくづれかからうとしてゐる沙のところにぶつつかつたりする。』この樣なことにあうて旅中ながらしばし心をたのしませるが、つかれて老いた我が身は一方ではうらめしさにたへぬ。なぜかといふに中原にはまだ兵を解きすてず、亂がつづいてゐる、だから自分は果してつひにきままでゐられるかどうかわからぬ。』

清明二首

朝來新火起新煙。
湖色春光淨客船。
繡羽銜花他自得。
紅顏騎竹我無緣。
胡童結束還難有。
楚女腰肢亦可憐。
不見定王城舊處。
長懷賈傅井依然。
虛霑周舉爲寒食。
實藉君平賣卜錢。

【字解】〔一〕清明　冬至の後百五・六・七の三日を寒食節とし火食を禁ず。其の節明くれば清明節なり。凡そ陽曆の四月中旬にあたる。〔二〕新火　火を禁じ、禁あけてはじめてもやす火なるにより新火といふ、唐にては清明に百官に新火を賜ふ制なり。〔三〕湖色　湘水、洞庭湖につらなるにより湖色といふ。〔四〕繡羽銜花　うつくしき羽の鳥が花を口にくはへる。〔五〕他自得　他は「かれ」、繡羽をさす、自得は得意。〔六〕紅顏騎竹　紅の血色で竹馬にのる。こどもちのさま。〔七〕胡童結束　韈童のひきしめた身な

(一五)鐘鼎山(一六)林各天性。　鐘鼎山林各〻天性、
濁醪麤飯任吾年。　濁醪麤飯吾が年に任せむ。

地の女のほそきこしつき。【一〇】定王城　長沙の城をさす。漢の高祖の五年に吳芮を長沙王とす、芮、城を築く、景帝の二年に唐姬の子、發を長沙王に封す、發は定王なり、同じく此に都す。【一一】賈傅井　長沙王の大傅、漢の賈誼の井、清一統志に云ふ、長沙縣西北濯錦坊にありと。「荆州記」にいふ、湘州南市の東に賈誼が宅あり、宅中に井あり、小にして深し。上は斂まり下は大に、狀壺に似たり、即ち誼が穿ちし所なり。井の旁に一脚の石牀あり、纔に一人の坐を容る、形制甚だ古なり、と。【一二】虛霤　恩惠に浴せざるをいふ、御馳走なければなり。【一三】周舉　後漢の周舉が傳に、舉、并州刺史となり、冬、寒食を爲すことの非をいひて火禁を解きしことを載す。當時は冬、寒食をなせしなり。今は春寒食をなすものなれども舉が事を用ひたり。【一四】君平賣卜錢　巳にみゆ。ここは單に百錢を得ることをおもふ意を寓したり。【一五】鐘鼎　鐘を鳴らして食し、鼎を列ねて烹るは富貴人の事なり。【一六】山林　山林にすむは隱遁者の事なり。

【題義】清明節にあひしことをのぶ。大曆四年清明節、潭州（今の長沙）にての作。

【詩意】けさから新しい火がたかれて新しい煙がおこり、じぶんの旅中の船に春の光も湖水の色もきよらかにみえる。うつくしい羽の鳥が花をくはへてゐるのは得意げである。紅顏で竹馬にのるなどはいまは因緣がない。胡童の裝束もめづらしく、楚女の細腰もかはいらしい。定王の城の舊蹟は見られぬが、賈誼の宅の井のもとのままにあるのはなつかしい。周舉が火禁を解いてくれたはよいが御馳走なしのじぶんはむなしくその恩惠にうるほふものだ。嚴君平の樣に賣卜をしてまうけた百錢のおかげにあやかりたいとおもふ。人は鐘鼎の富貴に趨くものと山林に隱居するものとそれぞれその人の天性しだいだが、じぶんはにごりざけに粗末なごはんをたべて、年月のすぎゆくままにまかせよう。』

〔一〕

此身飄泊苦西東。
右臂偏枯半耳聾。
寂寂繫舟雙下淚。
悠悠伏枕左書空。
(五)十年蹴踘(七)將雛遠。
萬里鞦韆(九)習俗同。
旅雁上雲歸紫塞。(一〇)
家人鑽火用青楓。(一一)
秦城樓閣煙花裏。
漢主山河錦繡中。(一二)

此の身飄泊西東に苦しむ、
右臂は偏枯半耳は聾す。
寂寂舟を繫ぎて淚を雙び下し、
悠悠枕に伏し左に空に書す。
十年蹴踘將雛を將ゐる遠く、
萬里鞦韆習俗同じ。
旅雁雲に上りて紫塞に歸る、
家人火を鑽るに青楓を用ふ。
秦城の樓閣煙花の裏、
漢主の山河錦繡の中。

【字解】【一】偏枯　かた方がきかなくなる。【二】半耳聾　左耳の聾せしこと「復陰」詩にみえたり。【三】雙下　左右の兩眼よりくだす。【四】左書空　晉の殷浩が故事、已にみゆ。左手にて空中に咄咄怪事の四字を書せしこと。【五】十年　作者入蜀後本年までにて十二年なり、前に一紀ともいへり、今成數を以て十年といへり。【六】蹴踘　女兒の春の手あそびなり、宗懍が歲時記に寒食には打毬、鞦韆、施鉤等の戲ありといへり、打毬は即ち蹴鞠なり。【七】將雛　ひなをひきゐる、古樂府に鳳將雛曲あり、こども等をひきつ

春水春來洞庭闊。　春水に春來りて洞庭闊し、
白蘋愁殺白頭翁。　白蘋愁殺す白頭翁。

塞　長城をいふ、秦、長城を築くにその土皆紫色なり、よりて紫塞といふ。【一一】鑽火用青楓　鑽火は木の棒を板の孔にきりもみして火を出すなり、其の木は北方ならば春は楡・柳を用ふ、今南方は青葉の楓を用ふるなり。【一二】秦城　長安の城をいふ。【一三】漢主　唐の天子をいふ。【一四】白蘋　白きよもぎ、水草なり、大萍ともいふ、五月に白色の花を開く、清明には未だひらかず、ここはただ南方有名の花を用ひしのみ、蓋し梁の柳惲の汀州采白蘋一目落江南春、などを連想せしなるべし。【一五】白頭翁　自己をいふ。

【詩意】我が身は或は西、或は東と飄泊してゐるがこまつたものだ、右の臂はかたはうきかなくなり片方の耳（左耳）はつんぼになつてゐる。さびしく舟をつなぎとめては兩眼から涙をながし、いつまでも病の枕に伏しては世をなげくあまり左の手で空中に文字をかく（殷浩の如く）。鞠を蹴つてあそぶこども等を遠くひきゐあるくことは十年ばかりになる。萬里のそらでもこの日鞦韆をすることはみやことおなじことである。旅する雁は雲のうへへあがつて長城の方へかへる。家のものは火をきりかへるにはこれまでとかはつて青楓を用ひるのである。（おもふにいまごろは）長安の城の樓閣は煙花のうちにあるであらう。吾が君の御統治あそばさるる山河は錦繡のうつくしさのうちにあるであらう。こちらでは洞庭湖のひろい湖面の春の水に春がおとづれて、白蘋の草がこの白頭の老人を甚だしく愁へさせるのである。

【一六】鞦韆　ぶらんこ。【一七】習俗同　ならはしおなじ、同とは長安に同じきをいふ。【一〇】紫

發潭州

夜醉長沙酒。曉行湘水春。
岸花飛送客。檣燕語留人。
賈傅才未有。褚公書絕倫。
名高前後事。回首一傷神。

潭州を發す

夜醉ふ長沙の酒、曉に行く湘水の春。
岸花飛びて客を送る、檣燕語りて人を留む。
賈傅才未だ有らず、褚公書絕倫なり。
名は高し前後の事、首を回らして一に神を傷ましむ。

【字解】【一】潭州　唐時の潭州は今の長沙府なり。【二】湘水　湘江なり、長沙府城の西にあり、北流す。【三】賈傅　長沙王の太傅、漢の賈誼。【四】未有　古來未だ有らず。【五】褚公　褚遂良なり、遂良隸楷に工なり、太宗侍書たらしむ、高宗の時右僕射となる、武昭儀を立てて后となすことを諫め潭州都督に左遷せらる。【六】前後事　賈誼は漢代にて前にあり、褚遂良は唐代にて後にあり。

【題義】潭州（長沙）から出發したことをよんだ詩。大曆四年春、長沙より衡州へ南航するときの作。

【詩意】夜、長沙の酒に醉ひ、曉には湘水の春に行く。岸の花は飛びながらたびするもの（自己）を送つてくれる、檣にとまつてゐる燕はさへづりながら人（自己）をひきとめようとしてゐる樣だ。（この土地に關係ある人についておもひだすと）賈誼の才は古來まだ無いほどの人物であり、褚遂良の書はたぐひまれなるものである。事がらに前後の差はあるがどちらも名高い人である。じぶんは首を古昔にふりむけて二人のことをおもひひとへにこころをいたましむるのである。

發白馬潭

水生春纜沒。日出野船開。
宿鳥行猶去。叢花笑不來。
人人傷白首。處處接金盃。
莫道新知要。南征且未迴。

白馬潭を發す

水生じて春纜沒す、日出でて野船開く。
宿鳥行けば猶ほ去る、叢花笑へども來らず。
人人白首を傷む、處處金盃に接す。
道ふ莫かれ新知要ありと、南征且く未だ迴らず。

【字解】〔一〕白馬潭　趙注に白馬潭は潭州にありとす。顧注に岳州にある白馬湖を以て之に充てたり。白馬湖ならば岳州府臨湘縣にありて、岳陽樓よりも以前に經過すべき地なり。岳陽樓をすぎし時は暮冬なるに本篇には春纜・叢花の語あり。顧注恐らくは是に非す、舊により潭州に屬する地とみるべきなり。〔二〕宿鳥行猶去・叢花笑不來　諸說あり、今我がよしとする所をのぶ。行の字、笑の字は作者に屬せしめてみるべし。行は我が舟行するなり、笑は我が獨笑するなり。舟行するによりて岸上の宿鳥止まれども猶ほ去るがごとし。流れに泝るものなるが故に前面の叢花容易に來ることおそきによりて我獨り之を笑ふ。〔三〕人人　他の人人。〔四〕傷白首　我が白首をあはれみいたむ。〔五〕接金盃　宴に逢ふをいふ。〔六〕新知要　要とは必要、新しき相知の人を得る必要。

【題義】白馬潭を出發せしときの詩。大曆四年春、長沙より衡州に向つて南航する時の作。

【詩意】春の出水で纜が底に沒してゐる、日がでるころにやつと出帆した。舟がうつりゆくと宿してゐる鳥も飛び去るがごとくみえ、のぼりで船脚がおそいから前方に見えた花の叢も容易にてまへに來ぬのでをかしくなる。じぶんのであふ人人はみなじぶんの白首になつたことをきのどくがつてくれ、到る處でうつくしい酒杯をうけとる。しかし新しい知りあひがいるなどとはいふな、じぶんは南方へでかけてまあここしばらくはかへらぬのである。

野望

納納乾坤大。行行郡國遙。
雲山兼五嶺。風壤帶三苗。
野樹侵江闊。春蒲長雪消。
扁舟空老去。無補聖明朝。

野望

納納乾坤大なり、行行郡國遙なり。
雲山五嶺を兼ぬ、風壤三苗を帶ぶ。
野樹江の闊なるを侵し、春蒲雪の消せるに長ず。
扁舟空しく老い去る、聖明の朝に補ひ無し。

【字解】〔一〕納納　包容する貌、裴遜之が詩に、納納江海深、とあり。〔二〕五嶺　衡山の南より東は海に至る一線以南に於ける主なる嶺をいふ、廣州記に、大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽を五嶺とし、南康記に大庾嶺、桂陽の甲騎嶺、九眞の都龐嶺、臨賀の萌渚嶺、始安の越城嶺を五嶺とす。〔三〕風壤　風土。〔四〕三苗　潭州は古の三苗國の南境とせらる。「尙書」舜典の三苗の注に、三苗の國は洞庭を左にし、彭蠡を右にすといへり。潭州一帶の地はその國にあたる。

【題義】原野にてひろくながめしときのことをのぶ。大曆四年春、潭州より南航中の作。

【詩意】天地はひろく物をいれて廣大である。じぶんは一歩一歩はるかなる郡國にむかうてゆく。雲のゐる山は五嶺の山脈を兼ね、風土は古代の三苗のそれを帶びてゐる。原野の樹は闊遠なる江面まで

おしすすんでゐるかのごとく、春さきの蒲は雪の消えたあとでたけがのびてゐる。じぶんは扁舟につてゐるうちにいたづらに年老いてしまひ、聖明の天子のみよになにら裨補したてまつるところがないのははづかしいことだ。

入喬口(一)

【原注】長沙北界。

喬口に入る　【原注】長沙の北界なり。

漠漠舊京遠。遲遲歸路賒(二)。
殘年傍水國(三)。落日對春華。
樹蜜早蜂亂。江泥輕燕斜。
賈生骨已朽。悽惻近長沙。

【字解】【一】喬口　原注に長沙の北界とあり。清一統志にいふ、喬口鎮は長沙縣西北六十里にあり、と。本篇は次篇「銅官渚守風」詩とおなじく長沙未着以前の作なり。編次誤れるなり。【二】賒　遠なり。【三】水國　湖國をいふ。【四】賈生　賈誼。

【題義】喬口といふ地にはひり來りしときの詩。大曆四年春、岳陽より潭州へ航行中の作。

【詩意】漠漠として長安の都は遠く、途中にぐづぐづして故郷への歸路ははるかである。老いさき短い年にあたつて湖水の國にそうてあるき、日の落ちかかるをりに春のはなやかなありさまにうちむかふ。樹木の蜜のあるところには早めの蜂がみだれ、江邊の泥には身がるげな燕が斜にとんでゐる。賈誼の骨はもはや朽ちた、（また誼の如き人物を現代にみることはできぬ）、誼のながされてゐた長沙が近くなつたにつけてじぶんの心はものがなしくてならぬ。

銅官渚守風(一)

夜ならずして楚帆落つ、風を避く湘渚の間。

不夜楚帆落。避風湘渚間。
水耕先浸草。春火更燒山。
早泊雲物晦。逆行波浪慳。
飛來雙白鶴。過去杳難攀。

【字解】【一】銅官渚　長沙府城北六十里にあり、喬口と相距る遠からざるなり。清一統志にいふ、銅官渚は長沙縣西北の銅官山下にあり、一に銅官浦に作る、もと傳ふ、楚、鑄を鑄し處なりと。【二】守風　風の止むをじつとして待つなり。【三】楚帆落　落帆は帆をおろすこと、楚帆は楚地をゆく帆。【四】湘渚　湘水のなぎさ。【五】水耕　水田を耕す。【六】浸草　草をとり水にひたして稻のこやしとするなり。【七】燒山　舊俗に山を燒き、燒草を作ることとす。燒草は燒きし草を（恐らくは草根の土に生えたままに）稻の根にかひ、肥料とするなりと、余案ずるにこれは水耕に對して陸上山田の火耕をいふものならん。【八】晦　くらし。【九】波浪慳　波浪

慳は「をしむ」、浪が舟行を妨ぐるは舟行ぜしむることををしみてせしめざるに似たり。〔一〇〕白鶴　つるを言ふは自己風に阻せらるるによりて其の飛ぶを羨むなり。

【題義】銅官渚にて風止みを待ちしをりの詩。岳陽より潭州へ南航中の作。

【詩意】夜にならぬのに帆をおろして湘水のなぎさに風を避ける。水耕してゐるものは先づ草を水にひたして肥とせんとし、山田では更に山を燒きたてて田つくりの用意をしてゐる。早くとまつたのに氣象のありさまはくらく、水流をさかのぼるにあたつて波浪はこちらの進行するのををしんでゐるげである。そこへ一對の白い鶴が飛んで來て、またとほりすぎてたち去つてしまひ、はるかにして攀づることもならぬ。風止みを待つのはまことに待ちどほしいことである。

北風

【原注】〔一〕新康江口。信宿方行。

北風　【原注】新康の江口に、信宿して方めて行く。

春生南國瘴。氣待北風蘇。　春には生ず南國の瘴、氣は北風を待ちて蘇る。

向晚霾殘日。初宵鼓大鑪。　晚に向ひて殘日に霾る、初宵大鑪を鼓す。

爽攜卑濕地。聲拔洞庭湖。　爽をば攜ふ卑濕の地、聲は拔く洞庭湖。

萬里魚龍伏。三更鳥獸呼。〔六〕　萬里魚龍伏す、三更鳥獸呼ぶ。

滌除貪〔九〕破浪。愁〔一〇〕絕付摧枯。　滌除破浪を貪る、愁絕摧枯に付す。

執〔一一〕熱沈沈〔一二〕在。淩〔一三〕寒往往須〔一四〕。　執熱沈沈として在り、淩寒往往須つ。

且知寬〔一五〕疾肺。不敢恨危途。　且つ知る疾肺寬なるを、敢て危途を恨まず。

再〔一六〕宿煩〔一七〕舟子。衰〔一八〕容問僕夫。』　再宿舟子を煩はす、衰容僕夫に問ふ。』

今晨非盛〔一九〕怒。便道卻〔卽〕長驅。　今晨盛怒に非ず、便道卻〔卽ち〕長驅す。

隱〔二〇〕几看帆〔二一〕席。雲〔二二〕山湧〔二三〕坐隅。』　几に隱りて帆席を看れば、雲山坐隅に湧く。』

【字解】〔一〕新康江　新康は縣の名、晉の大康元年、益陽縣を改めて新康といふ、隋唐には新康を併せて益陽に入る、宋には寧鄉縣を置く、清朝も之による。新康江とは今の瀉江なり。清一統志にいふ、瀉江は寧鄉縣西一百五十里にあり、源は大瀉山に出づ、東北流して長沙縣界に入る、新康江と名づく、と。地里を案ずるに喬口より更に南に於て湘江にそそぐ。故に本篇は經過の順よりすれば「入喬口」詩の後、「銅官渚守風」詩の前にあるべく、長沙未着以前の詩なり。〔二〕鼓大鑪　鼓はうごかす、大鑪は大なる火鑪なり、「莊子」に、以天地爲大鑪の語あり。句の意或は熱蒸をいふとし、或は風を生ずるをいふとす。今後說による。〔三〕爽攜　風が爽をたづさへ來るなり。〔四〕卑濕地　湖南長沙の地方はひくくしめりけ多き地なり、語は賈誼傳にみゆ。〔五〕聲拔　拔とは猶ほ奪ふといふが如し、湖水の聲を奪ひ壓倒す。〔六〕魚龍伏　風を恐るるなり。〔七〕鳥獸呼　風に驚くなり。〔八〕滌除　瘴氣をそそぎのぞく。〔九〕貪破浪　舟行を貪るなり。「南史」に、宗慤が曰く、願乘長風、破萬里浪、と。〔一〇〕愁絕付摧枯　愁絕は甚だしく愁ふるなり、付は「まかす」の意、摧枯は枯木をくだくなり。此の句、强風枯木をくだくをいふのみにては愁絕といふほどのことに非ず、摧

枯は蓋し自己の枯木のごとくくだき倒さるるをいふならん。【一一】執熱　あつきこと、作者の慣用語、語は「詩」桑柔にみゆ。【一二】沈沈　ふかき貌。【一三】淺塞　寒さををかすをいふ。【一四】須　必要なるをいふ。【一五】寬疾肺　肺疾のかろくなること。【一六】再宿　二泊。【一七】舟子　船頭。【一八】衰容問僕夫　衰容の元氣づきしや否やを問ふ。【一九】盛怒　風のあれくるふをいふ。風賦に、盛怒於土囊之口、とあり。【二〇】隱几　脇息による。【二一】帆席　むしろでつくりし帆。【二二】雲山　雲のゐる山。【二三】湧坐隅　坐席のすみにわきたつが如し。

【題義】北風の吹きしとき舟をすすめしことをのぶ。大曆四年春、岳陽より長沙に向ひ南航中の作。

喬口と銅官渚との中間に置くべき詩篇なり。

【詩意】春にあたつて南國炎瘴の氣が生じた。じぶんの元氣は北風の吹くのを待つてはじめてよみがへる。夕ぐれになりかけていり日の前に土沙がふり、宵のくちから天地の大鑪をうごかして風がおこつてきた。この風は卑濕といはるる土地に爽かさをもちきたり、その聲は洞庭湖の水聲をも奪はんばかりである。それで萬里の水面に魚龍は潛伏してしまひ、よなかごろに鳥や獸がさけびたてた。』炎瘴の氣がのぞかれたので自分は浪を破つて航行することを貪り、しんぱいの極みではあるがこの枯木の樣なからだは摧けてもかまはぬとおもふ。あつくるしさがいつまでもふかくのこつてゐるのでは、ときどきは寒さをかすといふことも必要になる。まづまづ肺の疾がすこしでもゆるんだことがわかるので、危い途を取ることも恨みとはせぬ。二泊もして風をさけたからいざと船頭に骨折をたのみ、ふだんの老容のさまもいまはたちなほつたであらうと僕夫にたづねてみる。』けさはそんなに風があれくるうてゐるわけではないから、都合のいい道からすぐに遠くでだすことにした。脇息によりかかりながら席帆をながめてゐると、坐席のすみには前方の雲山が湧くがごとくむらがりたつさまがみえる。』

雙楓浦

輟棹青楓浦。雙楓舊已摧。
自驚衰謝力。不道棟梁材。
浪足浮紗帽。皮須截錦苔。
江邊地有主。暫借上天迴。

【字解】【一】雙楓浦　清一統志にいふ、雙楓浦は瀏陽縣南三十里瀏水の中にあり、一名は青楓浦、と。瀏陽は長沙の東にあたれる縣の名なり。【二】輟棹　さをさすことをやめる。【三】雙楓　二本の楓。【四】衰謝力　衰へ減じたる體力。【五】不道棟梁材　仇注にいふ、元來棟梁の材なりとはいはざるに、と。浦注にいふ、自己のみならずこの棟梁の材までが衰謝するとは意外なり、と。仇注に依る。【六】浪足浮紗帽・皮須截錦苔　二句舊解奇怪なる說多し。鄙說をのぶ。浪とは浦の浪なり。浮紗帽とは紗帽を直接に水上に浮ぶるをいふに非ず、紗帽を着けたる自己が舟にのりて浮ぶをいふ、紗帽は浦注にいふ、隱者の冠と。皮は楓樹の皮、截錦苔とは錦苔をけづりおとすことにて、けづりおとすはその華美を去るためならん。【七】地有主　主は主人。【八】暫借　借とはこの楓樹を借るなり。【九】上天迴　これは槎に乘じて天河に至る故事を連想していふ、楓樹を以て槎となして天に上るなり。

【題義】雙楓浦にての所感をのぶ。作者何のために瀏陽に至りしやは明かならず、其の時期も不明なり、岳陽より潭州への南航中の事には非ざらん。想像するに潭州を去りて衡州に向はんとするすこし前に事を以て瀏陽にゆきしものならんか。

【詩意】棹をやめて青楓浦で舟をとどめた。ここにある二本の楓はもとからくだかれてある。自分は本來棟梁の材だとはおもはぬが、いまさら體力が衰減したのには驚く、（ちやうどこの楓の樣だ）。この浦の浪は紗帽をつけて浮ぶに足るものがある。この楓樹の皮からは錦の苔などはきりおとさう、（さうして槎を作る）、この江のほとりに土地の主人が有るならば其の人から楓樹の槎をしばらく借りうけて天へのぼつてかへりたいとおもふ。

詠懷二首

人生貴是男。丈夫重天機。
未達善一身。得志行所爲。
嗟余竟轗軻。將老逢艱危。
胡雛逼神器。逆節同所歸。
河洛化爲血。公侯草間啼。
西京復陷沒。翠蓋蒙塵飛。
萬姓悲赤子。兩宮棄紫微。
倏忽向二紀。奸雄多是非。
本朝再樹立。未及貞觀時。
日給在軍儲。上官督有司。
高賢迫形勢。豈暇相扶持。
疲茶苟懷策。棲屑無所施。
先王實罪己。愁痛正爲茲。
歲月不我與。蹉跎病于斯。
夜看酆城氣。回首蛟龍池。
齒髮已自料。意深陳苦詞。

詠懷二首

人生は是れ男なるを貴ぶ、丈夫は天機を重んず。
未だ達せざれば一身を善くし、志を得れば爲す所を行ふ。
嗟余竟に轗軻、將に老いむとして艱危に逢ふ。
胡雛神器に逼る、逆節歸する所を同じくす。
河洛化して血と爲る、公侯草間に啼く。
西京復た陷沒す、翠蓋塵を蒙りて飛ぶ。
萬姓赤子悲しむ、兩宮紫微を棄つ。
倏忽二紀に向ふ、奸雄是非多し。
本朝再び樹立す、未だ貞觀の時に及ばず。
日給軍儲に在り、上官有司を督す。
高賢形勢に迫らる、豈に相扶持するに暇あらむや。
疲茶苟くも策を懷くも、棲屑施す所無し。
先王實に己を罪す、愁痛正に茲が爲なり。
歲月我と與ならず、蹉跎斯に病めり。
夜酆城の氣を看る、首を回らす蛟龍の池。
齒髮已に自ら料る、意深くして苦詞を陳す。

【字解】〔一〕貴是男　榮啓期曰く、男尊女卑、故以男爲貴、吾既得爲男、是れ一の樂みなり、と「列子」にみゆ。〔二〕重天

機　天機は天時の機會、「易」の知レ幾の類、卽ち下の二句の場合を知るをいふ。【三】未達善一身・得志行所爲　孟子曰く、士窮不レ失レ義、達不レ離レ道、窮則獨善二其身一、達則兼善二天下一、と。又曰く、得レ志、則澤加二于民一、と。二句之に本づく。未達とは要路に立つを得ざるなり、善一身とは自己の身のみを善く修むるなり。得志とは要路に立ち其の志す所を行ふを得るをいふ、行所爲とは爲さんと欲する所の理想を實行するをいふ。【四】軀軻　不平の貌、不遇をいふ。【五】胡雛　安祿山。【六】神器　天下をいふ、老子曰く、天下神器、と。【七】逆節　忠順に反したる行ひ。賊黨をいふ。【八】同所歸　歸趨する所同じ、同じく神器を奪はんとするをいふ。【九】河洛　黃河・洛水、洛陽方面をいふ。【一〇】化爲血　戰場となる。【一一】草間啼　奔りかくれて泣くなり。【一二】西京　長安。【一三】翠蓋　天子の車蓋。【一四】蒙塵飛　逃げ出せしをいふ。【一五】萬姓　人民。【一六】悲赤子　あかごの如く悲しむ。【一七】兩宮　玄宗・肅宗。【一八】棄紫微　皇宮をすてて他方に出られしこと。紫微宮は天の帝座。【一九】倏忽　たちまち。【二〇】向二紀　二紀は二十四年、大曆四年よりさかのぼれば天寶五載にて二十四年となる、向ふとあれば天寶七八年頃よりかぞへしなり。【二一】奸雄　わるきつよいもの、朝廷に反抗する武人等をいふ。【二二】多是非　彼等の行爲によしあしあり。仇氏いふ、降將の向背常あらざるをいふと。【二三】本朝　代宗の朝。【二四】貞觀　太宗の年號。【二五】日給在軍儲　日日供給すべきことが軍需品に在り。【二六】上官　上長官。【二七】有司　部下のかかりの役人。【二八】高賢　當路者をさす。【二九】相扶持　國家の顚危をささふるをいふ。「論語」に、危而不レ持、顚而不レ扶、の語あり。【三〇】疲茶　孱弱の貌、つかれてよわきなり、自己の老衰をいふ。【三一】荷懷策　荷とは謙辭、懷策は國家を救ふはかりごとをいだくをいふ。【三二】棲棲　仇氏いふ、棲棲屑屑なり、道途に奔走するをいふと、案するに棲棲は遑なき貌、屑屑は小事にたづさはる貌。【三三】先王實罪己　先王は古代の賢王をいふ、「左傳」に、禹湯罪レ己、其興也勃焉、とみゆ。而して裏面には肅宗卽位の初に詔を下して自己を責められしことを意味す。而して暗に代宗に求むる所あるなり。蔡夢弼以來先王を直に肅宗なりとし、朱氏の如きは先王は先皇に作るべしといへり。改むるに及ばず。【三四】不我與　我とともに在らず、歲月は我を待つてはくれず先きにすすむ。【三五】蹉跎　つまづく。【三六】病于斯　斯は客地をいふ。【三七】酆城氣　酆は豐につくるをよしとす。豐城雷煥が劍氣、已にみゆ。【三八】蛟龍池　風雨にあひて騰躍せんことをおもふなり。【三九】已自料　料るとは前途に見こみなきことを推量するなり。【四〇】意深　胸中に深意あるをいふ。【四一】陳苦詞　言ふに苦しきことばをのべる。

【題義】胸中に抱懷する所を詠じたる詩。仇氏大曆四年春、潭州（長沙）より衡州へさかのぼるときの作とせり。

【詩意】人は男子と生れたことは貴いことだ、丈夫たるものは天時の機會を知ることをたつとぶ。すなはち自己が要位に達しなければ我が一身をのみ善く修めるし、要位に達して志を得れば自己の爲さんとする理想を實行する。』　ああ、自分は不遇で老いかかつた時に世のなかのなんぎにであうた。えびすのこども（安祿山）が神器たる天下をうかがひ、他の逆節のものどももまた同じ樣な目的に向ひ、洛陽の地方は血を流す所となり、公侯等は草むらににげかくれて泣いた。長安もまた陷つて、君の御車は塵をあびて飛びだされる。萬民はあかごの樣に悲しみ、おふたかた（玄宗・肅宗）は皇宮をすてておでましになつた。たちまちのうちに二十四年にならうとするが、そのあひだに奸雄どものしたことには一是一非常ならぬものがある。』　今の朝廷はふたたび樹立せられたものの、まだ貞觀の御代には及ばぬ。日日軍需品を供給することが急務で、上官は下役をせめたててゐる。高賢な當路者も形勢にせまられて、國家の顚危をささへるところへは手がとどかぬ。じぶんはつかれながらもすこしは救濟策をもつてゐるのであるが、細瑣なことにのみせはしく追はれて何も施爲する所が無い。むかしの賢王は國家の事については自己を責めたものだ（御先代もさうであつた）、じぶんがひどくしんぱいするのはここのためだ（「いまは君が自己を罪せらるることが足らぬ」の意）。歲月は待つては

くれず先へすすんでゆく、いまこんなところでじぶんはつまづいて病んでゐるのだ。』じぶんは夜は豐城の劍氣が斗牛を衝くのをながめたり、また蛟龍のすむ池の方をふりむいてみたりする。ただ年齡髮のけのぐあひからおしはかつてみればなにもできないことはわかつてゐる、それで胸中に無限の深意をもちつつこの言ひぐるしきことばをのべるのである。』

〔二〕

邦危壞法則。聖遠益愁慕。
飄颻桂水遊。悵望蒼梧暮。
潛魚不銜鈎。走鹿無反顧。
皦皦幽曠心。拳拳異平素。
衣食相拘閡。朋知限流寓。
風濤上春沙。千里侵江樹。
逆行値吉日。時節空復度。
井竈任塵埃。舟航煩數具。

〔二〕

邦危くして法則壞る、聖遠くして益〻愁慕す。
飄颻たり桂水の遊、悵望す蒼梧の暮るるを。
潛魚鈎を銜まず、走鹿反顧すること無し。
皦皦たり幽曠の心、拳拳平素に異なり。
衣食相拘閡す、朋知流寓に限らる。
風濤に春沙に上る、千里侵江の樹あり。
逆行吉日に値ふ、時節空しく復た度る。
井竈塵埃に任す、舟航數〻具ふるを煩はす。

牽纏加老病。瑣細隘俗務。
萬古一死生。胡爲足名數。』
多憂汙桃源。拙計泥銅柱。
未辭炎瘴毒。擺落跋涉懼。
虎狼窺中原。焉得所歷住。
葛洪及許靖。避世常此路。
賢愚誠等差。自合受馳騖。
羸瘠且如何。魄奪鍼灸屢。
擁滯僮僕慵。稽留篙師怒。
終當掛帆席。天意難告訴。』
南爲祝融客。勉强親杖屨。
結託老人星。羅浮展衰步。』

牽纏老病加はる、瑣細俗務に隘にせらる。
萬古死生一なり、胡爲れぞ名數足るや。』
多憂にして桃源を汙さむ、拙計銅柱に泥む。
未だ辭せず炎瘴の毒、擺落す跋涉の懼。
虎狼中原を窺ふ、焉んぞ歷る所に住まることを得む。
葛洪及び許靖、世を避くるは常に此の路よりす。
賢愚は誠に等差あるも、自ら合に馳騖を受くべし。
羸瘠且つ如何にせむ、魄は奪はる鍼灸の屢〻なるに。
擁滯すれば僮僕慵なり、稽留すれば篙師怒る。
終に當に帆席を掛くべし、天意告訴し難し。』
南祝融の客と爲り、勉强して杖屨を親らせむ。
老人星に結託して、羅浮に衰步を展べむ。』

【字解】〔一〕法則　紀綱をいふ。〔二〕聖遠　聖は聖君。〔三〕桂水　一名は灕水。湘水と同じく桂林府興安縣海陽山より出で、

離水は南流し湘水は北流す。朱注に二水はかかる關係あるゆゑ湘水も亦た桂水と稱するを得といへるは立ち入りたる說明なり。作者湘水をさかのぼり桂水の方までゆかんと思ふによりて桂水をいへるなり。【四】蒼梧　舜の葬處、已に「過南嶽入洞庭湖」詩にみゆ。【五】不銜鈎　餌につられて鈎針のかぎをくはへぬ。【六】無反顧　よこむきせずまつすぐに走る。反は返なり、魚・鹿は以て現在の自己に比す。【七】皦皦幽曠心・拳拳異平素　仇注に云ふ、潛魚走鹿、皆知ニ見レ幾遠ニ害、我亦本有ニ幽曠之心一、今拳拳屈ニ身于人一而異ニ於素志ニ者、祇爲下衣食所レ驅、朋知遠隔上耳、と。是は恐らくは作者の心事を誤解せり。愚見は頗る之と異なり。仇氏は作者平生幽曠の心ありて今之に異なるとなせり。愚案するに、作者は平生其の君を堯舜に致し風俗を淳ならしめんことを以て志となせり。幽曠の心の如きは平生の志に背きて一時的に之に耽るのみ。故に「次空靈岸」詩にいふ、嚮者留ニ遺恨一、恥爲ニ達人誚一、と、其の平生幽曠に耽らざりしことをさして達人に誚らるといひしなり。以上は作者の心事につきのべたり。次には字句につきてのべん、皦皦とは明白なる貌、幽曠心とは幽邃閒曠の心、山水自然などをたのしみて氣ながにすごす心なり。魚鹿の心を今の心とするこれ皦皦幽曠心なり。拳拳異平素とは、異ニ平素之拳拳一の意、拳拳は「中庸」にみえ、捧持の貌、卽ち君を堯舜に致さんとの志を寸時も胸より離すことなく拳拳服膺するなり、「今幽曠の心を抱くは平素の拳拳とはちがつてゐる」といふが本句の意なり。【八】拘閡　拘はかかはる、閡はとどむる、ささへる。拘束妨害をうけるをいふ。【九】朋知限流寓　自己流寓の境になれば朋知に限りあるをいふ、少數の知り人しかなし。【一〇】上春沙　濤がのぼるにあらず、自己が水をさかのぼるをいふ。湘江は水碧沙明の江なるにより沙といふ。【一一】侵江樹　前の「野望」詩に、野樹侵ニ江闊一の句ありたり。【一二】逆行　上航をいふ。【一三】吉日　清明節その他の令節。【一四】井竈任塵埃　これは陸上につきいふものに似たり。井やかまどは炊事に必要なるもの、それを塵埃にまかせて自己は離れて舟にのるなり。【一五】煩數具　手かずをかけてしばしば用意する。【一六】牽纏　ひかれ、まとはれる。【一七】隘俗務　自己の自由が俗務のために狹隘にせられる。【一八】一死生　同一の死生、人によりて差別なき死生。【一九】胡爲　胡は何、胡爲は何爲れぞなり。【二〇】足名數　足は「たる」、多きに過ぐるをいふ。名數は禮數といふがごとし。足名數はくだくだしき禮法の多すぎるをいふ。【二一】汗桃源　隱遁生活をせんと桃源に入らんとすれば其の地をけがす恐れあり、謙辭なり。【二二】泥銅柱　この句不備なり。銅柱は馬援が故事、交趾にあり、泥とは銅柱の地にゆかんとして途中になづみをるをいふ。楊注に衡州にも吳の程普建つる所の銅柱ありとて、これを湖南に泥み居るとなくは附會に失せり。【二三】擺落　はらひのける。【二四】葛洪　洪字は稚川、晉の人、交趾に丹砂を出だすときき勾漏の令たらんことを求め、遂に子弟をひきゐて俱に行き乃ち羅浮山に止まりて丹を鍊る。【二五】許靖　靖字は文休、董卓の誅を避け走りて交趾に至る、のち劉璋に招かれて蜀に入り先主劉備が臣となる。【二六】此路　廣東交趾に向ふ路をいふ。【二七】賢愚　賢は葛・許をさし、愚は自己をさす。【二八】等差　差は高低のちがひをいふ、等はひとし。【二九】馳騖　はせる、かけずりまはること。【三〇】羸瘠　つかれやせる。【三一】魄奪　ぴつくりする。【三二】鉞灸屢　たびたび針や灸の療治をする、病のためなり。【三三】擁滯　病氣のための滯在。【三四】稽留　事によりてぐづついてとどまる、稽は緩なり。【三五】篙師　さをかた、船頭。【三六】終當二句　倒插なり、おきかへてみるべし。【三七】難告訴　天は高きにあれば訴へんと欲するも訴へがたし。【三八】南爲二句　倒插なり。【三九】祝融　衡山にある峰の名、董錬師の居る所なり。【四〇】老人星　已にみゆ。【四一】羅浮　增城、博羅二縣の境にあり、羅山・浮山の二者合體して羅浮山といふ、神仙の居る所なり。道家にては羅浮の洞、周回五里、朱明曜眞之天と名づくといふ。【四二】展衰步　老人のつかれたあゆみをのべる、たづれてゆくをいふ。

【詩意】 國家が危くなつて法則が破壞された。今の世は聖君と遠く隔たるのでますますそれが慕はしい。これからぶらりぶらり桂水の遊をなすのであるが、今からはるかに舜の蒼梧の暮をうらめしくながめやる。』　深淵にひそむ魚は餌につられて釣鈎をくはへることはせぬ。山を走る鹿はあとをもふりむかずまつすぐにかけてゆく。（自分はその魚や鹿のごとく）じぶんがいましづかなひまな生活をおもふ心ははつきりとしてきた、これまでいつも國家の事のみを胸に忘れなかつたのとはよほどかはつてきた。ただ衣食といふものの制限があり、流寓してあるく身には朋友知己のかずにも制限がある。それで風濤ををかして春沙の江をさかのぼると、江を侵す樹色は千里につらなる。上航のうちに吉日にであふこともあるが、いたづらにその時節をもすごしてしまふ。時には岸上の井竈としたしむけれど

もまたそれを塵埃に委し去つて、たびたび舟航の用意をする。老病はつきまとうてくる、瑣細な俗務は自由をせばめる。萬古にわたつてだれもみな同じ様に生死するのだ、なんでうるさき人間の禮法に關したことが多すぎるのか。』これから隱遁しようとしても憂國の念ばかり多い自分は桃源の仙境を汚すことになりはしないか、仕方のまづいために自分は今なほ銅柱のある交趾へゆけずに途でなづんでをる。しかし炎瘴の毒氣も辭するつもりはない、山川を跋渉する懼れもはらひのける。虎狼の様なものが中原を窺うてゐるときだ、どうして經過する場所にとどまつてゐることができよう。葛洪だの許靖だの、世を避けた人人はみな自分のとほるこの路をとほつたのだ。彼等と自分と賢と愚との等級はあるが、しぜん自分の如きものはあちこちとかけめぐるといふ運命にあはねばならぬはずである。このつかれてやせた身をまあどうしようか、あまりたびたび針だの灸だのをせねばならぬのにびつくりする。病氣のために滯在すると僮僕どもはなまける、事によつてぐづぐづしてゐると篙師がおこる。天に訴へようとしても天には訴へられぬ、結局は席帆を掛けて旅をつづけねばならぬ。』さうして無理やりにもみづから杖をつき屨をはいて、南のかた衡山へいつて祝融峰の客となり、さらに南極老人星に結託して羅浮山の仙洞まで力なき歩みをのばすであらう。』

【附　錄】

杜員外兄垂示詩、因作此寄上　郭受

杜員外兄、詩を垂示す、因りて此を作りて寄上す

新詩海內流傳遍。　新詩海內流傳遍し、
舊德朝中屬望勞。　舊德朝中屬望勞す。
郡邑地卑饒霧雨。　郡邑地卑くして霧雨饒し、
江湖天闊足風濤。　江湖天闊くして風濤足る。
松花酒熟旁看醉。　松花酒熟して旁く醉を看る、
蓮葉舟輕自學操。　蓮葉舟輕くして自ら操を學ぶ。
春興不知凡幾首。　春興知らず凡そ幾首ぞ、
衡陽紙價頓能高。　衡陽の紙價頓に能く高からむ。

酬郭十五判官受　郭十五判官受に酬ゆ

才微歲晚尙虛名。　才微にして歲晚に尙ほ虛名あり、

【字解】〔一〕酬郭十五判官　郭

臥病江湖春復生。　病に臥して江湖に春復た生ず。
藥裹關心詩總廢。　藥裹關心詩總て廢す、
花枝照眼句還成。　花枝眼を照らして句還た成る。
只同燕石能星隕。　只だ燕石と同じく能く星隕す、
自得隋珠覺夜明。　隋珠を得しより夜の明かなるを覺ゆ。
喬口橘洲風浪促。　喬口橘洲風浪促し、
驚帆何惜片時程。　驚帆何ぞ惜まむ片時の程。

星の如くおつるなり、隕石於宋五隕星也、と「左傳」にみゆ。【七】隋珠　隋侯大蛇の傷けるを救ひ、蛇直徑一寸の珠を報いしに、其の珠夜光明あり室をてらすべしと「搜神記」にみゆ。以て郭受が詩に比す。【八】喬口　前に「入喬口」詩あり、長沙の北にある地の名。【九】橘洲　長沙縣西南四里の江中にある洲の名。【一〇】促　速かなるをいふ。【一一】片時程　少時を要する水路。

【題義】衡陽の判官郭受がよこした詩の返事。大曆四年春、潭州にての作。

【詩意】自分は才がすこししかないのに晩年に實のそはぬ名聲がある。江湖に病に臥してゐるをりにまた春になつた。藥袋のことが氣になつてゐるのですべて詩をやめてゐたのだが、花の枝に眼を照らされるとやつぱり句ができる。自分の詩はつまらぬ燕石の樣なものでそれがやたらに星の隕ちる樣には名は受、「唐詩紀事」に、大曆間の衡陽の判官なりといへり。受、作者に前篇を寄せたるにより、作者之に返答せしもの本篇なり。【二】歲晚　自己の晩年をいふ。【三】藥裹關心　くすり袋が心にかかる、病にたたるるをいふ。【四】花枝照眼　春をいふ。【五】燕石　燕國の石、宋の愚人燕石を梧臺の側に得て之を寶とし藏せしといふこと「韓非子」にみゆ。自己の詩に比す。【六】星隕　自己の詩に比す。

におちちるまでだ。あなたの詩は隋侯の珠の樣のもので之を得てからは夜も明るい樣な氣がする。喬口・橘洲の風浪ははやい、だからすこしのみちのりを風帆を飛ばしてそちらへおたづねすることは惜しむところではない。

望嶽

南嶽配朱鳥。秩禮自百王。
欻吸領地靈。澒洞半炎方。
邦家用祀典。在德非馨香。
巡狩何寂寥。有虞今則亡。『
洎吾隘世網。行邁越瀟湘。
渴日絕壁出。漾舟清光旁。
祝融五峰尊。峰峰次低昂。
紫蓋獨不朝。爭長嶪相望。

南嶽朱鳥に配す、秩禮百王よりす。
欻吸地靈を領す、澒洞として炎方に半なり。
邦家祀典を用ふ、德に在りて馨香に非ず。
巡狩何ぞ寂寥たる、有虞今は則ち亡し。』
吾が世網に隘にせらるるに洎び、行邁瀟湘を越ゆ。
渴日絕壁に出づ、舟を漾はす清光の旁。
祝融五峰尊し、峰峰次して低昂す。
紫蓋獨り朝せず、長を爭ひて嶪として相望む。

恭聞魏夫人。羣仙夾翼翔。
恭しく聞く魏夫人、羣仙夾みて翼翔すと。

有時五峰氣。散風如飛霜。
時有りてか五峰の氣、風に散ずる飛霜の如しと。

牽迫限脩途。未暇杖崇岡。
牽迫脩途に限らる、未だ崇岡に杖つくに暇あらず。

歸來覬命駕。沐浴休玉堂。
歸來覬はくは駕を命じ、沐浴して玉堂に休せむ。

三嘆問府主。曷以贊我皇。
三嘆して府主に問ふ、曷を以てか我が皇を贊せむ。

牲璧忍衰俗。神其思降祥。
牲璧衰俗に忍ばば、神其れ降祥を思はむや。

【字解】【一】望嶽　南嶽を望むなり。南嶽とは衡山なり。湖南衡州府衡山縣西三十里にあり。衡山は「山海經」には之を崙嶁山といふ、徐靈期が南嶽記にいふ、南嶽は周回八百里、回雁（峯の名）を首となし、岳麓（山の名）を足となす、と。【二】南嶽　上にみゆ、五嶽の中の南の嶽。【三】配朱鳥　「漢書」天文志に、南宮は朱鳥權衡とみゆ、朱鳥は南方の星宿なり。【四】秩禮　秩は等なり、位の順序をいふ、山川を祀るにその山川によりて尊卑の資格の差あり。五嶽の牲禮は三公に準ず。【五】百王　古代の多くの王。【六】歆吸　「文選」の江淹が詩の注には俄頃の貌とす、にはかなるさま。楊注に神異恍惚の意とす。【七】領地靈　地上の靈物を支配す。【八】潏洞　氣のもやくやとした貌。【九】半炎方　半とは半ばを占むるをいふ、炎方は南方の地域をいふ。【一〇】祀典　祭祀の典禮。【一一】在德非馨香　德に在りて馨香に在るに非ざるをいふ、「左傳」に、黍稷非レ馨、明德惟香、とみゆ。神を祭るにおそなへもののきびあはより祭る者の明德が香しとの意なり。【一二】巡狩　「尚書」舜典に、五月、南巡狩至二于南岳一、の文あり、巡狩は封内を巡視すること、舜は時期を定めて五嶽を順にめぐりあるきたりといふなり。勿論古代の南岳は霍山にして鳳陽府に在る山なること前にかつて述べ置きたり。【一三】有虞　舜の氏なり。【一四】洎　及ぶ。【一五】隘世網　人事の累にせばめられる。【一六】渴日　旱天の日輪。【一七】清光　蓋し日光の水上に浮べるものをさす。【一八】覩融五峰尊　衡山に七十二峰あり、そのうち芙蓉・紫蓋・石廩・天柱・覩融の五峰最も高しといふ。【一九】次　順序だつをいふ。【二〇】紫蓋獨不朝　仇注に「樹萱錄」を引きていふ、岳の諸峰皆覩融に朝す、獨り紫蓋の一峰は勢轉じて東に去る、と。【二一】爭長　他よりまさらんことを爭ふ。【二二】嶧　山のけはしき貌。【二三】魏夫人　仙女なり。南嶽魏夫人傳に云ふ、夫人、名は華存、字は賢安、晉の司徒魏舒が女にして、南陽の劉文に適き、二子を生む。夫人幼にして道を好み、眞を味ひ玄に耽り、常に胡麻散・茯苓丸を服す、忽ち太極諸眞人、授くるに仙經三十三卷を以てす、又黃庭內景經を授け晝夜存念せしむ、遂に冥心齋靜、眞靈累りに感ずることを得て、凡そ世に在ること八十三年、晉の成帝の咸和九年を以て劍に託して形を化して去る。北して上清宮玉闕の下に詣る、諸眞君、夫人に玉札金文の位を授けて紫虛元君となし、上眞司命南嶽夫人を領せしめ秩を仙公に比す、と。【二四】夾　魏夫人をはさむなり。【二五】牽迫　人事にひつぱらるるなり。【二六】限脩途　長途をゆかればならぬといふことに制限せらる。【二七】杖崇岡　たかき岡に杖つく。嶽廟に參拜するをいふ。【二八】歸來　南航のかへりみちをいふ。【二九】覬　冀ふなり。此の語は次句にまでかかる。【三〇】命駕　のりものを命ずる、ここへたづねること。【三一】沐浴　身と髮とをあらひきよめる。【三二】休玉堂　廟のうつくしき堂に休息する。【三三】三嘆問府主　以下は現在の事。府主とは蓋し衡州の刺史をさす。衡州刺史は韋之晉なるべきか。【三四】曷以　曷は何なり、祀神の禮につきていふなり。【三五】贊我皇　我が天子の事をたすけなす。【三六】牲璧忍衰俗　牲璧はいけにへ、たま、神にささぐるものなり。忍衰俗とは民俗衰敝せりとて忍びて牲璧を鄭重にそなへざるをいふ。【三七】思降祥　思は豈思、の意、反語、降祥はめでたきことをくだすなり。

【題義】南嶽衡山を望みしことをよんだ詩。大曆四年春晩、潭州より衡州にゆきしときの作。

【詩意】南嶽は天文では朱鳥の星宿に配せらるる山で、その祭の禮の等級づけられたことは多くの古代の王から以來のことである。この嶽は恍惚として地上の諸靈物をひきゐ、その雲氣澒洞たる姿はほとんど南方地域の半ばをも占めてゐる。國家がこの嶽に對して祀禮を用ふるのは、祭者の德の如何に

在るのであつて、お供へする黍稷の馨香の有無に在るのではない。昔舜帝はこの嶽に巡狩されたといふが、その以後はなんとさびしいことだらう、今や帝舜有虞氏の様な君はなくなつてしまつた。』自分は世間の塵事の網にせばめられてから、旅にでかけて瀟湘の川をこえた。すると旱天の太陽は絶壁の上から出る。じぶんは日光の清く水面にうかべる傍に舟をただよはす。みると祝融等の五峰は尊さうにみえて、それぞれの峰がたかくひくく次第に列をなしてゐる。そのうち紫蓋峰だけはひとり祝融峰には朝せずして、他と雄長を争うてけはしく立つてにらみあうてゐる。つつしんでうけたまはると魏夫人といふこの嶽の女仙を多くの仙人たちが夾んで虚空にかけり、時としては五峰の氣が風に吹きちらされて霜を飛ばす様につめたいといふことである。』自分は人事にひかれてこれからまだ長道中をせねばならぬといふ制限をうけてゐるので、嶽のたかい岡に杖ついて御廟に參詣する暇がない。しかし歸り途にはどうかこちらへ駕を命じて齋戒沐浴して御廟の玉堂に休息したいとねがうてゐる。じぶんは三たび嘆じてこの地方の長官たる人におたづねする、あなたは何を以て我が君の政治をおたすけしようとなさるか、いま民俗が衰敝のありさまにあるからとて神にささげる牲だの璧だのをひかへめにする様なことを忍んではなりませぬぞ、それを忍ぶ様なことであるならば、嶽神もどうしてこの地方に瑞祥を天から降したまふことをお思ひになりませうぞ、決してお思ひになりませぬ。』

嶽麓山・道林二寺行

嶽麓山・道林の二寺の行

玉泉之南麓山殊。
道林林壑爭盤紆。
寺門高開洞庭野。
殿腳插入赤沙湖。
五月寒風冷佛骨。
六時天樂朝香爐。
地靈步步雪山草。
僧寶人人滄海珠。
墻劫宮牆壯麗敵。
香廚松道清涼俱。
蓮花〔池〕交響共命鳥。
金牓雙迴三足烏。』

玉泉の南麓山殊なり、
道林も林壑爭ひて盤紆す。
寺門高く開く洞庭の野、
殿腳插み入る赤沙湖。
五月寒風佛骨冷かなり、
六時天樂香爐に朝す。
地靈にして步步雪山の草あり、
僧寶にして人人滄海の珠なり。
墻劫宮牆壯麗敵す、
香廚松　道清涼　俱にす。
蓮花〔池〕交　響く共命の鳥、
金牓雙迴す三足の烏。』

【字解】【一】嶽麓山　長沙府善化縣西十里にあり。山上に嶽麓寺あり。【二】道林　寺の名、嶽麓の下にあり、善化縣をさること八里。【三】玉泉　寺の名、隋煬帝集に、開皇十二年十二月、智顗禪師荆州に至り玉泉寺を創立す、と。【四】麓山　殊　麓山は嶽麓山をいふ、殊とは寺壇特別にまされるをいふ。【五】盤紆　わだかまり、うねる。【六】赤沙湖　岳州府華容縣南にあり、また之を赤亭湖ともいふ。【七】五月　五月に於てはといふなり。【八】冷佛骨　佛骨は寺の藏する所なるべし。【九】六時　一晝夜を各〻六時とす。【一〇】天樂　天上の音樂。【一一】朝香爐　朝は來朝、向つて來ること、香爐のところへ來るをいふ。

(二四)方丈涉海費時節。
(二五)玄圃尋河知有無。
暮年且喜經行近。
春日兼蒙暄暖扶。
(二九)飄然斑白身奚適。
(三一)傍此煙霞茅可誅。
(三四)桃源人家易制度。
(三六)橘洲田土仍膏腴。
(三八)潭府邑中甚淳古。
(四一)太守庭内不喧呼。』
昔遭衰世皆晦迹。
今幸樂國養微軀。
(四五)依止老宿亦未晩。

方丈海を涉る時節を費す、
玄圃河を尋ぬ知らず有無。
暮年且つ喜ぶ經行近きを、
春日兼ねて蒙る暄暖の扶くるを。
飄然斑白身奚くに適く、
此の煙霞に傍ひて茅誅す可し。
桃源の人家制度に易し、
橘洲の田土仍ほ膏腴。
潭府邑中甚だ淳古、
太守庭内喧呼せず。』
昔衰世に遭へば皆迹を晦ます、
今幸に樂國に微軀を養ふ。
老宿に依止するも亦た未だ晩からず、

【三】雪山草　雪山は印度の北境の山。この山に香草ありて大力の牛之を食す、其の牛の糞は微細にして旃檀に和合すべしと楞嚴經にみゆ。【三】僧寶　起信論にいふ、一眞如は是れ覺性、佛寶と名づく、二眞如は執持の義あり、法寶と名づく、三眞如は和合の義あり、僧寶と名づく、と。【四】滄海珠　珠は眞珠。【一四】塔級　塔級なり、已にみゆ。【一六】宮牆　寺の宮殿のかき。【一七】香廚　香飯をたくくりや。【一八】松道　松の生じたるみち。【一九】清涼　すずしさ。【二〇】共命鳥　寶藏經にいふ、雪山に鳥あり、名づけて共命となす、一身二頭、識神各〻異に、同じく共に命を報す、共命といふ、と。異心同體にて共に鳴く鳥なり。共命は又共名に作る。阿彌陀經にいふ、極樂淨土に七寶池あり、池中の蓮花は大さ車輪の如し、又伽陵頻伽共名の鳥あり、晝夜六時出でて雅音を和す、と。【二一】金牓　黄金を飾つたかんばん。【二二】雙迴　ならびかけめぐる。牓は左右にあるなるべし。【二三】三足烏　三本足のからす、「淮南子」に、日中踆烏ありとあり、注に踆烏は三足烏なりとみゆ。【二四】方丈　海上仙山の名、已にみゆ。【二五】玄圃　崑崙山の懸圃、已にみゆ。崑崙は河水の出づる所なり。【二六】尋河　張騫が黄河の源を尋ねし事、已にみゆ。【二七】知有無　不レ知下其有レ之乎、無レ之乎上の意。【二八】經行近　寺を近く經しこと。【二九】斑白　ごまふく、宅を構へるをいふ。【三〇】奚適　何くにゆく。【三一】傍　そばにつく。【三二】煙霞　煙霞のある地。【三三】茅可誅　かやをきりて屋根をゆ。【三四】桃源人家　仙境の家。【三五】易制度　しくみたやすし。【三六】橘洲　前の「酬郭十五判官」詩にみ淳古　まじりけなく古めかし。【四一】太守　潭州の長官。【四二】不喧呼　訴訟事などなく靜なり。【四三】晦迹　賢人あとをくらまして隱遁す。【四四】樂國　安樂な土地。【四五】依止　依りてとどまる。【四六】老宿　老僧をいふ。【四七】謝客　宋の謝靈運がこと。靈運幼にして錢塘の杜明師に養はる、故に客兒といふ、あづけ兒にされしなり。【四八】尋幽慣　幽邃なる山水をたづぬるになれたり。【四九】何顒　周顒に作るべしといへり。南史にいふ、顒、字は彥倫、音辭辯麗、佛理に長す、清貧寡欲、終日長蔬、妻子ありと雖も富貴功名焉ぞ足レ圖。

富貴功名焉んぞ圖るに足らむ。
久爲謝客尋幽慣。
細學何顒免興孤。
一重一掩吾肺腑。
山鳥山花共吾友。
宋公放逐曾題壁。

久しく謝客を爲ねて幽を尋ぬるに慣る、
細かに何顒を學びて興の孤なるを免れむ。
一重一掩吾が肺腑、
山鳥山花共吾が友。
宋公放逐曾て壁に題す、

【原注】宋之問。

(五五)物色分留待老夫。』

物色分留せられて老夫を待つ。』

【五六】物色分留せられて老夫を待つ。』をたづれし事、已にみゆ。【一七】知有無　不レ知下其有レ之乎、無レ之乎上の意。【二八】經行近　寺を近く經しこと。【二九】斑白　ごまふく、宅を構へるをいふ。【三〇】奚適　何くにゆく。【三一】傍　そばにつく。【三二】煙霞　煙霞のある地。【三三】茅可誅　かやをきりて屋根をゆ。【三四】桃源人家　仙境の家。【三五】易制度　しくみたやすし。【三六】橘洲　前の「酬郭十五判官」詩にみ淳古　まじりけなく古めかし。【四一】太守　潭州の長官。【四二】不喧呼　訴訟事などなく靜なり。【四三】晦迹　賢人あとをくらまして隱遁す。【四四】樂國　安樂な土地。【四五】依止　依りてとどまる。【四六】老宿　老僧をいふ。【四七】謝客　宋の謝靈運がこと。靈運幼にして錢塘の杜明師に養はる、故に客兒といふ、あづけ兒にされしなり。【四八】尋幽慣　幽邃なる山水をたづぬるになれたり。【四九】何顒　周顒に作るべしといへり。南史にいふ、顒、字は彥倫、音辭辯麗、佛理に長す、清貧寡欲、終日長蔬、妻子ありと雖も

獨り山舍に處る、と。【五〇】 兒興孤　卽ち次の二句のためなり。【五一】 一重一掩　山形の稠疊なるをいふ、一たびはかさなり、一たびはおほふ。【五二】 肺腑　「漢書」劉向傳にみゆ。顏師古の注に、肺腑は相附着す、猶ほ心膂といふが如しといへり。【五三】 友于　兄弟をいふ、「尙書」に、友二于兄弟一とあり、友于の二字を切りとりて兄弟の義とす。【五四】 宋公　原注にいふごとく宋之問をさす。之問は睿宗の立つや詔により欽州に流さる、欽州は嶺南（廣東）に屬するゆゑ、之問は道に長沙を經て詩か嶽麓寺に題せしなり。朱注には之問集の「高山引」を引きて杜詩と似よりたる字句あるゆゑ、放逐題壁の詩なるべしといへり。【五五】 物色分留　あたりの景色が一部分詠ぜられず後人に分ちとどめられてある。【五六】 待老夫　老夫は自己をいふ、待とは題詠を待つをいふ。待字の主語は物色。或はもし「物色を分留して老夫を待つ」と訓ずれば分留・待の主語は竝に宋公となる。

【題義】 嶽麓山の山寺と、道林寺との二つの寺のうた。大曆四年春、初めて潭州に到りし當時の作。

【詩意】 荆州玉泉寺の南に於ては嶽麓山寺は特別にすぐれた寺である。その下にある道林寺も林や壑が爭うて盤紆してをる。寺門は高くて下に洞庭の原野が開かれ、寺殿の腳は赤沙湖までさしこんである。五月の暑さにも寒風が佛骨を冷かに吹き、二六時中、天上の音樂が香爐のくゆる所に來朝してくる。地は靈であつて一歩ごとに雪山にある樣な香草が生えてをり、僧は三寶の一であつてどの一人も滄海から拾うた眞珠の樣である。塔級も宮牆もその壯麗なることは相匹敵し、香廚も松の道も俱に清涼である。蓮の池には共命鳥がこもごも響き、金牓の左右には三足の烏が雙びかける。』方丈といふ仙山は海を涉つてゆかねばならぬので時間を費すし、懸圃の方へ河水の源を尋ねたなどいふ話は有つたことか無かつたことか知れぬ。それよりも自分は晩年にかやうな寺へ近くとほりかかり、そのうへ春の日にあうて暄暖のおかげで老衰を扶けてもらつた。このごましほあたまの自分の身は飄然としてどこへゆくつもりか、ここならばかやうな煙霞の場所にそうて茅屋を構へることができる。桃源の樣な仙境の人家は仕組みもたやすい、また近地の橘洲の田地はよく肥えたところであり、潭州の地方は人情淳古で州の太守の庭内に訴訟沙汰などやかましいことはない。』昔は世の衰へたときにであうた人人は皆跡をくらまして隱遁した、今は幸にかやうな安樂國でつまらぬからだを養ふことができる。高德の老僧にたより止まることも晩くはない、富貴だの功名なんどは圖るだけのねうちのものではない。じぶんは久しく謝靈運をまねて幽邃な山水を尋ねるに慣れてゐるが、これからはくはしく周顒をまなんで寺住まひでもしよう、しかし顒とはちがつて興がさびしい樣なことはない。（なぜとならば）山峰の一重一掩してゐるのは親しきこと吾が肺腑の如く、山の鳥、山の花も吾が兄弟の如きものであるのである。まへかた宋公（之問）は廣東へ放逐されたまうたときかつてこの寺の壁に詩を題せられた、それ以來此の寺境の物色は一部そのままのこされてこのおやぢがくるのを待つてゐたのである。』

奉送韋中丞之晉赴湖南

龍渥徵黃漸。權宜借寇頻。　龍渥く徵黃漸なり、權宜借寇頻りなり。

湖南安背水。峽内憶行春。　湖南背水に安んぜむ、峽内行春を憶ふ。
王室仍多故。蒼生倚大臣。　王室仍ほ多故なり、蒼生大臣に倚る。
還將徐孺榻。處處待高人。　還た徐孺が榻を將て、處處高人を待て。

【字解】【一】韋中丞之晉赴湖南　黄鶴注に曰く、大曆四年二月、湖南都團練觀察使・衡州刺史韋之晉を以て潭州刺史と爲す、是に因つて湖南軍を潭州に徙す、と。仇氏之を引きて本篇は作者衡州にありて韋に寄送せしものとなせり。浦氏之を駁して曰く、仇氏は作者衡州にありて韋の潭州にゆくを送るとなす、兩人兩地、同じく湖南に在るに、題してぼんやりと赴湖南と云ふを得ず。この篇は韋が蜀より衡州に赴くを送れるものにて其の事は大曆四年以前に在り。作者も亦た峽内にありし時の作なるべし。此の如くみて詩意始めて明かなり、と。浦氏の説理あり、之に從ふ。【二】寵渥　天子の恩寵厚し。【三】微黄漸　漸く黄を微さんとす。黄は漢の黄霸、潁川太守より徵されて京兆尹となる。【四】權宜　一時の便宜。【五】借寇　後漢の寇恂、潁川太守となり盜を平らぐ、汝南に徙さるるや潁川の民復た寇恂を借ること一年ならんと請ひたり。【六】安背水　或は曰く、背水は其地の地形をいふと。或は曰く、韋が韓信背水の陣をしきし如く兵法に通ずるをいふ、と。暫く後説に依る。【七】峽内　三峽の内、韋の嘗て治めし蜀地をいふ。【八】行春　刺史が春にあたりて管内を巡行すること。【九】多故　事故多し。【一〇】徐孺榻　陳蕃が別に一榻を懸けて徐孺子を敬禮せし事、已にみゆ。【一一】高人　高尚なる人物、徐孺子の如きもの。

【題義】御史中丞韋之晉が湖南（衡州ならん）に赴くのを送つた詩。作時は詳かならず、作者猶ほ峽内にありしときの作ならん。

【詩意】君は天子の恩寵が厚いからやがては黄霸の樣に中央へ召されるであらうが、いまは便宜のために地方からしきりに寇恂を借してくれといはれる樣なことになつてゐる。君は湖南に赴いたならば湖南は君の背水の陣法のために安泰になるであらう、それとともに君の舊任地の峽内では君がかつて在任中春にあたつて管内を巡行したことをおもうてをる。今は王室には事故多く、人民は君の樣な大臣にたよらなければならぬ。君は任地へゆかれたならば君もまた陳蕃の樣に徐孺子を敬禮する榻を設けて到る處で高尚な人物を優待せられることを希望する。

湘江宴餞裴二端公赴道州

白日照舟師。朱旗散廣川。　白日舟師を照らす、朱旗廣川に散ず。
羣公餞南伯。肅肅秩初筵。　羣公南伯を餞す、肅肅初筵秩す。
鄙人奉末眷。佩服自早年。　鄙人末眷を奉ず、佩服早年よりす。
義均骨肉地。懷抱罄所宣。　義は骨肉の地に均し、懷抱宣ぶる所を罄くす。
盛名富事業。無取媿高賢。　盛名事業富む、取る無きは高賢に媿づ。
不以喪亂嬰。保愛金石堅。　喪亂に嬰るを以てせずして、金石の堅きを保愛す。
計拙百寮下。氣蘇君子前。　計は拙なり百寮の下、氣は蘇す君子の前。

會合苦不久。哀樂本相纏。
交遊颯向盡。宿昔浩茫然。
促觴激百慮。掩抑淚潺湲。
熱雲初集黑〔集曛黑〕。缺月未生天。
白團爲我破。華燭蟠長煙。
鵠鶻催明星。解袂從此旋。』
上請減兵甲。下請安井田。
永念病渴老。附書遠山顚。』

【字解】【一】湘江宴　湘江のほとりにての宴、潭州にての宴ならん。【二】裴二端公　裴二は裴虬なり、河東の裴虬、字は深源、大曆四年、著作郎・兼侍御史・道州刺史となる。蓋し大曆二年十二月に道州刺史崔渙といふもの卒せしによりて虬之に代りしなり。「通典」に唐の侍御史は號して臺端となす、他人は之を稱して端公といふ、と。又舒元輿が御史記に中丞を端長となす、とみゆ。之によればただの侍御史も端公、中丞を端長と敬稱するなり。【三】道州　湖南永州府に屬す、已にみゆ。【四】舟師　水軍。【五】南伯　伯は州の長をいふ、道州は南方の地なるにより南伯といふ。【六】肅肅　しづか。【七】秩初筵　秩は秩序、初筵は酒席の初。【八】鄙人　自己をいふ。【九】末眷　愛顧を蒙るものの末に居る、謙辭なり。【一〇】佩服　裴の德に服するをいふ。【一一】義均　義は交義をいふ。【一二】骨肉　兄弟をいふ。【一三】懷抱　胸中の感。【一四】馨所宣　すつかりのべる。【一五】盛名　裴の名聲盛なること。【一六】無取　自己の取る所なきをいふ、謙辭。【一七】高賢　裴をさす。【一八】喪亂裴　自己が喪亂の運命にであうてゐること。【一九】保愛金石堅　金石堅は二人交情の堅きをいふ。仇注には保愛は作者が保愛することとみたり。浦注は金石堅を交情の堅きこととし、保愛は裴が保愛することとみたり。（浦注云、不下以二我與一亂落魄一、而移二其宿愛一、と。浦氏によれば「喪亂に與るを以てせずして、金石の堅きを保愛す」、と訓む。）王洙注には名節の堅きこと金石の如くなれと勸むるなりといへり。以上諸說「金石堅」と保愛の主語とにつきての差はあるも、不字を前句のみにかけて見るは同じ。二句富事業の句を承け、且つ道州に赴くの意氣をいへり。【二〇】計拙二句　此の二句は媿高賢の句を承け、自己をいふ。【二一】百寮　前の羣公に同じ、送者をさす。【二二】氣蘇　老衰の氣よみがへりて生氣あり。【二三】君子　裴をさす。【二四】颯向盡　颯は風の吹くさま、向盡は盡きかかる。【二五】宿昔　むかしの事。【二六】促觴　せつせと酒杯をさす。【二七】掩抑　涙をおさへる。【二八】集曛黑　ゆふぐれにあつまる。【二九】白團爲我破　蔡注にいふ、白團は扇をいふ、夜熱するによりて扇爲めに搖がされて破るるなりと。浦注にいふ、即ち缺月を指す、と。前說に依る。【三〇】鵠鶻　あをさぎの類。【三一】鶻鶻、且を求むる鳥なりと。【三二】催明星　夜明けの明星を消えさせんとうながす。【三三】解袂　たもとを分つをいふ。【三四】從此旋　旋は自宅へむけたちかへるをいふ。【三五】減兵甲　兵數を減ずる。【三六】安井田　井田は浦注にいふ、井疆田里と。案ずるに井田は九百畝井字形に區劃したる田をいふ、ここは單に農民をいふのみ。【三七】病渴老　消渴のやまひにかかれる老人、自己をさす。【三八】附書　手紙を與へる。【三九】遠山顚　顚は巔。

【題義】湘江のほとりの別宴で侍御史裴君（虬）が刺史となつて道州へ赴任するのにはなむけした詩。

【詩意】太陽の光が水軍を照らし、朱い旗が廣い川に散らばる。多くの役人諸公が南方の州長（裴）に餞するために、靜肅に宴席が順序だてられて初められる。』じぶんも裴君の愛顧の末席にをるものでわかいころから君の德には敬服してゐるのである。自分等の交義は骨肉のあひだがらにも均しいの

で、おもうてゐることはつつまずのべつくしてゐるのである。君は盛名を負うて事業に富んだ人である。之に對して自分の樣な取りえのないものは高賢に對してははづかしくてしかたがない。君はわたくしが喪亂にかかつておちぶれてゐるといふことをなんともおもはず、これまでの金石の如く堅き交際をそのままをしみ保ちくだされた。自分は羣寮の下に於て其の爲す所は拙であるが、君子の前に於ては老衰の氣が生氣を吹きかへす樣なここちがする。』遺憾なことは哀しみと樂しみとはもともつれあふもので、せつかくの會合も久しくすることのできぬことはこまつたことである。交はつたともだち等も今ではにはかになくなりかけてゐる、昔のことをおもふと遠くしてただぼんやりとしてしまふ。さかづきをせつせとさされるとさまざまのしんぱいが激してくる、抑へようとしても涙が潺湲とあふれながれる。ゆふがたのうすくらがりに炎熱の雲が集つてきた、缺けた月はまだでてこぬ。あまりあふいだため白い團扇はこはれてしまひ、華やかな燭が長い煙をわだかまらせてゐる。そのうちに鶺鴒鶺鴒などがなきたてて明星を消えさせようとしてゐる、じぶんはあなたと袂を解いてこれからかへらうとおもふ。』あなたは任地へいつたならば、どうぞ上は兵甲の數を減せられよ、つぎには農民が安泰になる樣にさせられよ。そのつぎにはいつまでもこの消渴をわづらうてゐるおやぢを念うてください、遠山のいただきまであなたの手紙をよこしてくださる樣におねがひします。』

哭韋大夫之晉

悽愴郇瑕邑。差池弱冠年。
丈人叨禮數。文律早周旋。
臺閣黃圖裏。簪裾紫蓋邊。
尊榮眞不忝。端雅獨翛然。
貢喜音容間。馮招疾病纏。
南過駭倉卒。北思悄聯綿。
鵬鳥長沙諱。犀牛蜀郡憐。
素車猶慟哭。寶劍欲高懸。
漢道中興盛。韋經亞相傳。
沖融標世業。磊落映時賢。
城府深朱夏。江湖渺霽天。
綺樓關樹頂。飛旆泛堂前。

韋大夫之晉を哭す

悽愴なり郇瑕の邑、差池す弱冠の年。
丈人禮數を叨りにす、文律早く周旋す。
臺閣黃圖の裏、簪裾紫蓋の邊。
尊榮眞に忝めず、端雅獨り翛然たり。』
貢喜音容間る、馮招疾病纏ふ。
南過倉卒たるに駭く、北思悄として聯綿たり。
鵬鳥長沙諱む、犀牛蜀郡憐む。
素車猶ほ慟哭す、寶劍高く懸けむと欲す。』
漢道中興盛なり、韋經亞相傳ふ。
沖融世業を標す、磊落時賢に映ず。』
城府朱夏深し、江湖霽天に渺たり。
綺樓樹頂に關ざす、飛旆堂前に泛ぶ。

帟幕旋風燕。笳簫咽暮蟬。
興殘虛白室。跡斷孝廉船。
童孺交遊盡。喧卑俗事牽。
老來多涕淚。情在强詩篇。
誰繼方隅理〔治〕。朝難將帥權。
春秋褒貶例。名器重雙全。

【字解】〔一〕韋大夫之晉　御史大夫韋之晉なり。韋之晉が事は前の「奉送韋中丞之晉赴湖南」詩にみえたり。すなはち韋は某年に蜀より湖南の衡州に赴任し、大曆四年二月に衡州より潭州に轉任し、潭州に於て卒したりとみゆるなり。朱注にいふ、之晉は湖南にありて御史大夫を加へらる、常衮、制詞を撰す、「文苑英華」にみゆ、と。〔二〕悽愴　ものがなしくいたまし。〔三〕郁瑕邑　郁瑕氏の地は「左傳」に見ゆ、淸一統志によれば其の地は今の山西平陽府岳陽縣にあり。是れ往晉韋と周旋の地を敍す。師氏の說にては郁瑕は韋の柩のかへらんとする地なりといへるも、據る所を知らず。〔四〕差池　鳥が羽をたがひちがひにする貌、韋と交はりしさまをいふ。楊注にはいふ、肩相隨ふ貌なりと。〔五〕弱冠年　二十か弱と曰ふ、冠すと「禮記」曲禮にみゆ。開元十九年に作者二十歲なり。〔六〕丈人刃禮數　丈人は尊者の稱、韋をさす。韋は蓋し作者よりよほどの年長者なりしならん、以て忘年の交たりしを知る。刃とは謙辭、禮數は種種の禮數を致せしをいふ。〔七〕文律　詩文の法則、語は文賦にみゆ。〔八〕周旋　たちまはる、つきあふこと。〔九〕憂閑廊廟といふの類、政府の要地をいふ。〔一〇〕黃圖　書に「三輔黃圖」あり、帝都の近地黃を以て畫く、これ蓋し帝都をさす。〔一一〕簪裾　衣冠をいふ、韋の著くる禮服。〔一二〕紫蓋　蓋し天子乘ぜらるる紫色の車蓋をいふ、槃蓋といふ類なるべし。仇注に衡山の紫蓋峰をさすとせるは當らず。これ往事を敍せるものにして遽に湖南の事を夾むべきに非ず。〔一三〕翩翩　韋の人品ただしくみやびやか。〔一四〕翛然　さらりとしたる貌。〔一五〕貢喜　韋の要位にあるをききて自ら喜ぶをいふ。作者かつて竊效貢公喜の句あり。漢の王陽貢禹親しくして王陽在レ位、貢公彈レ冠、の語あり。〔一六〕晉容間　韋の晉羣容貌と隔たる、韋はみやこに在ればなり。〔一七〕馮招　馮唐白首にして郎官に招かれし故事、自己晚年工部員外郎となりしをいふ。仇注に「馮招とは韋方に招用せらるるなり」といへるは誤なり。〔一八〕疾病繼　自己の病にとりつかれてゐること。〔一九〕南過　韋が湖南に任官し來りしをいふ。〔二〇〕倉卒　にはか、あわただしきさま。〔二一〕北思　北方を思ふ、韋の居る方をおもふ。〔二二〕悄聯綿　悄はしをれたるさま、聯綿はつづくさま。南過・北思の二句は倒插なり。〔二三〕鵩鳥長沙謫　賈誼長沙にながされ、鵩鳥舍に來るをみ、賦を作りやがて死す、韋の死をいふ。〔二四〕犀牛蜀郡憐　韋の舊任地蜀の人民、韋を憐むをいふ。秦の李氷、蜀郡太守となり、五の犀牛を作りて水の精を壓す、蜀の人之を墓ひ其の里を名づけて犀牛里となす。〔二五〕素車　後漢の范式が故事、式、字は巨卿、友人張劭が葬日に素車白馬にて號哭して往きて之を弔す。自己を式を以てたとふ。〔二六〕寶劍　吳の季札、徐君の墓に劍を掛けし故事。已にみゆ。季札を以て自己に比す。〔二七〕漢道　唐の治世の道をいふ。〔二八〕中興盛　代宗の朝をいふ。〔二九〕韋經亞相傳　韋は漢の韋賢、經は經學、亞相は賢が子玄成をさす、其の父の如く明經を以て相となる、故に亞相（つぎたる相）といふ。〔三〇〕沖融　和氣のたたふるさま。〔三一〕標世業　代代の業をたかくかかげる。〔三二〕磊落　不羣のさま。〔三三〕映時賢　當時の賢人のあひだに光をうつろはせてゐる。漢道以下の四句、朱注には韋之晉によき子あるをいふといへり。愚は之晉がその父業をつぎたるをいひしものならんと考ふ。〔三四〕城府　潭州の城府。〔三五〕深朱夏　深は夏のさかりなるをいふ、朱は夏の色。〔三六〕江湖　ひろく南地をいふ。〔三七〕闊　とさす。〔三八〕飛旐　旐は銘旌、生前の名をかきしはた。〔三九〕泛　浮動のさま、風にひるがへるをいふか。〔四〇〕虛室　韋のしづかな室、「莊子」に、虛室生レ白吉祥止、とあり。方に張るもの。〔四一〕旋風燕　風をうけた燕がめぐる。〔四二〕帟幕　帟は小幕、上已にみゆ。〔四三〕孝廉船　劉悛が張盛の船を求めし故事、已にみゆ。韋必ず生前作者を舟中に訪ひしことありしならん。劉を韋に、張を自己に比す。〔四四〕童孺　こども、二十歲のころ以前にわたりていふ。〔四五〕喧卑　俗事牽　方隅理（治）地方の治安。〔四六〕朝難　朝廷が選任をかたしとする、韋につぐ人物なきなり。〔四七〕將帥權　韋は湖南都團練・守捉觀察處置等使た

り、故に將帥の權といふ。【五〇】春秋　孔子の「春秋」。【五一】褒貶例　書法を以て一字のつかひかたにより史上の人物をほめたりおとしたりする例。【五二】名器重雙全　「左傳」成公二年に、惟名與器、不可以假人、とあり、これは名器二字の出典たるのみ、ここにては名は物の名、器はその實をいふ、たとへば觀察使・潭州刺史といふはその官職の名なり、その名ありて之にそふだけの人物たる實ある、これ器なり。雙全は名と器と二つながら完全なること。

【題義】御史大夫・湖南觀察使・潭州刺史韋之晉の死を哭した詩。大曆四年夏、潭州（長沙）にての作。

【詩意】郇瑕の邑のことをおもふとじつにものがなしくなる。むかし二十歳ばかりのころ、あそこで君とまじはつたことがある。あのころ丈人はじぶんにみだりに禮數を加へられた、さうして詩文の規則の世界に早くもたちまはりをした。それからあなたは帝都に於て臺閣に居られ、紫蓋のほとりに簪裾のすがたをしてをられた。さやうに尊榮の地位に居られても似つかはしくてすこしもその地位をはづかしめず、さらりとして獨り端雅なる品位をたもつてをられた。』　じぶんはあなたが要位に居られると貢禹の樣に喜んだが、あなたの音容とはへだたつてをり、馮唐の樣に晩年に官途に招かれたものの病氣につきまとはれた。いつもしよんぼりとあなたの居らるる北の方を思ひつづけてゐたところ、あなたは急にこの湖南の南方へおいでになつたときはいかにそのにはかなのに駭いたであらう。ところでこの南地であなたはおなくなりになつた。長沙では鵩鳥は諱み物である。あなたの沒後蜀郡ではなほ犀牛をみてはそれをあはれみしたうてをる。じぶんは素車を以て范式の如くなほ慟哭をなし、季札の樣にあなたのお墓に劍を高く懸けたいとかんがへてゐる。』　漢道が中興して盛であつた樣に今の御代は盛であるが、このとき丞相韋賢の經學はつぎの丞相たりし子の玄成が傳へた。さうして和氣沖融として代代の業を高くかかげ、その磊落不羣のさまはいまも世の賢人のあひだにかがやいてゐる。あなたは玄成の如きものであつた。（朱注によれば「あなたは亡くなられてもお子がりつぱになつてゐる。」）』　いま城府には夏がふかくなつた、江湖には霽れた天がはるかにつづいてゐる。このときあなたのすみなれた綺樓は樹木の頂にとざされ、飛びゆく銘旌は堂前の舟の中に浮動してゐる。樓の帟幕の懸つてゐるあたりには風を受けた燕がとびめぐり、笳簫の音につれ日暮の蟬までが咽ぶ樣にないてゐる。虛白の室にはありし世の興が盡きずに殘り、孝廉の船にはあなたの足あとはたえてしまつた。』　じぶんはこどものをりからの交遊はなくなつた。俗事にひかれて喧卑なことのみが多い。年老いてからは涙もろく、あなたに對する情はやむにやまれぬからかやうに無理にも詩篇をつづつた。あなたが亡くなられたならばだれがこの地方の治安を繼いでするか、朝廷でも將帥の權をだれに授くべきかについてなやんでをられる。「春秋」の褒貶の例を以てすればどうしても名と器とをふたつかねそなへた人を貴ぶのである、さういふ人物を任命しなければならぬ。』

江閣臥病、走筆寄呈崔・盧兩侍御

江閣病に臥し、筆を走らせて崔・盧の兩侍御に寄呈す

客子庖廚薄。江樓枕席清。
衰年病秪瘦。長夏想爲情。
滑憶雕胡飯。香聞錦帶羹。
溜匙兼煖腹。誰欲致盃罌。

【字解】〔一〕江閣　湘江のほとりの閣、潭州にての寓居とみゆ。〔二〕崔盧兩侍御　崔は崔大渙、盧は盧十四弟なり。〔三〕客子　自己をいふ。〔四〕庖廚薄　庖廚は臺所、薄は物乏しきをいふ。〔五〕江樓　卽ち題の江閣。〔六〕枕席清　清は清涼、すずしきこと。〔七〕想爲情　仇注にいふ、爲情とは用情と云はんがごとし、と。こちらのために心をくばつてくれること。〔八〕滑　飯のなめらかなこと。〔九〕雕胡　まこも。〔一〇〕錦帶　蓴菜のこと。〔一一〕溜匙　さじにすべること、前に飯米のことをのべし詩に、正想滑溜匙、とありたり。ここは飯と蓴羹と兩方をうけていへり。〔一二〕煖腹　次の酒のことを先だつていへり。〔一三〕致盃罌　致とはこちらへよこしてくれること、罌は「かめ」、酒をいるるなり。

【題義】江邊の閣で病に臥して、筆を走らせて崔侍御渙と盧十四侍御とへやつて、たべものと酒とをねだつた詩。大曆四年秋、潭州にての作なるべし。

【詩意】江邊の樓にねてゐると枕や席のあたりがすずしいが、旅客たるじぶんは臺所が物に乏しい。老衰の年になつて病んで痩せるばかりだ。ひながの夏にだれかじぶんのためにこころをくばつてくれるものはゐないかなどと想像する。雕胡のご飯があつたらさぞ滑かだらう、蓴菜の羹があつたらさぞ香ばしいだらうと鼻をうごめかす。匙のうへにつるりとすべるもののあるうへさらに腹のなかをあたためるものもほしい、酒がめや盃をこちらへよこしてくれようとおもふ人はゐぬか。

【附錄】

潭州留別杜員外院長

潭州にて杜員外院長に留別す

江畔長沙驛。相逢纜客船。
大名詩獨步。小郡海西偏。
地濕愁飛鵬。天炎畏跕鳶。
去留俱失意。把臂共潸然。

江畔長沙の驛、相逢ひて客船を纜にす。
大名詩獨步、小郡海の西偏。
地濕ひて飛鵬を愁ふ、天炎にして跕鳶を畏る。
去留俱に失意、臂を把りて共に潸然たり。

韋　迢

潭州送韋員外迢牧韶州

炎海韶州牧。風流漢署郎。

潭州にて韋員外迢が韶州に牧たるを送る
炎海韶州の牧、風流漢署の郎。

分符先令望。同舍有輝光。　分符先づ令望あり、同舍も輝光有り。
白首多年疾。秋天昨夜涼。　白首多年疾む、秋天昨夜涼し。
洞庭無過雁。書疏莫相忘。　洞庭過雁無し、書疏相忘るること莫かれ。

【字解】〔一〕韋員外迢　員外は韋も亦た員外郎なるによりていふ。韋迢は嶺南節度の行軍司馬に終るといふ、このときはなほ司馬たらず。〔二〕牧韶州　牧は牧民の官、刺史となるをいふ、韶州は廣東にあり。〔三〕炎海　あついうみ、南海をいふ。〔四〕韶州牧韋迢をいふ。〔五〕漢署郎　韋をいふ。〔六〕分符　刺史に任ぜらるるをいふ、已にみゆ。〔七〕令望　よき人望。〔八〕同舍　郎官の故事、漢の直不疑のはなし、已にみゆ。これは自己をさす、作者亦た郎官たり。〔九〕輝光　謂はゆる光榮をいふ。〔一〇〕白首　自己をいふ。〔一一〕昨夜涼　仇注、この句により、前夜は立秋なりしなるべしといへり、果して然るや否。〔一二〕無過雁　衡山に回雁峰あり、雁は峰より以南にはゆかずといはる。こちらからやる手紙なきをいふ。〔一三〕書疏　疏も亦た手紙なり、陶淵明に、與二子儼等一疏あり。

【題義】潭州で員外郎韋迢が韶州の刺史となつてゆくのを送つた詩。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】君は炎海地方の韶州の牧民官で、風流な漢（唐）の役所の郎官だ。君は先づ令望があつたので符を分つて刺史に任ぜられた、同舍の郎たる自分もおかげで光榮を有する。じぶんは白首でながねん病んでゐるが、ゆうべから秋の天もすずしくなつた。洞庭のこちらから君の方へゆく雁は無いが、君の方からは手紙をくれてこちらを忘れぬ様にしてもらひたい。

【附錄】

早發湘潭寄杜員外院長　韋迢

早に湘潭を發し、杜員外院長に寄す

北風昨夜雨。江上早來涼。　北風昨夜雨る、江上早來涼し。
楚岫千峯翠。湘潭一葉黃。　楚岫千峯翠に、湘潭一葉黃なり。
故人湖外客。白首尚爲郎。　故人湖外の客、白首尚ほ郎と爲る。
相憶無南雁。何時有報章。　相憶ふも南雁無し、何の時か報章有らむ。

酬韋韶州見寄　韋韶州が寄せらるるに酬ゆ

養拙江湖外。朝廷記憶疎。　拙を養ふ江湖の外、朝廷記憶疎なり。
深慚長者轍。重得故人書。　深く慚づ長者の轍、重ねて得故人の書。
白髮絲難理。新詩錦不如。　白髮絲理め難し、新詩錦も如かず。
雖無南過雁。看取北來魚。　南過の雁無しと雖も、看取せよ北來の魚。

【字解】〔一〕韋韶州　韶州刺史韋迢。〔二〕見寄　詩を寄せられた。韋の詩は前篇「北風昨夜雨」これ。〔三〕長者轍　陳平多轍の故事、已にみゆ、長者は韋をさす。〔四〕故人　韋をさす。〔五〕新詩　韋の詩。〔六〕北來魚　湘水は北流す、故に魚に托して書を寄すべし。

【題義】韶州刺史韋迢が詩をよこしたのに返答した詩。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】自分は拙きもちまへを江湖の外で養うてをり、朝廷から記憶せられることもうとくなつてをる。そこへ長者たる君が車轍をつけてたづねてくれたのには深くはぢいる、そのうへにふるなじみたる君の手紙までもらつた。自分の白髮の絲はみだれて理めがたい、君の新詩は錦もおよばぬほどうつくしい。「南へ過ぎる雁が無ければ返事はくれられぬ」と君はいふが、南する雁はなくとも北へ來る魚はあるだらう。その魚を氣をつけて看てそれに手紙をあづけてよこしてくれたまへ。

樓上

天地空搔首。頻抽白玉簪。
皇輿三極北。身事五湖南。
戀闕勞肝肺。掄材愧杞枏。
亂離難自救。終是老湘潭。

【字解】〔一〕樓上　樓は「江閣臥病」詩の江樓なるべし。〔二〕抽簪　かんざしをぬくは首をかくため、朝服用ふる所なきなり。〔三〕皇輿　君ののりたまふかご、こし。浦注に云ふ、皇輿は京師を指す、と。皇輿の語楚辭にみゆ、必ずしも京師ととくに及ばず。〔四〕三極　仇注にいふ、地に四極あり、皇輿は東西南の北に在り、故に三極といふ、繫辭の三極と同じからず、と。「易」の繫辭の三極は天地人をいへり、こことは無關係なり。〔五〕身事　一身謀生の事なり。〔六〕五湖　史記索隱に、具區・洮滆・彭蠡・青草・洞庭を五湖とす。〔七〕戀闕　長安の宮門をこふ。〔八〕掄材　材木をえらぶ。〔九〕杞枏　杞はかはやなぎ、枏はくすの類、蓋し二者は以て小大の材をいふ。〔一〇〕湘潭　湘江のふちをいふ。

【題義】樓上にての感をのぶ。大曆四年秋、潭州にての作ならん。

【詩意】自分は天地の間にあつて頻りに白玉の簪をぬいて首を搔く。吾が皇のおのりものは東西南三極の北にあり、吾が一身の生事は五湖の南に於て謀らねばならなくなつてゐる。宮闕を戀ふために肺肝を勞してはゐるが、人材をえらぶとなると自分は杞枏の小大の材いづれにも及ばぬのではぢいる。亂離にであうて自己ひとりさへ救ふことができぬのであるから、結局湘水の潭で老いてしまふのであらう。

遠遊

江闊浮高棟。雲長出斷山。
塵沙連越嶲。風雨暗荆蠻。

雁矯銜蘆内。猿啼失木間。　雁は矯る銜蘆の内、猿は啼く失木の間。
敝裘蘇季子。歴國未知還。　敝裘蘇季子、歴國未だ還るを知らず。

【字解】〔一〕遠遊　遠くあそぶ。〔三〕江閣浮高棟　江ひろくして水面に高きむなぎのかげ浮ぶ。此の句によりて仇氏は本篇を潭州江閣の作とせり。黄鶴は荆南の作とし、浦氏は出峽時の作ならんとせり。今仇氏に依る。〔三〕斷山　きつたての山。〔四〕越嶲　四川寧遠府西昌縣。〔五〕荆蠻　荆州の蠻。〔六〕雁矯　矯はあがるなり。〔七〕銜蘆内　「淮南子」に、雁從レ風而飛、以愛ニ氣力一銜レ蘆而翔、以避ニ弋繳一、とみゆ。危險にそなへつつ飛ぶなり。〔八〕失木　木からはなれる、「淮南子」に、猿狖失レ木而擒ニ於狐狸一、非ニ其處一也、とあり。〔九〕蘇季子　蘇秦、已にみゆ。〔一〇〕歴國　蘇秦遊說して諸國をへしこと。

【題義】遠遊の感をのぶ。仇氏によれば大曆四年、潭州江閣にての作。

【詩意】江水がひろくて、高い棟の影が水面にういてゐる。雲が長くつらなつて、その間からきつたての山があらはれてゐる。塵沙は越嶲の地方まで連り、風雨は荆蠻の方までかけて暗くなつてゐる。このとき雁は蘆をくはへながら用心してうへへあがり、猿は木からはなれながら啼いてゐる。(自分はその雁や猿の樣である)。敝れた裘をきた蘇秦(ともいふべき自分)はいまだに諸國をへめぐつて故郷へかへることを知らずにゐる。

千秋節有感二首

自罷千秋節。頻傷八月來。　千秋節感有り　二首
先朝常宴會。壯觀已塵埃。
鳳紀編生日。龍池塹劫灰。
湘川新涕淚。秦樹遠樓臺。
寶鏡羣臣得。金吾萬國迴。
衢尊不重飲。白首獨餘哀。

【字解】〔一〕千秋節　皇朝の天長節なり。「舊唐書」玄宗紀にいふ、開元十七年八月癸亥、上(玄宗)降誕日を以て百僚を花萼樓下に宴す、百僚表して請ふ、毎年八月十五日を千秋節となさんと、王公以下寶鏡及び承露囊を獻ず。天下諸州にはみな令して宴樂し、休暇三日ならしむ、仍つて繼ぎて令となす、と。「通鑑」にいふ、又社日を移して千秋節に就かしむ、と。〔二〕先朝　玄宗の朝をいふ。〔三〕壯觀　次篇に敍したる如きさかんなるみもの。〔四〕鳳紀　曆をいふ、曆は古く鳳鳥氏の紀する所といはる、已にみゆ、ここは帝紀をいふ。〔五〕編生日　帝紀のなかに天子の御誕生日をあみこむ。〔六〕龍池　玄宗の王子たりし日の住宅の池、興慶宮の池なり、已にみゆ、この宮の勤政・花萼諸樓下にて宴行はる。〔七〕塹劫灰　塹は「ほり」なり、ここは池がほりの如くにうづまりて小になりしをいふが如し、劫灰は昆明池の黑灰のこと、已にみゆ。〔八〕湘川　湘江、作者の居る所。〔九〕秦樹　長安の樹木。〔一〇〕寶鏡羣臣得　往事をいふ、玄宗千秋節を以て四品以上に金鏡珠囊を賜ふ、又賜羣臣鏡詩あり。〔一一〕金吾萬國迴　金吾は已にみゆ、非常に備ふる警察官なり。ここは玄宗が羽林軍を改編してつくりし龍武軍、即ち禁軍をさす。萬國迴とは禁軍散じて萬國に回り去り、復た往日の如く侍衛するものなきをいふ。〔一二〕衢尊　街路に出してある衆人接待の酒樽、「淮南子」に、聖人之道、其猶中レ衢而致レ樽耶、過者斟酌、多少不レ同、而各得ニ其所一宜、とみゆ。當時千秋節に必ず此の習俗ありしなるべし。

【題義】千秋節の日にあひて感をのぶ。大暦四年八月、潭州にての作。

【詩意】千秋節が罷められてから、自分は八月のくるのをしきりに傷ましくおもふ。先朝のころはいつもこのとき宴會があつたものだが、あのころの壯觀はもはや塵埃に化してしまつた。御誕生日はただ帝紀のなかに編入せられ、龍池は劫灰にうづまつてほりのごとくなつてしまつた。みやこの樓臺は樹色遠く、湘水のほとりでは涕淚新なるものがある。むかしは此の日に羣臣は寶鏡を頂戴したが、いまは禁衛の軍も散じて諸國へかへつてしまつた。あのころ飲んだ大道の接待酒は二度と飲むことがならず、白髮あたまをかかへて獨りかなしみきれぬあはれをのこしてをるのである。

〔一〕

御氣雲樓敞。含風綵仗高。
仙人張内樂。王母獻宮桃。
羅韈紅蕖艷。金羈白雪毛。
舞階銜壽酒。走索背秋毫。
聖主他年貴。邊心此日勞。
桂江流向北。滿眼送波濤。

〔一〕

氣に御すれば雲樓敞かなり、風を含みて綵仗高し。
仙人内樂を張る、王母宮桃を獻ず。
羅韈紅蕖艷に、金羈白雪の毛あり。
舞階に壽酒を銜む、走索秋毫に背す。
聖主他年貴し、邊心此の日勞す。
桂江流れて北に向ふ、滿眼波濤を送る。

【字解】〔一〕御氣　天子高虚の氣中に進御せらるるをいふ。〔二〕雲樓敞　雲樓は樓高く雲中にあるなり、敞はひろくあきらかなるをいふ。〔三〕含風　含の主語は綵仗。〔四〕綵仗　いろとりどりのはたさしもの。〔五〕仙人　天子をいふ。〔六〕張内樂　宮廷の音樂を設け奏す。〔七〕王母　西王母、作者の慣用として楊貴妃をさす。〔八〕獻宮桃　西王母が侍女に命じて漢の武帝に桃を獻ぜしめしこと「漢武内傳」にみゆ。今借り用ふ。〔九〕羅韈四句　四句つづけてみるべし、羅韈の句は走索の句へかかり、金羈の句は舞階の句へかかる。羅韈は婦人のはくうすぎぬのたび。〔一〇〕紅蕖艷　くれなゐの蓮の花のごとくつややか、靴のさまをいふ、齊の東昏侯の潘妃の步步金蓮を生ずといふ類なり。黄生が注に、後人詠弓足者、妍雅無及此語、といへるが、當時弓足（後世の纏足、足に物をまとひて足の生長を妨ぐる習俗）ありしやは明かならず。〔一一〕金羈　黄金を飾りしきづな。〔一二〕白雪毛　白き毛、白馬をいふ。〔一三〕舞階　舞ひのきざはし、馬を舞はすこと已に「舞馬」の詩にみゆ。〔一四〕銜壽酒　馬が壽を獻ずる酒杯を口にくはへる。〔一五〕走索　つなのうへを走る、つなわたりの藝をいふ、婦人が之を爲す。〔一六〕背秋毫　「通典」の注に、舞絙（つなわたり）は、兩妓女各〻一頭上より對舞し行きて繩上に於て相逢ひ、肩を比するも傾かずとみゆ。以て其の狀を知るべし。仇注に、此言兩人背走索上、不爽秋毫也、とあり、背は背行背走なり、背をむけて兩人反對の方向にゆくをいふ、秋毫を解して「秋毫をたがはず」といふは無理なり、秋毫とは索のほそきことを形容していひしものなり。〔一七〕聖主　天子、玄宗。〔一八〕他年貴　他年は往年、貴は尊貴。〔一九〕邊心　邊境になる自己の心。〔二〇〕此日　千秋節日をさす。〔二一〕桂江　桂林より流れいづる江、湘水をいふ。〔二二〕滿眼送波濤　全眼力を以て北向する波濤を見送るをいふ。北は長安の方位なり。

【詩意】雲樓の敞かなるところ、天子は虚氣のうちに進御あそばされた、ほとりには風を含んで綵仗が高くたてつらねられる。仙人は内廷の音樂を設けられ、王母の仙女は桃をたてまつる。羅襪をつけた蓮花のごとく艷な足を以て、女人が秋毫の樣にほそい繩のうへを二人で背向きにつなわたりする。白雪の樣な毛をして黄金の羈をつけた馬が舞階にのぼつて獻壽の盃を口にくはへる。御誕生日にこん

な催しをあそばされた聖天子は往年に於てじつに尊貴なものでおはした、(それといまとはどうだ、だから)をりもをりけふのこの日にであうてはじぶんのこのゐなかにゐる心は苦勞でならぬ。湘水をながめると北のかた長安に向うて流れてゐる、それでじぶんは全眼力をつくして江上の波濤を見送るのである。

奉贈盧五丈參謀琚

盧五丈參謀琚に贈り奉る

恭惟同自出。妙選異高標。
入幕孫楚。披襟得鄭僑。
丈人藉才地。門閥冠雲霄。
老矣逢迎拙。相於契託饒。
賜錢傾府待。爭米駐船遙。
隣好艱難薄。甿心杼柚焦。
客星空伴使。寒水不成潮。

【原注】時丈人使自江陵。在長沙待恩旨。先支俸錢米。

【原注】時に丈人江陵より使し、長沙に在りて恩旨を待ち、先づ俸錢米を支す。

恭しく惟ふに自出を同じくす、妙選高標異なり。
入幕孫楚を知る、披襟鄭僑を得。
丈人才地に藉る、門閥雲霄に冠たり。
老矣逢迎拙なり、相於契託饒し。』
賜錢傾府待つ、爭米駐船遙なり。
隣好艱難に薄しとす、甿心杼柚に焦る。
客星空しく使に伴ふ、寒水潮を成さず。』
素髮乾垂領。銀章破在腰。
說詩能累夜。醉酒或連朝。
藻翰唯牽率。湖山合動搖。
時淸非造次。興盡卻蕭條。
天子多恩澤。蒼生轉寂寥。
休傳鹿是馬。莫信鵩如鴞。』
未解依依袂。還斟泛泛瓢。
流年疲蟋蟀。體物幸鷦鷯。
孤負滄洲願。誰云晩見招。』

素髮乾きて領に垂る、銀章破れて腰に在り。
說詩能く累夜、醉酒或は連朝。
藻翰唯だ牽率、湖山合に動搖すべし。
時の淸きは造次によるに非ず、興盡きて卻つて蕭條たり。
天子恩澤多し、蒼生轉た寂寥たり。
傳ふるを休めよ鹿是れ馬と、信ずる莫かれ鵩鴞の如しと。』
未だ解かず依依たる袂、還た斟まむ泛泛たる瓢。
流年蟋蟀に疲る、體物幸に鷦鷯。
孤負す滄洲の願、誰か云ふ晩に招かると。』

【字解】【一】盧五丈參謀琚　盧琚は姓名、五は排行、丈は丈人、參謀は行軍參謀、元帥府・副元帥府に屬し、軍中の機密に關預す。琚は江陵節度府の參謀なるべし。【二】先支俸錢米　支は支出する、俸錢米は江陵へ運ぶべき錢米の幾分かをいふ。俸は割合をいふ。【三】同自出　自りて出づる所を同じくす、自出の語は「左傳」に出づ、已にみゆ。盧琚の母、作者の母、竝に崔氏なり、故に自出を同じくすといふ。【四】妙選　すぐれたものとして選任せられしこと。【五】高標　高きめじるし。【六】入幕　幕府に入る。【七】孫楚　楚、石苞が揚州の都督たりしときその參軍となる、已にみゆ、以て琚に比す。【八】披襟　えりをひらく、心おきなきこと。【九】

鄭僑　鄭の子產なり、吳の季札、鄭に聘し、子產と交る、之に縞帶を與ふ、子產は紵衣を贈る、以て琚に比す、仇注にては子產が晉に聘したる點を琚が江陵より長沙に使したる點に比すととく、今取らず。【一〇】丈人　琚をさす。【一一】藉才地　才地は人才の生すべき門地、才地に藉るとは貴族の出なるをいふ。【一二】門閥　積功、積勞を伐といふ、伐あるものは之を表彰するためその門に特別の制を設けしむ、之を閥といふ、唐の六品以上の烏頭大門、又は表揭、後世の櫺星門の類は是なり。【一三】冠雲霄　上述の門が雲霄のうへに摹を拔きて立つ。【一四】老矣逢迎拙　自己をいふ、逢迎は他人を迎へること。【一五】相於契託饒　相於は相與の如し、親交するをいふ、契託饒とは盧琚と契り之に依託する所多きなり。【一六】賜錢傾府待　賜錢は恩賜の錢、傾府待の府は楊注に長沙府をいふとす、之に從ふ。傾府待とは長沙府がすべて待つなり。【一七】爭米駐船遙　爭米は府民賜米を得んと爭ふなり、駐船は蓋し盧の坐乘する所の船にして現に長沙にとどまるものをいふ。【一八】隣好艱難薄　「艱難に隣好薄しとす」の意、甿心をいふ、隣好とは江陵府が長沙に對する好誼。【一九】甿心杼柚焦　「杼柚に甿心焦る」の意、杼柚は「歲晏行」にみゆ、梭と機の卷き軸と、杼柚空しの意をとる。甿は田野の民、農民耕織を務むるも生活安からざるにより恩賜の錢米を得たしとあせるなり。【二〇】客星　自己をさす。【二一】空伴使　使とは使者盧琚をさす、空伴とは琚をして長沙民のために錢米を十分に支出せしめ得ればいかひあるも、十分には支出せしめ得るに至らざるを以て空しく伴ふといふ。【二二】寒水不成潮　實景とたとへとを兼ねていふ、秋冬の水が寒水なり、秋冬には江湖の水涸れて少し、故に潮を成す能はず、錢米を小量に支給しても燒け石に水の樣なものなることをかくいへり。【二三】素髮二句　自己をいふ、素髮は白髮。【二四】乾垂領　水分なくなりてえりに垂れさがる。【二五】銀章　銀魚袋をいふ、作者の慣用語。【二六】說詩二句　彼我兩者につきていふ。【二七】藻翰唯牽率・湖山合動搖　作者自ら其の文藻を誇るととくものあり。傲慢不遜といふべし。盧の文藻を稱揚すとくものあり、湖山の句は李白の興酣落レ筆搖二五嶽一、といふの類なりとす。それならば猶ほ可なるべし。鄙見は兩說に異なり。藻翰の句は自己につきていひ、湖山の句は長沙の治態につきていひしものかとおもはる。藻翰はあやある文筆をいふ、牽率とはよハ加減にその場のまにあはせにするをいふ、湖山の句は其の牽率にする原因をいふ、湖山は長沙の湖と山となり、動搖とは治安が保てずして騷亂のために動搖するをいふ。【二八】時清　平和をいふ。【二九】非造次　造次に得べきに非ざるをいふ、造次はあわただしき貌。【三〇】興盡　治態上逸の如くなるによりて詩酒の興も盡くるなり。【三一】蕭條　意中のさびしきさま。【三二】休傳鹿是馬・莫信鵩如鴞　此の二句も寓意隱微にして探りがたし。鹿を指して馬となすは秦の趙高が二世を愚にせし故事、鵩如鴞は賈誼が鵩賦序中の語。仇注には鹿是馬は中央の權臣魚朝恩の如きを指し、鵩如鴞は湖南兵馬使臧玠（玠は明年四月に至りて亂をなす）の如きを指すとなす。蔡夢弼曰く、鹿是馬は天子聰明なるを言ひ、鵩如鴞は遷謫を愁ふる母かれと言ふなりと。楊倫は曰く、鹿是馬は虛詞を逞くして上を罔みする無かれといふなり、鵩如鴞は外吏に任じて民を虐する母かれといふなりと。殆んど定解なし、今暫く仇注に依る。【三三】未解依依袂　解袂は已にみゆ、依依はよりそふさま、慕はしきさま。【三四】泛泛瓢　泛泛と酒をうかべたひさご。【三五】疲蟋蟀　蟋蟀をきくにつかれしこと、蟋蟀をきくごとに歲暮れて一年うつる。「詩」に、蟋蟀在レ堂、歲聿其暮、とみゆ。【三六】體物　物を吾が體とする、物にあやかるをいふ。【三七】鷦鷯　みそさざい、鷦鷯巢レ林、不レ過二一枝一、と「莊子」にみゆ。【三八】滄洲　仙境、已にみゆ。【三九】晚見招　馮唐白首にして招かれて郎官とせらる、以て自ら比す。

【題義】江陵節度の參謀盧琚に贈つた詩。琚はこのとき江陵から長沙へ使者に來て、許可を得ぬさきに江陵へ運ぶ錢米の幾分かを支出して、敕許を待つてゐた。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】恭しくおもふにあなたと自分とはその由つて出で來つた系統は同一であるが、あなたは英物として參謀にえらばれ他と異つて高くめじるしをたててをられる。あなたにあうて幕府にはひつた孫楚を知り、胸襟をひらいて鄭の子產の樣な人に接することができた。丈人は貴族の地を基とし、門閥は高く雲霄のうへにある。じぶんは年老いて人を迎へることに拙いが、あなたとは親しくお交りをしていろいろと契りおたのみすることも多いのであるゞ』いま吾が長沙府は府を擧げて恩賜の錢を待つてをり、あなたが江上はるかに座船をとどめられるをりに爭うて御賜の米を得ようとしてをるのであ

る。農民は耕織をしても貧困なので一刻も早くとあせつて、この艱難な時節に江陵府は隣に對する好が薄いのだとまでかんがへてゐる。それにじぶんはあなたのお側にゐながら錢米の支出を十分なさしめ得ぬのはむだにおそばにゐる樣なもので、結果は秋涸れの水では潮を成せぬ樣なものである。』じぶんは白髪がかわいてえりくびに垂れさがり、銀魚袋は破れて腰についてゐる。あなたといくばんもつづけて詩のおはなしをしたり、いくあさもつづけて酒に醉うたりするが、文筆はただまにあはせにとどまる、じぶんの心では騷亂が起つてこの地方の湖山が動きだすかとおもふ。（一説によれば、「あなたはまにあはせに詩をつくつても、湖山を動かすほどの才がある。」）時世が清く治まるといふことは率次にはできぬことである。これをおもふと詩酒の興もさめて心中かへつてさびしくなる。天子は多くおなさけを下されるが、人民はいよいよさびしくなる。「鹿が馬だ」なんどいふことをお傳へなさるな。鵬は鵬で鴞の樣な惡鳥である、そんなものを御信用になるな。』おなつかしい袂を分たぬうちは、またなみなみと酒をたたへた瓢をくみかはしませう。わたくしは年のうつりゆくあひだに蟋蟀をきくことに疲れてしまつた。幸に鷦鷯といふお手本があるからそれにあやかつてくらしてゐます。晩年に郎官に招かれたなどとだれがいふのか、むしろ自分は滄洲の仙境にでもゆきたくおもうてゐるのに、その願望にそむいてゐるのである。』

惜別行、送劉僕射判官

聞道南行市駿馬。
不限匹數軍中須。
襄陽幕府天下異。
主將儉省憂艱虞。
秖收壯健勝鐵甲。
豈因格鬬求龍駒。
而今西北自反胡。
騏驎蕩盡一匹無。
龍媒眞種在帝都。
子孫未落東南隅。
向非戎事備征伐。
君肯辛苦越江湖。

惜別行、劉僕射判官を送る

【字解】【一】劉僕射判官　劉の名は詳かならず、僕射は宰相より下ること一等、劉の主將梁崇義の幣ぶる官名、判官は僕射のもとに於ける判官。【二】南行　襄陽より南のかた長沙に來るをいふ。【三】襄陽幕府　襄陽は湖北の襄陽府、當時は山南東道節度使の治所なり。【四】主將　劉の主としてつかふる將、梁崇義をいふ。【五】儉省　儉約にしてむだをはぶく。【六】艱虞　世のなんぎしんぱいすべきこと。【七】壯健勝鐵甲　馬のつよくして鐵のよろひをつくるにたふるもの。【八】格鬬　うちたたかふ、私鬬をいふ。【九】龍駒　名馬。【一〇】自反胡　胡の反せしよりの意、胡は安・史をさす。【一一】騏驎　已にみゆ。【一二】龍

江湖凡馬多顧頡。
衣冠往往乘蹇驢。(一五)』
梁公富貴於身疎。(一六)
號令明白人安居。(一七)
俸錢時散士子盡。(一八)
府庫不爲驕豪虛。(一九)(一〇)
以茲報主寸心赤。
氣卻西戎回北狄。
羅網羣馬籍馬多。(二一)
意在驅除出金帛。(二二)』
劉侯奉使光推擇。(二四)(二五)
滔滔才略滄溟窄。
杜陵老翁秋繫船。(二六)

江湖の凡馬多く顧頡す、
衣冠往往蹇驢に乘る。』
梁公富貴身に於て疎なり、
號令明白にして人居に安んず。
俸錢時に士子に散じ盡くす、
府庫驕豪の爲に虛しからず。
茲の報主の寸心の赤きを以て、
氣西戎を卻けて北狄を回さむ。
羣馬を羅網して馬を籍すること多し、
意は驅除に在りて金帛を出す。』
劉侯奉使推擇を光らす、
滔滔たる才略滄溟窄し。
杜陵の老翁秋船を繫ぐ、

媒眞種　已にみゆ。【一四】子孫　龍媒の子や孫。【一五】東南隅　長沙地方。【一五】梁公　梁崇義なり。浦注にいふ、史を考ふるに、廣德の初、崇義は來瑱が襄陽に鎭するに從ふ。瑱誅せらるるや自立して留後となる、代宗討つこと能はず、因つて山南東道節度に拜す。のち德宗の建中二年に至り、つひに朝命を拒ぎしを以て李希烈がために誅せらる、と。蓋し正直の人物に非ず、作詩の時は或は名聲ありしものか。【一六】於　身疎　富貴をうとんずる。【一七】人安居　人民其の居處にやすんず。【一八】士子　わかもの。【一九】驕豪　おごり贅澤な生活。【二〇】虛　府庫のからになること。【二一】籍　馬　馬を自己の管轄にし帳簿に記入する。【二二】驅除　戎狄をおひやりのぞく。【二三】出金帛　金錢や帛をだして馬を購ふなり。【二四】劉侯　判官をさす。【二五】光推擇　梁公の推薦選擇に負かず光輝あらしめる。【二六】繫船　長沙につなぐをいふ。【二七】胡盧　ふくべ。【二八】九州　天下。【二九】重陽　陰曆九月九日の菊節句、作詩のこの時にあるを知るべし。【三〇】老夫　自己をさす。

扶病相識長沙驛。
强梳白髮提胡盧。(二七)
手把菊花路旁摘。
九州兵革浩茫茫。(二八)
三嘆聚散臨重陽。(二九)
當杯對客忍流涕。
不覺老夫神內傷。(三〇)』

病を扶けて相識る長沙驛。
强ひて白髮を梳りて胡盧を提げ、
手に把る菊花の路旁に摘めるを。
九州の兵革浩として茫茫たり、
聚散を三嘆して重陽に臨む。
杯に當り客に對して流涕を忍ぶ、
覺えず老夫神內に傷む。』

【題義】別れを惜んだうた。梁僕射の判官たる劉某を送れるもの。大曆四年九月、潭州にての作。集外詩なり。

【詩意】聞けば君は南にでかけて駿馬を買ふ、その馬は軍中で入用のもので匹數を限らぬものである。と。襄陽の幕府は天下の他の幕府とはちがひ、その主將は儉約で世のなんぎを憂へてをられる。このたびの馬買ひにもただ壯健の馬で鐵甲をきてはたらけるものだけをとりあつめるとのことだ、私の鬪爭のためになど名馬を求めるのではない。』西北で胡がそむいてからはいまは騏驎の駿馬はすつかりなくなつて一匹も無くなつた。龍媒天馬の眞の種は帝都にあつて、その子孫はまだ東南の隅には落ち

てこぬ。さきに軍事のため、征伐の用に備へるためでなかつたら、よもや君は辛苦して江湖を越えてはこなかつたであらう。江湖の地では凡馬は多くつかれてしまひ、衣冠の官員は馬にはのれず、びつこひきの驢馬に乘つてゐる。』君の主將梁公（崇義）は一身に於ては富貴をうとんじ、號令は明白で人民はその居に安んじてゐる。梁公は時として俸錢をすつかりわかいものに散じてやる、その府庫は自己の豪奢のためにはからにはならぬ。梁公はこの天子に報いたてまつる赤きまごころを以て、その意氣は西戎をしりぞけ、北狄をおひかへしてしまふつもりなのであらう。だから羣馬を網羅して多くの馬を簿籍にいれる、その意は戎狄を驅除するに在るから金帛を出されるのである。』劉君はこの梁公の使命を奉じてその推擇にそむかず却つてそれを光輝あらしめる、君の才略は滔滔としてひろき海をもせましとするおもむきがある。杜陵のおやぢたる自分は秋この地に船をつないでゐたので、病軀を扶けられながら長沙驛で君としりあうた。じぶんはむりに白髮をくしけづつてふくべを提げ、路ばたで摘んだ菊の花を手にとり、茫茫たる九州の兵亂のうちに、人生聚散の常ならぬことを三嘆しながら重陽の節にのぞむ。このときお客たる君に對し酒杯に向うて涕をながすまいと我慢はするが、このおやぢは覺えず精神が內部で傷むのである。』

重送劉十弟判官

分源豕韋派。別浦雁賓秋。
年事推兄忝。人才覺弟優。
經過辨豐劍。意氣逐吳鈎。
垂翅徒衰老。先鞭不滯留。
本支淩歲晚。高義豁窮愁。
他日臨江待。長沙舊驛樓。

【字解】【一】重送　前篇に送詩あり、故に重といふ。【二】劉十弟判官　卽ち前篇「惜別行」の劉僕射判官なり、十は排行、弟は年少者。【三】分源豕韋派　「左傳」に、陶唐氏の後に豕韋氏・唐杜氏あり、又陶唐氏の後に劉累ありしことをいへり、故に劉氏も杜氏も同じ豕韋の派より源を分つといふ。卷二十一「敬寄族弟唐十八使君」詩を參看せよ。【四】別浦　支浦をいふ。【五】雁賓秋　雁の來賓する秋、來賓とは賓客のごとく來るなり。「禮記」月令に、季秋之月、鴻雁來賓、とみゆ。【六】年事　年がらに於ては。【七】推兄忝　兄として推さるることをかたじけなくす。【八】覺弟優　弟とは劉判官をさす。優はまさる。【九】經過　劉の居を訪ふをいふ。【一〇】豐劍　豐城の劍、雷煥が故事、已にみゆ。【一一】意氣　劉の意氣。【一二】逐吳鈎　逐の字俗用、追字の義、吳鈎は「後出塞」詩（卷四、三二八頁）をみよ。劍鈎みな劉を比す。【一三】垂翅　つばさをたれる、鳥の勢なきさま、語は「後漢書」馮異傳にみゆ。【一四】先鞭　祖逖が故事、已にみゆ。【一五】本支　本枝なり、本家と分家、杜劉の關係をいふ。【一六】淩歲晚　九月は已に歲のくれの方な

り。【一七】高義　劉の義の高きこと、或は劉より作者に厚き贈物などせしものか。【一八】鬱窮愁　困窮憂愁の念散ず。【一九】他日　異日、將來をいふ。【二〇】臨江　湘江にのぞんで。【二一】長沙舊驛樓　後日より今日をさして舊といふ、此の終りの臨江樓の語は謝靈運が族弟惠連に贈りし詩中の語を活用せり。

【題義】重ねて劉判官を送つた詩。前篇と同時、大曆四年秋、潭州にての作なるべし。

【詩意】君と自分とは豕韋氏の涙から源が分れてゐる。今江の支流の浦では雁がわたつてくる秋である。じぶんは年がらでは兄分に推されてゐるのはかたじけないが、才の方は弟がまさつてゐる樣におもはれる。』君のところへゆくと君が豐城の劍の如く紫氣斗牛を衝くことがわかる、君の意氣のするどいことは吳鈎の武器を追はんとする。自分は翅を垂れて徒らに老衰してゐるが、君は祖逖の樣にじぶんよりも先鞭をつけてこんな南方に滯留してゐる樣なことをせぬ。いま親類同士で歳のくれをすごし、君の義の高いおかげでこまりごとしんぱいごとがからりとはれた。じぶんは今別れても長沙のあひかはらずの驛樓で江にのぞみながら君と再會するのを待つてゐよう。』

杜少陵詩集　卷二十三

湖中〔南〕送敬十使君適廣陵

相見各頭白。其如離別何。
幾年一會面。今日復悲歌。』
少壯樂難得。歲寒心匪他。
氣纏霜匣滿。冰置玉壺多。
遭亂實漂泊。濟時曾琢磨。
形容吾較老。膽力爾誰過。』
秋晚嶽增翠。風高湖湧波。
騫騰訪知己。淮海莫蹉跎。』

【字解】【一】湖中　中は一に南に作る、南字まされり。湖南は洞庭湖の南、潭州（長沙）をいふ。【二】敬十使君　作者の「追酬

湖中〔南〕にて敬十使君が廣陵に適くを送る

相見れば各〻頭白なり、其れ離別を如何にせむ。
幾年一たび會面す、今日復た悲歌す。』
少壯樂得難し、歲寒心匪他なり。
氣は霜匣を纏ひて滿つ、冰は玉壺に置かるること多し。
亂に遭ひて實に漂泊す、濟時曾て琢磨す。
形容吾較〻老ゆ、膽力爾誰か過ぎむ。』
秋晚れて嶽翠を增す、風高くして湖波を湧かす。
騫騰知己を訪ふ、淮海蹉跎たること莫かれ。』

高蜀州人日詩」の序に、昭州敬使君超先あり、伍氏は敬十は敬超先をいふならんとせり。【三】廣陵　揚州なり。【四】歲寒　晚年をいふ。【五】心匪他　匪他とは兄弟の情の如くなるをいふ。「詩」に、豈伊異人、兄弟匪レ他、とみゆ。晉の盧諶が贈劉琨詩にこの匪他の二字を切りとりて兄弟の義として用ふ、曰く、綢繆委レ心、自同二匪他一、と。【六】氣　劍の紫氣。【七】霜匣　霜を帶びたるはこ、霜とは劍の色をいふ。【八】冰　心の淸きをたとふ、鮑照が樂府に、淸如二玉壺冰一、とみゆ。【九】琢磨　玉をみがくこと、嘗て共に論じあひしをいふ。【一〇】嶽　南嶽をいふ。【一一】湖　洞庭湖。【一二】鷙鷹　鳥や馬のあがること、敬の意氣壯なるをいふ。「浦注にこの二字を作者に屬せしめしは從ひがたし。【一三】訪知己　敬が其の知己を訪ふをいふ。【一四】淮海　廣陵をさす、淮水及び海のある處。【一五】蹉跎　つまづくさま。

【題義】湖南で敬超先が廣陵へゆくのを送つた詩。大曆四年の秋のくれ、潭州にての作。

【詩意】おたがひにであうてみるとどちらも白髮あたまになつてをるが、別れねばならぬとはどうしよう。なんねんめかにいちど面會したかとおもふと、けふはまた悲しい歌をうたはねばならぬ。」むかしわかかつたころの樂みは得られぬが、晚年の心もちはやはり兄弟同樣である。君は霜さへさむき匣のなかにいつぱいに紫の劍氣がまとうてゐるが如く、また玉壺のなかに淸き氷をたくさんいれてある如き人物だ。自分は亂にあうて漂白してゐるが、時世を濟ふためにかつては君とそのことについてみがきあうたものだ。形容は自分の方がすこしふけてゐるが、膽力はだれもおまへにまさるものはない。」秋がおそくなつて南嶽は翠をまし、風が高くて洞庭湖は波をわかしてゐる。このをりおまへは躍りあがつて知己をたづねにゆくが、淮海のあちらでつまづく樣なことをしないやうにしてもらひたい。」

晚秋長沙蔡五侍御飲筵、送二殷六參軍一歸レ澧(三)覲省(四)

晚秋長沙蔡五侍御が飲筵にて、殷六參軍が澧に歸り覲省するを送る

佳士欣相識。(五)慈顏望遠遊。(六)佳士相識を欣ぶ、慈顏遠遊を望む。
甘從投轄飲。(八)肯作致書郵。(九)甘んじて從ふ投轄の飲、肯て書郵を致すを作さむや。
高鳥黃雲暮。寒蟬碧樹秋。高鳥黃雲暮る、寒蟬碧樹秋なり。
湖南冬不レ雪。吾病得二淹留一。湖南冬雪らず、吾病みて淹留することを得。

【字解】【一】蔡五侍御　侍御史蔡某。【二】殷六參軍　參軍殷某。【三】澧　州の名、岳州府に屬す。【四】覲省　親にお目みえし、安否をとふ。【五】佳士　殷をさす。【六】慈顏　殷の母をいふ。【七】望遠遊　遠遊したるわが子を望む。【八】投轄飲　陳遵が故事、已にみゆ、蔡侍御の飲筵をいふ。【九】致書郵　「世說」に云ふ、殷羨、字は洪喬、豫章太守となる、都下の士人、羨に因りて書を致すもの百餘函、羨行きて石頭に次り、皆之を水中に棄てて曰く、沈むものは沈め、浮ぶものは浮べ、殷洪喬書郵を致すを爲す能はず、と。書郵を致すは手紙を先方へとどけるをいふ、作者前に「送侍御四舅之澧朗」詩あり、蓋し殷六に托してこの舅に書を致さんとするなり。同姓の故事を用ふ。

【題義】秋のくれに長沙に於て侍御史蔡某が酒席で參軍殷某が母御を見舞ふために澧州へ歸るのを送

つた詩。大暦四年秋晩、長沙にての作。

【詩意】自分はうれしくも殷侍御の様な佳士を識つた。君の母御は君が遠遊してをるのを待ちこがれてながめてをられる。自分は主人蔡侍御が陳遵の如く客の車轄を井に投じてまで酒を飲ませるのに平氣で從つて酒を飲む。殷君よ、君は自分のためにしひてでも澧州の方へ手紙をとどけてくれることはできまいか。いま鳥は高くとんで黄雲の色暮れんとし、寒蟬なきて碧樹も秋ならんとしてゐる。湖南は冬も雪がふらぬといふから、病める自分はここでひさしく滯留することができるであらう。

別張十三建封

張十三建封に別る

嘗讀唐實錄。國家草昧初。
嘗て唐の實錄を讀むに、國家草昧の初。

劉裴首建議。龍見尚躊躇。
劉裴首として議を建つ、龍見尚ほ躊躇す。

秦王撥亂姿。一劍總兵符。
秦王撥亂の姿、一劍兵符を總ぶ。

汾晉爲豐沛。暴隋竟滌除。
汾晉豐沛と爲る、暴隋竟に滌除せらる。

宗臣則廟食。後祀何疎蕪。
宗臣は則ち廟食す、後祀何ぞ疎蕪なる。

彭城英雄種。宜膺將相圖。
彭城の英雄の種は、宜しく將相の圖に膺るべし。

爾惟外曾孫。倜儻汗血駒。
爾ほ惟れ外曾孫なり、倜儻なり汗血の駒。

眼中萬少年。用意盡崎嶇。
眼中萬の少年、意を用ふる盡く崎嶇なり。

相逢長沙亭。乍問緒業餘。
相逢ふ長沙の亭、乍ち問ふ緒業の餘。

乃吾故人子。童丱聯居諸。
乃ち吾が故人の子、童丱居諸を聯ぬ。

揮手灑衰淚。仰看八尺軀。
手を揮ひて衰淚を灑ぐ、仰ぎ看る八尺の軀。

內外名家流。風神蕩江湖。
內外名家の流、風神江湖に蕩す。

范雲堪結友。嵇紹自不孤。
范雲友を結ぶに堪へたり、嵇紹自ら孤ならず。

擇材征南幕。潮落回鯨魚。
材を擇ぶ征南の幕、潮落ちて鯨魚回る。

載感賈生慟。復聞樂毅書。
載ち感ず賈生が慟、復た聞く樂毅が書。

主憂急盜賊。師老荒京都。
主憂へて盜賊急なり、師老いて京都荒る。

舊丘豈稅駕。大厦傾宜扶。
舊丘豈に駕を稅かむや、大厦傾宜しく扶くべし。

君臣各有分。管葛本時須。
君臣各分有り、管葛本時に須たる。

雖當霰雪嚴。未覺栝柏枯。
霰雪の嚴なるに當ると雖も、未だ覺えず栝柏の枯るるを。

高議雲臺(五八)に在(五九)り、嘶鳴(六〇)望天衢(六一)。　高議雲臺に在り、嘶鳴天衢を望む。
羽人(六二)掃(歸)碧海(六三)。功業(六四)竟何如。　羽人碧海に掃〔歸〕らば、功業竟に何如。

【字解】【一】張十三建封　「舊唐書」にいふ、大曆の初、道州刺史裴虬、建封を湖南觀察使韋之晉に薦む、之晉辟して參謀に署し、左清道兵曹參軍を授く、職を樂しまずして輒ち去る。後ち徐泗濠節度使となる、と。案するに韋之晉の潭州刺史・湖南觀察使たるは大曆四年二月にあり、この年夏、之晉卒し、七月崔瑞繼ぎ、五年四月に至りて臧玠の亂起りて瑞殺さる。本篇に、雖レ當二霰雪嚴一の句あり、譬喩のみならず、兼れて時令をいひしものならん、然らば本篇は四年冬の作にて、之晉が下に在るを樂しまざるに非ず、崔瑞が下にあるを樂しまずして去るとき別れしことをいへるものならん。【二】唐實錄　唐の天子の事實を書したる記錄。【三】草昧初　くさわけのはじめ。【四】劉・裴　劉文靜、裴寂。劉文靜傳に云ふ、文靜、大業の末、晉陽の令となる、晉陽の宮監裴寂と善し。文靜太宗を見、寂に謂つて曰く、唐公子は非常の人なり、と、因つてともに議を定めて兵を起す、と。「通鑑」に云ふ、大業中、高祖太原を鎮す、時に劉文靜晉陽の令となり、裴寂晉陽の宮監となる、天下盜起るを見、隋の必ず亡ぶるを知り、首として議を建て大事を舉げしむ、帝(高祖)猶ほ未だ允さず、秦王(太宗)之を贊す、遂に兵を汾晉に起す、と。【五】首建議　舉兵のことを建議せしこと、上にみゆ。【六】龍見　龍があらはれでる、姿を出して兵を起すこと、語は「易」乾卦にみゆ。【七】躊躇　ためらふ貌、高祖の志未だ決せざりしをいふ。【八】秦王　高祖の子李世民、後の太宗。【九】撥亂姿　亂世をなをさむる姿、語は公羊傳にみゆ。【一〇】總兵符　軍事のわりふを總べにぎる、兵權を執りしをいふ。【一一】汾晉　汾水、晉陽、山西太原の地方をいふ。唐の高祖太宗の擧兵の地。【一二】爲豐沛　豐沛は二地の名、漢の高祖劉邦が擧兵の地。【一三】暴隋　暴虐なる隋朝。【一四】滌除　その汚濁をそそぎのぞく。【一五】宗臣　國家が宗としたつとぶ臣、劉・裴をさす。【一六】廟食　宗廟に祀られて食をなす。【一七】後祀　劉・裴二人の子孫たる者の祭祀。【一八】疎蕪　うとんじられ、あるる、祀らるるもの無きをいふ。子孫ふるはざればなり。【一九】彭城英雄種　英雄は劉文靜をさす、種はたね、英雄種とは文靜の子孫たるものをいふ、文靜傳にいふ、文靜自ら言ふ、系は彭城より出づ、と、世〻京兆の功に居る、父韶は隋に仕へて戰死し、開府儀同三司を贈らる。【二〇】膺將相圖　文武の謀圖の任にあたるをいふ。【二一】爾　汝、建封をさす。【二二】外曾孫　文靜の女が張氏へ嫁してできた「ひこ」まご。【二三】倜儻　不羈の才をいふ。【二四】汗血駒　血を汗する名馬の子。【二五】眼中　作者の眼中。【二六】萬少年　萬は多をいふ。【二七】用意　こころの用ひかた。【二八】崎嶇　山路のでこぼこのさま、ひねくれてゐるをいふ。【二九】長沙亭　亭は驛亭。【三〇】乍問　乍はたちまち。【三一】緒業餘　仇氏いふ、世緒家業。【三二】故人子　故人は舊知の人、建封が父玠をさす、朱注にいふ、作者の父閑、兗州司馬たり、作者閑を訪ひしとき張玠と同遊し、建封も相從ひしなるべしと。【三三】童丱　丱はちごまげ、つのがみ、童の髮形なり。【三四】聯居諸　居諸は助字、日月をさす、「詩」に、日居月諸とあり、居諸を以て日月の意を代表せしむ。聯とはともにするの意。【三五】揮手　涙のついた手をうちふるふ。【三六】八尺軀　建封の大男のすがた。【三七】內外　內は張家、外は劉家をいふ。【三八】鳳神　樣子、こころ。【三九】蕩江湖　蕩は放蕩、拘はらざるさま。楊注に風神蕩江湖とは建封の眉宇の開展せるをいふとせり。【四〇】范雲　「梁書」にいふ、雲、節を好み奇を尙び、專ら人の急に趣く、少時、領軍長史王晙と善し、晙官舍に亡す、貧にして居宅なし、雲乃ち喪を迎へて家に還り、躬ら啗殯を營む、と。又「南史」にいふ、何遜、弱冠にして秀才に擧げらる、范雲其の對策を見て大に相稱賞し、結んで忘年の友となる、と。【四一】結友　上にみゆ、自己を范雲に、建封を謝朓に比す。【四二】嵇紹自不孤　嵇康、山濤と神交を結ぶ、康、誅せらるるに臨み其の子紹に謂つて曰く、巨源(濤が字)在り、汝、孤ならず、と。建封を山濤に、自己の子を嵇紹に比す。【四三】擇材　人材をえらぶ。【四四】征南幕　晉の杜預、征南大將軍となる、韋之晉を比していふ。【四五】溯落回鯨魚　前にものべし如く、溯落とは之晉卒し崔瑞之に代りしをいふならん。鯨魚は以て建封に比す。【四六】賈生慟　賈誼時事につき痛哭流涕すべきものあるを論ぜり、以て建封の時世を憂ふるをいふ。【四七】樂毅書　樂毅は戰國燕の昭王の將なり、趙に降る、燕の惠王毅に書を遺り且つ之を謝す、毅も亦書を作りて王に報す。建封必ず書を崔瑞に遺りしならん。【四八】主憂　主は天子。【四九】師老　師は軍隊、老は衰弱をいふ。【五〇】舊丘　故鄉をいふ、建封は鄧州南陽の人、兗州に隱れしことあり。【五一】稅駕　馬車より解きはなつ、休息すること。【五二】大廈　大屋。【五三】各有分　分は分限、職分。【五四】管葛　齊の管仲、蜀の諸葛亮。【五五】時須　時世の必要とするもの。【五六】霰雪嚴　冬節をいふ。【五七】栝柏枯　栝はひのき、栝柏とは松柏といふの類。【五八】高議　高處にての議論、高とは次の雲臺をさす。【五九】雲臺　後漢の明帝、功臣を南宮の雲臺に畫く、雲臺は宮中の高き臺をいふ、借りて宮中をさす。【六〇】嘶鳴　馬の鳴くをいふ。【六一】望天衢　天衢は天上のみち、句意は天衢にての嘶鳴を望むをいふ。【六二】羽人

仙人、仙人は空中に飛騰す、身に羽毛あるが如し。語は楚辭「遠遊」にみゆ。【六三】掃碧海　仇氏は掃は歸に作るべしといへり、之に從ふ、碧海に歸るとは海上の仙境へかへり去るをいふ。【六四】竟何如　竟に何如とは功業立つべからざるをいふ。

【題義】張建封が湖南を去るとき之に別れた詩。大曆四年冬、潭州にての作ならん。浦氏は本詩、韋之晉の死に言及せざる故を以て之を大曆三年冬の作とせるは恐らくは非なり。

【詩意】自分はかつて唐の實錄を讀んだに、吾が唐の國家は草わけの初のとき、劉（文靜）・裴（寂）等が首として建議して兵を擧げさせようとしたが、高祖ははつきり龍の如く立ちあがることをためらはれた。そのをり秦王は亂世ををさむる姿をそなへてをられ、一劍によりて兵符を總轄し、汾晉の地方を漢の豐沛の如く發祥の地となし、暴虐な隋の汚濁な政治がつひにとりのぞかるるに至つた。』劉・裴の如き宗臣は廟に祀られて食事をしてをるが、その後の子孫たるものの祀りはなんでうとんぜられ、あれたるさまになつてをるのか。彭城の英雄たる劉文靜の子孫ならば榮達して將相となり文武の謀圖の任にあたることがしかるべきである。おまへはその彭城公の外のひこまごで、不羈の才を負うた汗血の駒である。』じぶんは多くの少年を見てをるが、彼等は心の用ひかたがみんなひねくれたこせついたものどもである。（おまへはさうではない）。おまへとこの長沙の驛亭でであひ、にはかに家すぢ職業など問うてみると、おまへはじぶんの舊友の子で、おまへのこどものをりにはともに月日をすごしたことがあつたのである。』じぶんは淚のそそがるる手をうちふりながら、おまへの八尺の軀を仰ぎ看る。おまへは內家外家とも名家の流れで、江湖の天地に放蕩する風神をもつてゐる。（楊注によれば「眉つきがまびろな相貌である」の意。）おまへは范雲に於ける謝朓で、雲も之と友を結ぶに足る。おまへは嵇紹に於ける山濤で、紹も之によつて孤とならざることを得るといふものだ。』さておまへは征南大將軍の幕に人材として擇ばれたが、潮がひいたために鯨魚も居られずかへつてゆく。おまへは賈誼が時事に慟哭する樣に世のことを憂ふることは自分も感じさせられる。またおまへは樂毅の樣に置き手紙をしたといふことも聞いてをる。いま盜賊急にして天子はごしんぱいになり、軍隊は衰へて京都は荒れてゐる。どうして故鄕のもとの丘などへ歸つて車の駕をといてやすんでをられよう、大厦の傾かんとしてゐるときにはそれを扶けておこすがよろしい。』君も臣も各〻その本分がある。管仲・諸葛亮の如き人物は時世の必要とする所のものだ。いま霰や雪の嚴しくさむい時節にあたつてはをるが、栝や柏は決して枯れるものとみえぬ。雲臺の高いところで國を救ふための議論が行はれつつある、自分はどうかおまへが天衢にいななく樣にと望んでをる。羽をはやした仙人も碧海の仙境へ歸つてしまつたのでは、その功業といふものはつひにどうなることか、樹て得られぬではないか。（だから引つ込まずに出てはたらけ。）』

送盧十四弟侍御護韋尚書靈櫬歸上都二十四韻

盧十四弟侍御が韋尚書の靈櫬を護して上都に歸るを送る　二十四韻

素幙度江遠。朱幡登陸微。
悲鳴駟馬顧。失涕萬人揮。
參佐哭辭畢。門闌誰送歸。
從公伏事久。之子俊才稀。
長路更執紼。此心猶倒衣。
感恩義不小。懷舊禮無違。
墓待龍驤詔。臺迎獬豸威。
深衷見士則。雅論在兵機。
戎狄乘妖氣。塵沙落禁闈。
往年朝謁斷。他日掃除非。
但促銅壺箭。休添玉帳旂。
動詢黃閣老。肯慮白登圍。
萬姓瘡痍合。羣兇嗜慾肥。
刺規多諫諍。端拱自光輝。
儉約前王體。風流後代希。
對敭期特達。衰朽再芳菲。
空裏愁書字。山中疾采薇。
撥杯要忽罷。抱被宿何依。
眼冷看征蓋。兒扶立釣磯。
清霜洞庭葉。故就別時飛。

【字解】【一】盧十四弟侍御　侍御史盧某、弟とは表弟、作者の祖母の方の年したのいとこなり。【二】韋尚書　韋之晉なり、卷二十二に「哭韋大夫之晉」詩あり、之晉必ず尚書に除せられしならんも何尚書なるか明かならず。【三】靈櫬　靈柩。【四】上都　長安。【五】素幙　白きまく、舟に張りしもの。【六】朱幡　あかきはた、韋の部下の軍の建つるもの。【七】駟馬　四匹の馬、柩を引く馬ならん。【八】失涕　覺えずなみだをだす。【九】參佐　佐吏參軍、下役のもの。【一〇】門闌　長沙にある韋宅の門、ませ。【一一】送歸　靈櫬の故郷にかへるを送る。【一二】從公伏事　盧侍御についていふ、次句の之子が從字及び伏事の字の主語、公は韋をさす、伏事はつかへしこと。【一三】之子　盧をさす。【一四】執紼　紼は輓索、棺をひくつな、執紼は紼をとりて從動もすれば黃閣の老に詢ふも、肯て慮らむや白登の圍。萬姓瘡痍合る、羣兇嗜慾に肥ゆ。刺規諫諍を多くせよ、端拱自ら光輝あらむ。儉約は前王の體、風流後代希ふ。對敭特達を期せよ、衰朽再び芳菲あらむ。空裏愁へて字を書す、山中疾みて薇を采る。杯を撥して要忽ち罷む、被を抱きて宿するに何れにか依らむ。眼冷かに征蓋を看る、兒に扶けられて釣磯に立つ。清霜洞庭の葉、故らに別時に就きて飛ぶ。

ひゆくをいふ。【一五】倒衣　「詩」に、顛倒衣裳、自レ公召レ之、とみゆ。生前衣裳をあべこべに着けて命に赴きしと同じ心なるをいふ。【一六】龍驤詔　晉の王濬龍驤將軍たり、卒して大に塋域を營む。趙注にいふ、韋の墓、大に塋域を營むこと王濬の如くなるには詔を俟つべきなり、と。【一七】臺　御史臺。【一八】獬豸威　獬豸は一角の獸、法冠は之を冠す、盧侍御をいふ。【一九】深衷　盧の喪を送る誠心をいふ。【二〇】士則　士人のてほん。【二一】雅論　盧の平生の議論。【二二】兵機　軍事の機會。【二三】戎狄　吐蕃。【二四】朝謁斷　謁見やむ、代宗陝州に出奔せられしこと。【二五】他日　往日。【二六】掃除非　仇氏いふ、禦戎策なきをいふと。掃除とは不潔のものをはきすてること、從つて蕃人を逐ひはらふをいふ。【二七】促銅壺箭　銅壺は水時計の水を蓄ふるつぼ、箭は刻限を指示する「や」、促箭とは時を早くし、朝早く朝政を視ることを勸むべきをいふ。【二八】添玉帳旂　玉帳はうつくしき陣幕、旂は「はた」、添旂とは兵を增すをいふ。【二九】詢　とひはかる。【三〇】黃閣老　大臣元老をいふ。【三一】白登圍　漢の高祖匈奴を征伐して白登に於て圍まる、代宗の蕃人に攻められるをいふ。【三二】萬姓　人民。【三三】瘡痍合　瘡痍はきず、合は集合の意、仇注に兵賦に困しむをいふとせり。【三四】羣兇　多くのわるもの、武臣をさす。【三五】嗜慾肥　欲する所をほしいままにして肥ゆ。【三六】刺規　そしり、いましむ。【三七】端拱　端然として手をこまぬく、天子の容なり。【三八】前王　前代の賢王。【三九】風流　流風といふ類。【四〇】後代希　希はこひねがひ法るべきをいふ。【四一】對敭　敭は揚に同じ、語は詩・書にみゆ。天子の命に對へ、稱揚する。【四二】特達　盧が獨特に天子のおそばへでるをいふ。【四三】襄朽　自己の老態をいふ。【四四】芳菲　かをる、再び人生の春に逢ふをいふ。【四五】空裏書字　殷浩が故事、已にみゆ。【四六】采薇　貧生活をいふ。【四七】撥杯　撥は杯のなかの酒をはらひのけること。【四八】要　招邀なり、酒席にむかへらるること。【四九】抱被　かいまきをいだく。【五〇】宿何依　同宿すべき所なきをいふ。【五一】征蓋　盧の車の建てがさ。【五二】兒扶　こどもに扶けられて。【五三】清霜　霜のおくときをいふ。【五四】故　故意、わざとらしく。

【題義】としたのいとこ侍御史盧某が尙書韋之晉の柩を護送して長安へかへるのを送つた詩。黃鶴は大曆四年冬、潭州の作とせり。

【詩意】白い幕が遠く江邊をわたつてゆき、朱いはたが微に陸にのぼりゆく。駟馬はかなしみ鳴いて左右をふりかへる、萬人は覺えず涙をおとしてそれを手でうちはらふ。部下の下役たちは哭して柩にいとまごひをしをはつたが、さて官邸の門闕からだれが韋尙書の柩の歸るのを送つてゆくのであるか。この人（盧侍御）は稀なる俊才であつて、韋公に從ひ事へてゐることが久しい。それでこのうへにも長道中を柩のつなをとつてゆかうといふ、その心ではいまも生前と同じく衣裳を顚倒して公事に赴く氣もちでゐるのである。かほどに恩に感ずるはその義は小なるものでなく、もとのことをおもうてすこしも禮からはづれぬのである。韋尙書が歸葬されるときはその墓はさだめし詔を待つて龍驤將軍王濬の樣に壯大な塋域をつくられるであらう、盧侍御が送つてゆくのであるから御史臺は威ある獬豸の冠容を迎へることであらう。盧君のふかい誠衷は士人のてほんを見るに足る。また君の平生の議論は軍機に關することに存してゐたのである。』かつて戎狄が妖氣に乘じて起り、塵沙が宮門に落ちてきた。之がためそのむかし朝廷での謁見は斷絕してしまひ、また不潔なものをはきすてることもできなかつた。（こんなことではならぬのであるから、君がみやこへついたならば）ただ水時計の箭を早くすすませて天子に朝政にお勤めになることをすすめ、武將の玉帳の旂などをやたらに增加させぬ樣にするがよい。天子はともすれば黃閣の老臣に政務のことをおたづねにはならうが、臣下はだれも漢の時に白登の圍みがあつて夷狄に困しめられた樣なことをしんぱいするものはない。人民はさまざまのきずをあつめてうけ、多くのわるものは嗜慾を滿足させて肥えふとつてゐる。君はわるいことを

ばそしりいましめ多く諫諍を爲せ、さすれば端然として手をこまぬいてござる天子のおすがたにもひとりでに光輝が生じてくる。前代の賢王の政治の體は儉約に在る、そのありさまを後代もねがうてをるのである。君は天子の御命令にお答へをしそれを稱揚するには他をまたずひとりで君前に達する樣に心がけるべきである。さすればこの衰朽のわが身もふたたび花さく春に逢ふことであらう。』自分は時事を愁へて殷浩のごとく空中に字を書き、疾にかかりながら山のなかでわらびをとつてたべてゐる。君と別るれば招宴もやんでしまふから杯をはらひのける。夜具をかかへて同宿しようとしてもどこにとまつてよいか、たよるべきばしよもない。力のない眼つきで君ののりゆく車蓋を看ながら、こどもに扶けられて釣磯にたたずんでゐると、清き霜のおくころの洞庭湖畔の木の葉は、わざと吾が悲しみを深めがほに、この別れのをりにつけこんで飛ぶのである。』

蘇大侍御、訪江浦、賦八韻記異

蘇大侍御、江浦に訪ふ、八韻を賦して異を記す

蘇大侍御渙靜者也、旅於江側、不交州府之客、人事都絶久矣、肩輿江浦、忽訪老夫舟檝、已而茶酒內、余請誦近詩、肯吟數首、才力素壯、辭句動人、接對明日、憶其湧思雷出、書篋几杖之外、殷殷留金石聲、賦八韻記異、亦見老夫傾倒於蘇至矣。

蘇大侍御渙は靜者なり、江側に旅し、州府の客に交らず、人事都て絶つこと久し。江浦に肩輿し、忽ち老夫を舟檝に訪ふ。已にして茶酒の內、余近詩を誦せむと請ふ、肯て數首を吟ず。才力素壯に、辭句人を動かす。接對せる明日、其の湧思雷のごとく出で、書篋几杖の外、殷殷として金石の聲を留むるを憶ひ、八韻を賦して異を記す、亦た老夫が蘇に傾倒すること至れるを見む。

【字解】【一】蘇大侍御　名は渙、大は排行第一なるをいふ。【二】江浦　湘江の浦。【三】八韻　八韻十六句の詩。朱注にいふ、題には八韻といひて詩は七韻に止まる、疑ふらくは八の字誤れるか、或は詩、一聯を脫せしならん、と。余は一韻二句を脫せしものかとおもふ。說は後にいだす。【四】記異　異事を記す。【五】靜者　閒靜にふける人。【六】江側　湘江の側。【七】州府　潭州のやくしよ。【八】人事　人との交際のこと。【九】肩輿　かたにてかつぐかごにのる。【一〇】老夫　自己。【一一】舟檝　舟次をいふ。【一二】已而　もと而已とありしを閻若璩によりて改む。【一三】近詩　蘇渙のつくりし近時の詩。【一四】接對明日　であうた翌日。【一五】湧思雷出　わきだす思想が雷のごとく發動する。【一六】書篋　書篋　ほんばこ。【一七】几杖　脇息、つゑ。【一八】殷殷　雷聲のさま。【一九】金石聲　金器石器を以て奏する音樂の聲。【二〇】傾倒　心をかたむけつくす。

龐公不浪出。蘇氏今有之。

龐公浪りに出でず、蘇氏今之れ有り。

再聞誦新作。突過黄初詩。
乾坤幾反覆。揚馬宜同時。
今晨清鏡中。〔□□□□□□□。〕
〔□□□□□□。〕勝食齋房芝。
余髪喜卻變。白間生黒絲。
昨夜舟火滅。湘娥簾外悲。
百靈未敢散。風破〔波〕寒江遲。

再び聞く新作を誦するを、突過す黄初の詩。
乾坤幾たびか反覆す、揚馬宜しく時を同じくすべし。
今晨清鏡の中、〔□□□□□□□。〕
〔□□□□□□。〕齋房の芝を食ふに勝る。
余が髪卻つて變ずるを喜ぶ、白間に黒絲を生ず。
昨夜舟火滅す、湘娥簾外に悲しむ。
百靈未だ敢て散せず、風破〔波〕寒江遲し。

【字解】〔一〕龐公　後漢の龐德公、襄陽の峴山の南に居り、未だ嘗て城府に入らず。〔二〕浪出　みだりにでかける。〔三〕蘇氏　渙をさす。〔四〕新作　即ち序の新詩。〔五〕突過　つきぬける。〔六〕黄初　三國の魏の年號、曹植等所謂鄴中七子の輩出せし時期。〔七〕乾坤一句　世の變遷しばしばなるをいふ。〔八〕揚馬宜同時　揚馬は揚雄、司馬相如、仇注に此の句は蓋し以レ蘇匹レ已なりといひ、蘇と自己とは相如揚雄が時を同じくして出でしごとしとときるに似たり。師氏の説には蘇は今人に似ず相如揚雄と名を當時に齊しくすべしといへり。この説まされるが如し。〔九〕今晨清鏡中　此の句以下は原文は直ちに勝食齋房芝へつづけり。故に七韻となれり。仇氏は七韻のままに依りて句の位置を、今晨清鏡中、白間生黒絲、余髪喜卻變、勝食齋房芝、と變更せり。余は句の位置は原文に依り、今晨清鏡中の次に押韻の句一、又その次に不押韻の句一を脱したるものと考ふ。因つて□□の符號を補ひて脱落の部分を示せり。〔一〇〕齋房芝　漢の武帝の元封二年に芝、甘泉宮の齋房に生ず、九莖連葉、とあり。芝は靈芝、藥草にして身を輕くし年を延ばし老いざらしむるもの、齋房とは天子、神を祭る齋戒のおへやなり。〔一一〕變　色のかはること。〔一二〕白間　白絲のあひだ。〔一三〕黒絲　くろきいと、絲とは髪をたとへいふ。〔一四〕湘娥　湘夫人なり、已にみゆ。〔一五〕百靈　多くの神靈。〔一六〕風破　破は吹破の意か、一に波或は浪に作るといふ、風波又は風浪ならば其の義明かなり。〔一七〕寒江遲　遲とは流れのおそきをいふならん。容齋隨筆にいふ、蘇渙、少くして剽盜を喜び、善く自弩を用ふ、巴蜀の商人之に苦しむ、白跖と稱し、以て莊蹻に比す。後ち節を折りて書を讀み、進士及第す、湖南の崔璡、從事に辟す、繼ぎて交廣に走り、哥舒晃と反し、誅に伏す、と。容齋また渙が廣州に在りしとき作りて長官に上りし變律詩十九首のうち二首をあぐ、其の中の一は下の如し。曰く、毒蜂一成レ窠、高掛惡木枝、行人百步外、目斷魂爲飛、長安大道邊、挾レ彈誰家兒、手持黄金丸、引レ滿無レ所レ疑、一中紛下來、勢若風雨隨、身如萬箭攢、宛轉迷レ所之、徒有疾レ惡心、奈何不レ知レ幾、これは後日物語なれども渙の詩なるものは凡そ此の如きものなりしなるべし。參考のため此に附記す。

【題義】侍御史蘇渙が自分を湘江の浦に訪うた。それで自分は八韻の詩をつくつてかはつたこともあるものだといふことをしるした。渙は閑靜にふける人物で、湘江のそばに旅しながら州のやくしよの人たちには交際をせず、ながらく人事を絶つてゐたのだ。それが湘江の浦へかごでやつてきて忽ちこのおやぢを舟がかりのばしよにたづねたのだ。しばらくするとお茶や酒のあひだに自分は彼に近作の詩を誦してくれとたのんだところ、彼は承知して數首を吟じてくれた。彼の才力はもと壯なものでその辭句は人を感動させるものがある。自分はあうた翌日、彼のわきたつ詩思が雷の樣にうごきだして、ほんばこや脇息・杖のあたりにまで殷殷と金石の聲をとどめてゐることをおもうて八韻の詩をつくつてこの異事をしるした、これでどれほどこのおやぢが彼れ蘇渙に十分心を傾けてゐるかがわかるであらう。大曆四年、潭州にての作。

【詩意】むかし龐德公は家からやたらには出かけなかつたといふが、今は蘇氏（渙）が有る、卽ち今の龐德公だ。自分は二どまで彼がその近作を誦するのをきいたが、彼の詩は黃初時代の詩をもつきぬけるばかりである。天地はいくたびかひつくりかへりかはつたが、彼の如きは漢の揚・馬と時を同じくしてもしかるべきものである。けさは鏡のなかで、「……」、「……」、齋房の靈芝をくらふにもまさつてをる。じぶんは髮の毛の色がかへつてかはつたことを喜ぶ、すなはち白のなかに黑絲がでてきたのである。昨夜は風で舟の火がきえ、湘江の女神湘娥が簾のそとで悲しんだ、そのほか多くの神靈が今尙散じきらず、風浪がわきたつて寒天の湘江も流れあしがおそくなつてをる。（これは皆渙が詩の影響によるのであるの意。）

暮秋、枉裴道州手札、率爾遣興、寄、遞近呈蘇渙侍御

暮秋、裴道州が手札を枉ぐ、率爾興を遣りて寄せ、遞〔近〕く蘇渙侍御に呈す

久客多枉友朋書。
素書一月凡一束。
虛名但蒙寒暄問。
泛愛不救溝壑辱。
齒落未是無心人。
舌存恥作窮途哭。
道州手札適復至。
紙長要自三過讀。
盈把那須滄海珠。
入懷本倚崑山玉。
撥棄潭州百斛酒。
蕪沒瀟岸千株菊。
使我晝立煩兒孫。
令我夜坐費燈燭。
憶子初尉永嘉去。
紅顏白面花映肉。

久客多く枉ぐ友朋の書、
素書一月に凡そ一束。
虛名だ寒暄の問を蒙る、
泛愛救はず溝壑の辱。
齒落つるも未だ是れ無心の人ならず、
舌存して恥づらくは窮途の哭を作す。
道州の手札適〻復た至る、
紙長きも要するに自ら三過讀む。
盈把那ぞ須ひむ滄海の珠、
入懷本倚る崑山の玉。
撥棄す潭州百斛の酒、
蕪沒せしむ瀟岸千株の菊。
我をして晝立兒孫を煩はさしむ、
我をして夜坐燈燭を費さしむ。
憶ふ子が初めて永嘉に尉となりて去りしを。
紅顏白面花肉に映ず。

【字解】〔一〕裴道州　裴虬なり、卷二十二に「湘江宴餞裴二端公赴道州」詩あり。〔二〕寄　裴によせる。〔三〕遞呈　人にもたせやりて呈す。

る。遞の字近に作れる本あり、近に從ふ。〔四〕蘇渙侍御　前篇にみゆ。〔五〕素書　きぬにかいた手紙。〔六〕寒暄問　さむさあつさのみまひ。〔七〕泛愛　ひろく愛する。〔八〕溝壑辱　のたれ死にするはづかしめ。〔九〕無心人　心のない人。〔一〇〕舌存　張儀が故事、已にみゆ。〔一一〕窮途哭　阮籍が故事。〔一二〕三過讀　三べんよむ。〔一三〕盈把　掌に一ぱい。〔一四〕滄海珠　ひろき海の眞珠。〔一五〕崑山玉　崑崙山の玉。〔一六〕撥棄　はらひすてる。〔一七〕蕪沒　あれうづもれさす。〔一八〕瀟岸　瀟水のきし。〔一九〕煩兒孫　扶げてもらふにより煩はす。〔二〇〕費燈燭　ながくよむにより燭をへらす。〔二一〕子　裴をさす。〔二二〕尉永嘉去　作者「送裴二虬尉永嘉」詩あ

(二四)軍符侯印取豈遲。
(二五)紫燕騄耳行甚速。』
聖朝尙飛戰鬬塵。
濟世宜引英俊人。
(二七)黎元愁痛會蘇息。
(二八)戎狄跋扈徒逡巡。
(二九)授鉞築壇聞意旨。
(三〇)頹綱漏網期彌綸。
(三一)郭欽上書見大計。
(三二)劉毅答詔驚羣臣。』
(三三)他日更僕語不淺。
(三四)明公論兵氣益振。
(三五)傾壺簫管動白髮。
(三六)儛劍霜雪吹青春。』
宴筵曾語蘇季子。
(三七)後來傑出雲孫比。
(三八)茅齋定王城郭門。
(三九)藥物楚老漁商市。
(四〇)市北肩輿每聯袂。
(四一)郭南抱甕亦隱几。
(四二)無數將軍西第成。
(四三)早作丞相東山起。
(四四)烏雀苦肥秋粟菽。
(四五)蛟龍欲蟄寒沙水。
天下鼓角何時休。
(四六)陣前部曲終日死。』

軍符侯印取ること豈に遲からむや、
紫燕騄耳行くこと甚だ速かなり。』
聖朝尙ほ飛ぶ戰鬬の塵、
濟世宜しく引くべし英俊の人。
黎元愁痛會ず蘇息せしむべし、
戎狄跋扈徒らに逡巡す。
授鉞築壇意旨を聞かむ、
頹綱漏網彌綸を期す。
郭欽が上書大計を見る、
劉毅が答詔羣臣を驚かす。』
他日更僕語淺からず、
明公論兵氣益ゝ振ふ。
壺を傾くれば簫管白髮に動く、

り。(卷三、二二〇頁)。【三三】花映肉　血色のよきをいふ。【三四】軍符侯印　軍中に用ふるわりふ、趙注に節度使の用ふるものとす、侯に封ぜらるる印。【三五】紫燕　漢の文帝の良馬。【三六】騄耳　周の穆王の八駿の一、斐の俊才をたとふ。【三七】黎元　人民。【三八】會蘇息　會は必ず、蘇息はよみがへり、やすむ。【三九】跋扈　あばれる。【三〇】逡巡　ためらふ。【三一】授鉞　まさかりを授ける、兵權を委ぬるなり。晉書禮志にいふ、漢魏の故事に將を遣はし出征せしむるときは符節郎、節鉞を朝堂に授く、と。【三二】築壇　大將に任命すること、韓信が故事。【三三】聞意旨　天子のおぼしめしのあることを耳にする。【三四】頹綱漏網　くづれたつな、もれるあみ、陸機が諸侯論の語。【三五】彌綸　いとをひきはへること。【三六】郭欽上書　郭欽は晉人、內地にある夷狄を邊地に徙すべきことを建議せり。【三七】劉毅答詔　劉毅は晉人、武帝自己を如何なる主ぞと問へるに、陛下は官錢を賣りて私門に入るるゆゑ漢の桓・靈にも及ばずと答へたり。【三八】他日　往日をいふ。【三九】更僕　僕は太僕、君の朝見宴會に君の輔佐となるもの、その事久しきにわたるときは倦むによりて之をかふ。僕を更ふるは時の久しくたつをいふ。禮記儒行篇の語。【四〇】語不淺　ふかくかたる。【四一】明公　斐。【四二】論兵氣益振　元氣をふるひ兵を論ずる。【四三】傾壺　壺は酒つぼ。【四四】動白髮　白髮の前に動き鳴る。【四五】儛劍　儛は舞。【四六】霜雪吹青春　青春にあたりて霜雪吹きそそがるるごと

宴筵曾て語る蘇季子、
後來傑出雲孫の比ならむと。
茅齋定王城の郭門、
藥物楚老漁商の市。
市北肩輿每に袂を聯ぬ、
郭南甕を抱き亦た几に隱る。
數ふる無かれ將軍西第の成るを、
早く丞相と作り東山より起たむ。
烏雀苦だ肥ゆ秋の粟菽、
蛟龍蟄せむと欲す寒沙水。
天下の鼓角何の時か休まむ。
陣前の部曲は終日死す。』

七五九

附書與裴因示蘇。　書を附して裴に與へ因つて蘇に示す、
此生已愧須人扶。　此の生已に愧づ人の扶くるを須つを。
致君堯舜付公等。　君を堯舜に致すは公等に付す、
早據要路思捐軀。　早く要路に據りて捐軀を思へ。』

し。【四七】曾語　語りて之に及ぶ。【四八】蘇季子　蘇秦。【四九】雲孫比　雲孫は七世の孫、比とは似るなり。【五〇】茅齋　渙の書齋。【五一】定王城　卷二十二「清明」をみよ。【五二】藥物　仇氏い

ふ、作者藥を賣る、と。作者の進三大禮賦表に、賣藥都市、寄食朋友、の語あれば藥を賣ることか、（賣藥に隱るるの意）或は疾病の身ゆゑ藥物に親しむをいふか、文面にては明かならず。【五三】楚老　楚地の老人、自己をさす。【五四】漁商市　その市に近き處に寓するをいふ。【五五】抱甕　かめを抱き水を汲みて田にそそぐ、漢陰丈人の故事、「莊子」にみゆ。【五六】隱几　脇息による、渙につきていふ。【五七】西第成　後漢の馬融、大將軍梁冀に媚びんがために西第頌をつくる。【五八】早作丞相　希望をいふ。【五九】東山起　晉の謝安が故事。【六〇】鳥雀　小人をたとふ。【六一】栗菽　あは、まめ。【六二】蛟龍　英傑をたとふ。【六三】部曲　部隊をいふ。【六四】終日死　あさからばんまで戰死する。【六五】須人扶　他人から扶けてもらふことを必要とする。【六六】致君堯舜　君を堯舜の地位に致す。【六七】公等　裴蘇等をさす。【六八】捐軀　からだをすてる。

【題義】秋のくれに道州刺史裴虬から手紙をもらつたので、にはかに興を遣る詩をつくつて虬に寄せ、さらにそれを近く住む侍御史蘇渙におくつた。大曆四年、潭州にての作。

【詩意】ながらく旅客になつてゐる自分は朋友からたくさん手紙をもらひ、一個月には凡そ一束のてがみがたまる。自分が虛名を得てをるためにその人人からたづねられることは寒さあつさの挨拶ばかりで御世辭の愛では自分が溝壑にのたれ死にをする辱にあふことを救ふよしもない。自分は齒は落ちてもまだ心を無くした人間ではないが、張儀の樣に舌が存在しながら阮籍の如くゆきつまつた途で慟哭してゐることは恥かしいことである。ちやうどこのとき裴道州からの手紙がとどいた、なかなか長い手紙だが自分はつまるところそれを三べんもくりかへしてよんだ。この手紙を得ては掌にみつるほどの滄海の珠もいらぬ。この手紙が手許にあることは懷にはひつてきた崑山の玉に倚りそうてゐる樣なものだ。潭州の百斛の酒もほしくなくなつてそれをはふりだしてしまひ、瀟水の岸の千株の菊の花も手折る氣になれずかつてにあらさしておく。晝は立ちながら讀みふけるとて兒孫を煩はし、夜はすわつて讀みふけるとて燭を費させられる。』いまも記憶してゐる、君がはじめて永嘉郡へ尉官となつていつた時には、紅顏白面の若者で花の色が肉にうつろうてゐた。徵軍の割符、封侯の印も君にとつてはそれを取ること決しておそくはない、紫燕・騄耳の駿馬はあるくことは甚だはやいものだ、君はその駿馬でないか。』いま聖朝にかかはらずまだ戰鬪の塵が飛んでゐる、世をすくふには英俊の人を引き用ひねばならぬ。人民たちはひどくしんぱいしてをるがこれは必ずよみがへらせ安息させねばならぬ、しかるに戎狄があばれてゐるのに當局はいたづらにぐづぐづためらうてをる。君の如き英俊のためにはきつと鉞を授け壇を築かるるといふ聖旨のあることを聞くであらう、いまの國家のくづれた綱紀疎漏な法網はどうしても正しきつなをひきわたして修理することを期せなければならぬ。郭欽は夷狄を遷徙させよとの上書をしたがいかにも國家の大計が見られる、劉毅は武帝の詔に無遠慮

なお答へをして羣臣を驚かした。（君は今の郭欽・劉毅である。）』往きつ日僕を更ふるの久しきにわたつて君と深く語りあうたときには、明公は兵を論ずるや元氣ますます振ふものがあつた、そのをり酒壺を傾けては簫管の音吾が白髮の前に動き、劍を舞はせば霜雪の色青春にあたつて吹きそそがれた。』かかるさかもりのむしろで蘇季子（渙を比す）のことについて語り及んだことがあつた。それは彼（渙）は後來傑出するもので蘇秦の遠孫の類たるにふさはしいものであるといふのであつた。いま蘇（渙）はここの定王城の郭門に茅齋をかまへてをる、自分は楚老となつて漁商の市にそうて藥物と親んでをる。蘇は市の北へ肩輿でやつてきていつもじぶんと袂を聯ね、また彼が郭南で甕を抱いて水を灌いだりしてゐるところへじぶんもいつて脇息によつたりする。將軍輩が贅澤な西第を落成させようともそんなことはかぞへたててとりあふにおよばぬ。早く蘇の樣な人物が謝安の樣に東山から起ちあがつて丞相になつてくれることをのぞむのである。鳥雀の樣なつまらぬとりは秋の粟菽に肥えてゐるのに、他方には蛟龍の樣なすぐれたものは寒天の沙水にあなごもらうとしてをる。天下の鼓角はいつになつたらやむのか、陣前の部隊は朝から晩まで死にとほしである。』自分はこの手紙を裴に附與しついでにそれを蘇に示す、じぶんはこの生活に於てもはや老衰して人の手扶けをからねばならぬ樣になつてゐることをはぢる。だから君を堯舜の地位に致すといふ樣な大事業は之を諸君にまかせる、諸君はどうぞ早く要路に立つてそこをあしだまりとし、天下國家のためには一身をなげうつことをかんがへてくれたまへ。』

奉贈李八丈曈判官

李八丈曈判官に贈り奉る

我丈特英特。宗枝神堯後。
珊瑚市則無。騄驥人得有。
早年見標格。秀氣衝星斗。
事業富清機。官曹貞獨守。
頃來樹佳政。皆已傳衆口。
艱難體貴安。穴長吾敢取。
區區猶歷試。炯炯更持久。
討論實解頤。操割紛應手。
篋書積諷諫。宮闕限奔走。
入幕未展材。秉鈞孰爲偶。

我が丈は特に英特なり、宗枝神堯の後なり。
珊瑚市には則ち無し、騄驥人有ることを得。
早年標格を見る、秀氣星斗を衝く。
事業清機に富む、官曹貞にして獨り守る。
頃來佳政を樹つ、皆已に衆口に傳はる。
艱難體安を貴ぶ、穴長吾敢て取らむや。
區區猶ほ歷試、炯炯更に持久。
討論實に頤を解く、操割紛として手に應ず。
篋書諷諫積む、宮闕奔走に限らる。
入幕未だ材を展べず、秉鈞孰か偶を爲さむ。

所親(三五)問淹泊。泛愛(三六)惜衰朽。
垂白(三九)辭南翁(四〇)。委身(四一)希北叟(四二)。
眞成(四三)窮轍鮒(四四)。或似喪家(四五)狗。
秋枯(四六)洞庭石。風颯(四七)長沙柳。
高興激(四八)荆衡(四九)。知音爲回首。』

所親淹泊を問ふ、泛愛衰朽を惜む。
垂白南翁を辭せむ、委身北叟を希ふ。
眞成に窮せる轍鮒なり、或は似たり喪家の狗。
秋枯る洞庭の石、風は颯たり長沙の柳。
高興荆衡に激す、知音爲めに首を回らせ。』

【字解】【一】李八丈曄判官　判官李曄、丈は丈人、長者の稱。【二】我丈　我が丈人。【三】英特　すぐれたる人物。【四】宗枝　皇族のわかれ。【五】神堯　唐の高祖。【六】珊瑚市則無　珊瑚は寶、市は市場。【七】騄驥　騄耳、騏驥、穆王の駿馬。【八】人得有　人中には之れあるをいふ、或は曰く、不可得有の意にて反語なりと、今取らず。【九】標格　すぐれたすがた。【一〇】秀氣　すぐれた意氣。【一一】衝星斗　豐城劍の故事。【一二】富清機　機は機略、清は飾りの辭。【一三】官曹　官の部屋、局課の類、下級の官をいふ。【一四】貞獨守　貞は正し。【一五】頃來　このごろからかけて。【一六】樹佳政　よき政治をたてる。【一七】艱難　時世のなんぎなとき。【一八】體貴安　體は治體、安は安泰。【一九】究長　事務の繫くむだ多きこと。【二〇】吾敢取　吾とは李に卽していふ。【二一】歷試　下級の官職から一一だんだんに試みられる、語は書經にみゆ。【二二】炯炯　かがやく貌、守貞の心の明かなるをいふ。【二三】持久　ながく卑職に忍耐して居る。【二四】解頤　おとがひをとく、笑はせる、おもしろく說くこと。【二五】操割　刀をとりて物を割く。【二六】紛應手　紛然たる事も手に應じてさばきがつく。【二七】篆書　朝廷にあるかごのなかにおかれた書類。【二八】積諷諫　諷諫は政治につき天子をおいさめする書をいふ。【二九】宮闕　宮城の小門。【三〇】限奔走　宮門に奔走せんとするも遠方に置かるる故それを制限せられる。【三一】入幕　武將の幕府にはひる、判官たるをいふ。【三二】展材　材力をのばす。【三三】秉鈞　國政の鈞衡を手ににぎる、大臣などの職務をいふ、語は「詩」にみゆ。【三四】孰爲偶　ならぶものなし。【三五】所親　仇氏李を指すとす、余は一般にいふものと考ふ。【三六】問淹泊　淹泊は久しく舟を泊しおくこと。【三七】泛愛　ひととほりのひろき愛、已にみゆ。【三八】惜衰朽　自己の老態ををしむ。愚案するに「所親」二句は「暮秋枉斐道州手札」詩の虛名但蒙寒暄問、泛愛不救溝壑辱、の意なるべし。【三九】垂白　白髮をたれる、自己の老態。【四〇】辭南翁　辭は辭し去る、南翁は南國の父老等、已にみゆ、或は辭を亂に作り、亂ニ南翁ニとは南方の老人と混居し同類となるの意ととく。今取らず。【四一】委身　からだをなるがままにまかす。【四二】希北叟　北叟は塞北の老人、塞翁が馬の塞翁をさす、「垂白」二句は作者北歸の意あるをいふ。【四三】眞成　まことに、俗語。【四四】窮轍鮒　窮せるわだちのふな、「莊子」にみゆ。【四五】喪家狗　喪儀ある家のいぬ、人に顧みられずやせつかる。「史記」孔子世家にみゆ。【四六】秋枯　枯は水の涸るるをいふ。【四七】颯　風の吹くさま。【四八】激荆衡　南地に於て激動す、荆は荆門、衡は衡山。【四九】知音爲回首　知音は李をさす。この句舊解は「我、知音(李)の爲めに我が首を回らす」ととく。余は「知音よ、我がために君の首を回らせ」の義なちんと考ふ。窮を訴ふるなり。

【題義】判官李曄に贈りたる詩。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】我丈は特別にすぐれた人物で、皇族の別れで高祖神堯の子孫であらせられる。珊瑚の寶は市に求めようとしても有るものではない、しかし人間のうちでは騄駬、騏驥の駿馬は有り得るのである。(あなたがそれだ)。あなたは早年からすぐれたすがたをあらはし、秀でた意氣は豐城の劍の樣に星斗を衝く勢があつた。事業に於ては機略に富み、官署に於ては正しくして自己の守を失はない。』このごろはよい政治をたててをられるといふことは衆人の口に傳へられてをる。國事艱難なるをりには政治の體は安泰を貴ばねばならぬ、やたらにくだくだしくむだな事務をつくることは決して取るところではないとしてをられる。かかる人物がこせこせした卑職に試みられてをらるるにも拘はらず、炯

炯として貞心を久しく保持しておいでになる。』あなたの討論をきくとおもしろくてあごがはづれる様であるし、事務はどんないりみだれたことでもあなたは手に應じてさばいてしゝふ。あなたの朝廷にたてまつられた諷諫の書は積りつもつて朝廷の篋にいつぱいになつてをるが、あなたはかたゐなかにおかれて宮門にいたつて奔走しようとしても奔走し能はざる制限をうけてをられる。あなたは幕府の屬官となつてまだ十分材力を展べることができぬが、國政の要をとらせたならばだれがあなたとならび得るものがあらう。』わたくしは親しい人人から長い舟の生活についてたづねられる、また御世辭に自分を愛してくれる人人はじぶんの衰朽を惜んでもくれる。（しかしそれがなんになる、なんにもならぬ、だから）わたくしは垂白の身を以て南方の父老のところから辭し去り、一身を運命にまかせること塞翁の樣にありたいとねがうてをる。いまのわたくしは眞に莊子の所謂困窮した轍の鮒である、或は喪家の狗に似てゐる。今秋となつて洞庭湖の石には水がすくなくなり、風が颯然として長沙の柳を吹いてゐる。このとき荆衡の地方に於てわたくしの高興が激發し、北の方へかへりたいとおもうてをります。どうぞわたくしに取つて知音であらせられるあなたは、わたくしの爲めにこちらをふりむいてやつてくださいませ。』

奉送魏六丈佑少府之交廣

魏六丈佑少府が交廣に之くを送り奉る

賢豪贊經綸。功成空名垂。
子孫不振耀。歷代皆有之。
鄭公四葉孫。長大常苦饑。
衆中見毛骨。猶是麒麟兒。
磊落貞觀事。致君樸直詞。
家聲蓋六合。行色何其微。
遇我蒼梧陰。忽驚會面稀。
議論有餘地。公侯來未遲。
虛思黃金遺。自笑青雲期。
長卿久病渴。武帝元同時。
季子黑貂敝。得無妻嫂欺。
尙爲諸侯客。獨屈州縣卑。
南游炎海甸。浩蕩從此辭。

賢豪經綸を贊け、功成りて空しく名垂れ、
子孫振耀せざるは、歷代皆之れ有り。
鄭公四葉の孫、長大常に饑に苦しむ。
衆中毛骨を見れば、猶ほ是れ麒麟兒なり。
磊落なり貞觀の事、君を致す樸直の詞。
家聲六合を蓋ふ、行色何ぞ其れ微なる。』
我に遇ふ蒼梧の陰、忽ち驚く會面の稀なるに。
議論餘地有り、公侯來ること未だ遲からず。
虛しく思ふ黃金の遺、自ら笑ふ青雲を期することを。
長卿久しく渴を病む、武帝元同時。
季子黑貂敝る、妻嫂の欺る無きを得むや。
尙ほ諸侯の客と爲り、獨り州縣の卑なるに屈す。
南炎海の甸に游ばむ、浩蕩此れより辭せむ。

窮途仗(二八)神道。世亂輕(二九)土宜。
解帆歲云暮。可(一)與春風歸。』
出(三〇)入朱門家。華屋刻(二)蛟螭。
玉(三一)食亞(三)王者。樂張遊子悲。
侍婢艷(三二)傾城。綃(三三)綺輕霧霏。
掌中琥(三四)珀鍾。行酒雙(三五)逶迤。
新(三六)歡繼(三七)明燭。梁棟(三八)星辰飛。
兩情顧盻合。珠(四〇)碧贈(四一)于斯。
上貴(一)見(四一)肝膽。下貴(一)不(四二)相疑。
心事披(四三)寫間。氣酣(四四)達(一)所(一)爲。
錯揮鐵如意。莫(一)避珊(四五)瑚枝。』
始(四六)兼(二)逸邁興。終愼(四七)賓(二)主儀。
戎馬闇(二)天宇。嗚呼生別離。』

窮途神道に仗る、世亂れて土宜を輕んず。
解帆歲云に暮る、春風と與に歸る可し。』
出入す朱門の家、華屋蛟螭を刻す。
玉食王者に亞ぐ、樂張りて遊子悲しむ。
侍婢傾城艷なり、綃綺輕霧霏ぶ。
掌中琥珀の鍾、行酒雙に逶迤たり。
新歡明燭繼ぐ、梁棟星辰飛ぶ。
兩情顧盻に合す、珠碧斯に贈らる。
上は肝膽を見すを貴ぶ、下は相疑はざるを貴ぶ。
心事披寫の間、氣酣にして爲す所を達す。
錯りて揮ふ鐵如意、避くる莫し珊瑚の枝。』
始は逸邁の興を兼ぬとも、終には賓主の儀を愼め。
戎馬天宇闇し、嗚呼生別離。』

【字解】【一】魏六丈佑少府　少府は縣尉の敬稱。【二】交廣　交州、廣州、廣州は廣東、交州は交趾地方。【三】經綸　國初の天下の政治を計畫せしこと。【四】鄭公　太宗の臣魏徵なり、貞觀七年に左光祿大夫・鄭國公に進む。【五】四葉孫　四代の孫、佑をさす。【六】長大　身軀の大きなこと。【七】磊落　不羣のさま。【八】貞觀　唐太宗の年號。【九】致君　君を堯舜に致す。【一〇】樸直詞　かざらぬまつすぐのことば、徵が直諫せしをいふ。【一一】六合　四方上下。【一二】行色　旅行のさま、車馬などの樣子。【一三】徵　ふるはぬさまをいふ。【一四】蒼梧陰　蒼梧山の北、長沙をいふ、蒼梧のことは卷二十二「過南嶽入洞庭湖」詩をみよ。【一五】有餘地　餘裕あるをいふ。【一六】公侯來未遲　公侯之子孫、必復其始の意、佑もやがて公侯となるべきをいふ。【一七】虛思黃金遣　以下、莫避珊瑚枝まで三十二句は蓋し魏佑自述の語。黃金遣は他人より黃金をおくらるること、浦氏はこれは武帝の陳皇后が黃金百斤をへかかるものとせり。今仇氏に依る。【一八】青雲期　仇氏この句を以て長卿二句へかかるものとし、仇氏はこれは單に空囊を歎ずるものにて下の季子二句へかかるものとせり。【一九】長卿久病渴　長卿は司馬相如が字、已にみゆ。【二〇】武帝元同時　武帝、相如が子虛賦を讀みて曰く、朕獨り此の人と時を同じくするを得ざるか、と。【二一】季子黑貂敝　蘇秦、秦王に說きて言行はれず、黑貂の裘やぶれて歸る、妻は機より下らず、嫂は爲めに炊がず。【二二】妻嫂欺　上にみゆ、欺は侮るなり。【二三】諸侯客　地方長官の幕客。【二四】屈州縣卑　屈は身を屈する、卑は官のひくきこと、少府は尉なれば卑し。【二五】炎海甸　炎海は南海をいふ、甸は郊甸、郭外を郊といひ、郊外を甸といふ、郊外を甸といふ、甸の字ゐなかといふほどの義に用ひたり。【二六】浩蕩　ひろく大なるさま。蓋し前程をさす。【二七】從此辭　辭は辭去。【二八】仗神道　神力によるをいふ。【二九】輕土宜　土宜とは地味に宜しき所のものなり。米のよくできる地ならば米はその地の土宜なり。ここは土宜を輕んずるとは鄕土を容易に離れ去るをいふ。【三〇】出入朱門家　以下、莫避珊瑚枝までは交廣のさま。【三一】玉食　美食。【三二】綃綺　薄きあやぎぬ。【三三】琥珀鍾　鍾はさかづき。【三四】行酒　酒をつぐこと。【三五】雙逶迤　雙は左右双方、逶迤は美人のしなやかなさま。【三六】新歡　新に得た友をいふ。【三七】繼明燭　一燭消ゆれば他燭を以てつぐ。【三八】星辰飛　仇注にいふ、星辰は梁上の燈をさすと。愚案するに星の散落する夜ふけをいふならん。【三九】兩情　彼我の情。【四〇】珠碧　眞珠、碧玉。【四一】見肝膽　こちらの心をありのまま示す。【四二】不相疑　先方を信ずること。【四三】披寫　ひらき、うつす、うつすとは我が心を先方へいるるなり。【四四】達所爲　なさんと欲する所をそのとほり

しとげる。【四五】 珊瑚枝　暗に石崇が故事を用ふ。晉の石崇かつて武帝が王愷に賜ひし二尺許の珊瑚枝を鐵如意にてうち碎く、愷之ををしむ、崇左右に命じ更に珊瑚樹の高さ三四尺なるもの六七株を取らしむ。【四六】 始兼遜邁興　以下は作者の意。邁の字はそへたるまで。【四七】 賓主儀　賓は魏佑、主は土地の長官。

【題義】 縣尉魏佑が南方交廣の地方へゆくのを送つた詩。大曆四年冬、潭州にての作。

【詩意】 賢人豪傑がその初め天下の經綸をたすけ、功ができあがつて、いたづらにその名が後世までのこり、其の子孫がすこしも耀きをふるはぬといふことは、歷代みな有ることでめづらしくはない。ここに魏鄭公の四代の孫にあたる人（魏佑）がある、その人は長大の軀幹をもちつついつも饑に苦しんでをる。衆人のをるなかでこの人の毛骨を見てみるとこの人はやつぱり麒麟兒でただのものではない。鄭公が貞觀の時代になされた事の磊落不羣なりしことよ、公は樸直の詞を以て君を堯舜に致さうとつとめられた。魏氏一門の名聲は六合をおほふばかりである、しかるにこれはまたその人の四代の孫にいたつてどうしてかくまでも旅行のいでたちのふるはぬ樣子なのであらうか。』君は自分と蒼梧の北でであうた、じつにめつたにない面會であるのに驚かされた。君の議論には餘裕がある、おちぶれたとはいふものの祖先の樣に公侯の地位が君のところへ來ることは決しておそくはあるまい。君はいふ、「自分は貧乏でいたづらにひとから黃金をおくられたらばと思ひ、また青雲の高位にのぼりたいと期してをることは自分ながらをかしくおもふ。武帝とは元來同時に生れあはせたのだがこの司馬長卿はながく消渴の病にかかつてゐる。この蘇季子は黑貂の裘がやぶれてしまつたから家にでも歸つたら妻嫂にも侮られるかもしらぬ。いまだに諸侯の客となつて身を州縣の卑官に屈してをるが、これから南の方炎海のゐなかにあそびたくおもふ、前途廣遠であるがこれからおいとまごひをする。ゆきつまつた途では神の力にたよるほかはない、世が亂れてゐるのではかろがろしく鄉土を見棄てることもやむを得ない。歲の暮れに出帆はするが春風の吹き起るころには歸ることができるだらう。』

「あちらへゆけば、朱門富貴の家に出入する、そこにはりつぱな家屋に蛟螭などが雕刻してある。その美食は王者にもつぐし、音樂を張られると遊子の心は悲しくなる。そばにひかへてる婢は城を傾けさすほどに艶麗で、その綃綺は輕き霧がこまかく飛ぶ樣である。彼の女は掌の中に琥珀の杯をもち左右からうねうねとして酒をついでくれる。新に得た友だちと燭を繼ぎてはともし、梁棟には星辰が飛ぶころとなる。このときみかはす間に彼我の情意が投合すればそのところで眞珠や碧玉が贈りものにされる。上はこちらのこころをすつかりみせてやるのがよいし、その次には先方を信じてかかるのがよろしい。こちらの心事を先方へつぎこめば、こちらの意氣のさかんなときにはなにをしようとかまはぬ。まちがつて鐵の如意をふるふときは珊瑚の枝でも避けはせぬ、」と。』なるほど君の意氣はさかんだ、しかし始は豪興の逸するままにやるのもよいかも知れぬが、しまひには主人と賓客との間の威儀について心を用ひらるるがよろしい。いま戎馬がさかんで天宇がくらい。ああ君とはこれが生き別

れだ。つらいことだ。』

北風

北風破南極。朱鳳日威垂。
洞庭秋欲雪。鴻雁將安歸。
十年殺氣盛。六合人煙稀。
吾慕漢初老。時清猶茹芝。

【字解】【一】破　吹破、つよく吹くをいふ。【二】朱鳳　朱羽の鳳凰。【三】威垂　威勢の揚がらざるをいふ。【四】十年　大略にていふ、乾元元年入蜀よりかぞふれば大曆四年にて十二年となるなり。【五】六合　前篇にみゆ。【六】漢初老　商山の四皓をいふ、已に屢〻見ゆ。【七】茹　くらふ。

【題義】北風の吹くをり感じたることをのぶ。大曆四年秋、潭州にての作。

【詩意】北風が南極を破らんばかりつよく吹き、朱色の鳳凰は日に日に威勢が揚がらなくなつてゐる。洞庭では秋、雪がふらうとしてをる、鴻雁はどこへ歸るつもりなのであらう。十年このかた殺氣が盛で、上下四方どこをみても人家の煙が稀である。漢の初に商山の四皓たちは時世が清らかであつたにかかはらずなほ山で靈芝をとつてたべてゐたといふが、自分は彼等を慕ふものである。

幽人

孤雲亦羣游。神物有所歸。
靈鳳在赤霄。何當一來儀。』
往與惠詢輩。中年滄洲期。
天高無消息。棄我忽若遺。
內懼非道流。幽人見瑕疵。』
洪濤隱笑語。鼓枻蓬萊池。
崔嵬扶桑日。照曜珊瑚枝。
風帆倚翠蓋。暮把東皇衣。
嘯漱元和津。所思煙霞微。』
知名未足稱。局趣〔促〕商山芝。
五湖復浩蕩。歲暮有餘悲。』

【字解】【一】羣游　むらがりてさまよふ。【二】神物　龍をさす。朱注は首二句の關係を「雲は龍に從ふ」の考にてときたり。余は

龍は雲の在る處にかへることをいへるものとみる。【三】歸　おちつく。【四】何當　何は何時。【五】來儀　容體振つて來ること、語は「尙書」にみゆ。【六】往　往日、往年。【七】惠詢輩　惠詢は慧遠と許詢なりとの說あり、朱注は「送惠二過東溪」詩により惠二の名が或は詢ならんかといへり。何人なるか定めがたし。但その仙道を學びしものなることを推すべきのみ。【八】中年　少老の中間のとし、四十歲がらまりをいふ。【九】滄洲期　滄洲は仙境、期は會合の約束ありしをいふ。【一〇】遺　遺忘。【一一】內懼　內心におそる。【一二】道流　道敎を奉するともがら。【一三】幽人　幽靜にふける人、惠詢が徒をさす。【一四】瑕疵　きず。【一五】隱笑語　笑語のさまが見えざるをいふ。【一六】鼓枻　かぢをうごかす。【一七】蓬萊池　蓬萊の仙山の池。【一八】崔嵬　たかき貌。【一九】扶桑　枝のささへあへる桑、山海經にいふ、扶桑は日の出づる暘谷に生ず、九日は下枝に、一日は上枝に居り、皆烏を載す、と。【二〇】翠蓋　翠羽を以て飾りしかさ、舟に建つるもの。【二一】東皇　日の神、屈原の九歌に、東皇太一の歌あり。【二二】嘯漱　のみ口そそぐ。【二三】元和津　黃庭經の注に、口中の液水を玉津といふとし、中黃經に、津液を元和といふことみゆ。元和の津とは口中のつばきをいふ。此句まで道友のさまをいふ。【二四】所思　道友をさす。【二五】煙霞微　煙霞の微なるにへだてらるるをいふ。【二六】知名　世人に名を知らるること。【二七】局趣　趣は促、局促なり、かがまる、こせつくこと。【二八】商山芝　四皓の採りし芝。【二九】五湖　洞庭を知らぬをいふ。【三〇】浩蕩　煙波のひろくうごくさま。【三一】餘悲　悲しみきれぬかなしみ。

【題義】幽靜にふける人をおもひし詩。大曆四年秋、潭州にての作なるべし。

【詩意】ひとひらうかんでゐる雲でもまたむらがつてさまよふことがある、するとそこへふしぎな龍の如き神物が來ておちつくのである。ところが靈鳳はいま赤い霄のうへにをるが、これはいつになつたら地上へおりて容體をさらすことだらう。』自分はまへかた惠詢などと中年ながら滄洲の仙境にゆかうと約束してあつた。ところが秋天は高いが彼からの消息は無い、彼は我を棄てること忽ちうちわすれたかの樣である。自分はもと道家のなかまではないから、幽靜にふける人からきずあるものとしていやがられはせぬかと內心おそれてゐる。』彼等道家のなかまの笑語はいま大きな濤からかくされてゐる、彼等は蓬萊の池でかぢをうごかしてゐる、扶桑からのぼる太陽は高く懸つて珊瑚の枝を照らしてかがやいてゐる。舟中にたてた翠蓋によりそうて風を孕んだ帆を揚げつつ、彼等は暮には日の神の衣にすがり、元和の氣を含んだ玉の唾をのみこんでゐる、吾がなかまはこんなことをしてゐるが、吾が思ふ彼等をここから望んでもただ微に煙霞がうかんで見えるばかりだ。』商山の四皓は山の中で靈芝を採つてゐたが、あれなどはまだこせついた仕業だ、あんなことで世間に名を知られてゐることなどはほめたはなしではない。いま五湖（洞庭）にはまた煙波が浩蕩としてうごいてゐる、自分は之をみては歲の暮にあたつて悲しんでも悲しみきれぬかなしさがある。（早く仙境へたどりつけぬのがかなしいの意）。』

江漢

江漢思歸客。乾坤一腐儒。
片雲天共遠。永夜月同孤。
落日心猶壯。秋風病欲蘇。

江漢歸るを思ふ客、乾坤一腐儒。
片雲に天と共に遠く、永夜に月と同じく孤なり。
落日に心猶ほ壯に、秋風に病蘇せむと欲す。